

平成 27 年度
プロダクティブ・エイジング実現に向けた
「まちの居場所」の役割と可能性
～岩手県大船渡市「居場所ハウス」の取り組みから～

一般財団法人長寿社会開発センター
国際長寿センター

平成 27 年度
プロダクティブ・エイジング実現に向けた
「まちの居場所」の役割と可能性
～岩手県大船渡市「居場所ハウス」の取り組みから～

一般財団法人長寿社会開発センター
国際長寿センター

刊行にあたって

我が国においては、団塊世代が75歳以上となる2025年には、単身高齢者、夫婦のみ高齢者世帯が増加し、認知症高齢者も増えていくことが予想されています。この中で、介護が必要な状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けていくことが出来る地域づくりが重要な課題となっています。

介護保険の改訂により、新総合事業が地域においてはじまろうとしています。NGOやボランティアなどインフォーマルな支援のしくみ、特に高齢者が高齢者を支える互助のしくみが大きく広がってきています。

その一つとして、コミュニティ・カフェなどの地域の「居場所」があります。

血縁や地縁が希薄になり、地域にネットワークがない高齢者にとっては、集まる「場」の存在が重要になってきています。「居場所」によって新たな関係性が構築され、高齢者が地域で主体となって知識と経験を活かしながら活躍する可能性が広がりつつあります。

本研究では、東日本大震災によってかつての地縁・血縁が急激に断絶されてしまった岩手県大船渡市末崎町で、震災後につくられた「ハネウエル居場所ハウス」に注目してみました。

大船渡市末崎町では、長期にわたる仮設住宅での生活や、生活再建のための高台移転など、住民がかつての地域から離散してしまい、精神的・物理的なつながりが薄れてきています。

ここに、「ハネウエル居場所ハウス」という新しい「場」が外部から提供されることにより、結びかけた関係が新しい「かたち」で編み直され始めています。

本研究では、現地の仮設住宅に居住しながら「ハネウエル居場所ハウス」に計画段階から関わってきた特定非営利活動法人Ibasho Japan 副理事長の田中康裕氏（東京大学大学院経済学研究科特任研究員）に、現在までの運営状況と変化を丁寧に検証していただくと同時に、新たなネットワークづくりと意識変革、およびプロダクティブ・エイジングの実現に向けた互助のしくみのあり方について考察していただきました。

本研究にご尽力いただきました田中康裕氏およびご協力くださったハネウエル居場所ハウスに集う地元の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成28（2016）年3月

国際長寿センター（日本）
代表 水田邦雄

目次

刊行にあたって	p3
はじめに	p7
第1章. 背景と目的	p11
1-1. 各地に開かれる「まちの居場所」	
1-2. 「まちの居場所」における公共性	
1-3. 本レポートの目的	
第2章. 「居場所ハウス」の概要	p15
2-1. プロジェクトの始まり	
2-2. 「居場所ハウス」オープンまでの経緯	
2-3. 大船渡市末崎町の概要	
2-4. 「居場所ハウス」の周辺	
2-5. 「居場所ハウス」の運営	
2-6. 「居場所ハウス」の建物	
2-7. 「居場所ハウス」と公民館・集会所との違い	
第3章. 「居場所ハウス」の来訪者	p35
3-1. 来訪者数の推移	
3-2. 来訪者・運営メンバーの属性	
3-3. 来訪者・運営メンバーの住まいと居住地	
3-4. 来訪者・運営メンバーの特徴	
第4章. 「居場所ハウス」における人々の関係	p43
4-1. 「居場所ハウス」への関わり	
4-2. 緩やかな主客の関係	
4-3. 「居場所ハウス」で築かれる人々の関係	
4-4. 「居場所ハウス」を介した広がりのある関係	
第5章. 「居場所ハウス」の運営体制の変化	p49
5-1. 理事会と定例会	
5-2. オープン直後の運営体制	
5-3. 運営体制の変遷	
5-4. 定例会	
5-5. オープンまでに開催されたワークショップ・会議の参加者	
5-6. 地域外からの働きかけで始まるプロジェクトが抱える難しさ	

第6章. 「居場所ハウス」で行われる行事・活動	p69
6-1. 「居場所ハウス」の行事・活動	
6-2. 転機となった行事・活動	
6-3. 農園・朝市・食堂の運営	
6-4. 行事・活動の変化	
6-5. 運営体制と行事・活動の変化	
第7章. 徐々に作りあげられていく場所	p87
7-1. 建物内における手を加える行為	
7-2. 屋外・敷地内における手を加える行為	
7-3. 敷地外における手を加える行為	
7-4. 試行錯誤により徐々に場所を作りあげることの意味	
第8章. 「まちの居場所」の役割と可能性	p97
8-1. 「居場所ハウス」が生み出していること	
8-2. 「まちの居場所」をしつらえる	
8-3. 「居場所ハウス」のこれから	
注	p107
参考文献・資料	p117
アンケート調査の概要	p119

はじめに

2000年頃から各地にコミュニティ・カフェ、まちの縁側、ふれあいの居場所、サロン、パブリックシェルターなどの場所が開かれるようになりました。これらの場所を、このレポートでは「まちの居場所」と呼ぶこととします。「まちの居場所」は不登校、引きこもり、遊び場の不足、育児をする親の孤立、虐待、貧困、退職後の地域での暮らし、介護、都市の空洞化、商店街の空シャッター街化、地方の人口減少などの切実な、けれども、従来の制度・施設の枠組みでは十分に対応できない課題に対して、地域の人々自らが向き合い、乗り越えようとする中から生まれてきた場所だと捉えることができ、今では1つの大きな流れを作っています。

このレポートでは「まちの居場所」の1つとして、東日本大震災の被災地である岩手県大船渡市末崎町(まっさきちょう)に開かれた「ハネウエル居場所ハウス」(以下、居場所ハウス)に注目します。「居場所ハウス」は2013年6月13日(木)にカフェスペースとしての運営をスタートし、日常的に地域の人々が集まる場所になっていますが、ひな祭り、鯉のぼり祭り、納涼盆踊り、クリスマスなどの季節ごとの行事を開催したり、郷土食や生花などの教室を開催したり、周囲には商店や飲食店がほとんどないという地域の状況をふまえ朝市や食堂の運営を行うなど、カフェスペースにはおさまり切らない多様な活動を展開するようになりました(表0-1, 写真0-1～16)。東日本大震災の後、ワシントンDCの非営利法人Ibashiの呼びかけをきっかけとして開かれた場所で、オープン後は地域の人々を中心メンバーとするNPO法人・居場所創造プロジェクトが運営を担っています。

「居場所ハウス」は、Ibashiが提唱する8つの理念に基づいて運営しています。

- ① 高齢者が知恵と経験を活かすこと (Elder Wisdom)
- ② あくまでも「ふつう」を実現すること (Normalcy)
- ③ 地域の人たちがオーナーになること (Community Ownership)
- ④ 地域の文化や伝統の魅力を発見すること (Culturally Appropriate)
- ⑤ 様々な経歴・能力をもつ人たちが力を発揮できること (De-marginalization)
- ⑥ あらゆる世代がつながりながら学び合うこと (Multi-generational)
- ⑦ ずっと続いていくこと (Resilience)
- ⑧ 完全を求めないこと (Embracing Imperfection)

現在社会において生産活動から引退し、面倒をみてもらう存在だと見なされる傾向にある高齢者が、何歳になっても役割を担いながら地域に住み続けること、そして、高齢者も交えた世代を越えた関係を築くことを目指す「施設でない場所」として生まれたのが「居場所ハウス」です。「居場所ハウス」の試みからは、プロダクティブ・エイジング(生涯現役社会)の実現にあたって多くを学べると考えています。

筆者は、「居場所ハウス」がオープンする数ヶ月前の2013年3月末に初めて大船渡市末崎町を訪問しました。2013年5月からは大船渡市内で、2015年9月からは「居場所ハウス」の近くにある山岸応急仮設住宅での生活を始め、「居場所ハウス」の日々の運営に携わりながら3年弱のフィールドワークを続けています。大船渡市を留守にすることはありますが、現在も山岸応急仮設住宅での暮らしを続けています。

このレポートは、「居場所ハウス」の歩みを振り返ることを通して、「まちの居場所」の役割と、それを実現するために共有しておくべき価値を明らかにすることを目的としています。プロダクティブ・エイジング（生涯現役社会）に加えて、居場所、地域包括ケア、地方創生、復興、地域開発など現在社会では様々なキーワードが掲げられていますが、各地で行われている一つひとつの取り組みを丁寧に描くことを通してしか、これらの可能性や課題についての議論を深めていくことはできません。このレポートがその議論の1つのきっかけになればと考えています。

加えて、大船渡市末崎町の方々にとって、「居場所ハウス」の歩みを振り返り、「居場所ハウス」が生み出してきたものを共有するための資料になることも、このレポートの目的です。この点については用語、文体、誌面レイアウトについて工夫の余地があると思いますが、大船渡市末崎町にとって意味ある資料になればと考えています。

大船渡市末崎町で生活をしながらフィールドワークを続けるにあたっては、「居場所ハウス」の皆様、山岸応急仮設住宅の支援員・居住者の皆様、大船渡市末崎町の皆様には多大なるご協力を受けました。

2014年に実施したアンケート調査は、ワシントンDCの非営利法人Ibashaと米国パデュー大学との共同研究であり、世界銀行防災グローバル・ファシリティ（GFDRR）からの補助を受けて実施したものです。調査の実施にあたっては「居場所ハウス」の皆様、大船渡市立末崎小学校の教職員・児童の保護者の皆様、末崎中学校の教職員・生徒の保護者の皆様、大船渡市内の仮設住宅の支援員・居住者の皆様、大船渡市役所職員の皆様、医療法人勝久会の職員の皆様、社会福祉法人典人会の職員の皆様、東北大学災害科学国際研究所の井内加奈子准教授のご協力をいただきました。

調査結果の分析、及び、レポートの執筆においては、ワシントンDCの非営利法人Ibasha代表／NPO法人Ibasha Japan理事長の清田英巳氏、NPO法人Ibasha Japanの皆様、日本建築学会環境行動研究小委員会の皆様、国際長寿センター日本(ILC Japan)の皆様をはじめ、多くの方々との議論がベースになっています。

お世話になった方々に、この場を借りて感謝の意を表します。

(表 0-1) 「居場所ハウス」基本情報 (2015年12月現在)

オープン		2013年6月13日(木)
運営日時	カフェスペース	10時～16時(事前の予約で21時まで)
	食堂	11時～13時半
	朝市	毎月第3土曜の9時～12時
	定休日	木曜
メニュー	カフェ	コーヒー、ハーブティ、ゆずティー、カルピス、ソフトクリーム、かき氷
	昼食	うどん、そば、カレーライス、焼き鳥丼、中華飯、週替わりランチなど
運営主体	名称	NPO法人・居場所創造プロジェクト
	設立	2013年3月8日(金)
スタッフ	月・火・金曜	3人のパートメンバーが2人ずつ交代で運営
	水曜	3人のパートメンバーが2～3人で、ボランティアで運営
	土曜	「おたすけ隊」のメンバー3～4人がボランティアで運営
	日曜	コアメンバーが週替わりで1～2人ずつボランティアで運営



(写真 0-1) 居場所ハウスには様々な人々が訪れる



(写真 0-2) 屋外で過ごす人々



(写真 0-3) 子どもたちも遊びにやって来る



(写真 0-4) 遊びに来た親子



(写真 0-5) サンマ料理教室



(写真 0-6) 囲碁教室 (手前)、郷土食の教室 (奥)



(写真 0-7) 食事会



(写真 0-8) 屋外のキッチンスペースでの調理



(写真 0-9) 見学にやって来た小学生



(写真 0-10) 年末の大掃除



(写真 0-11) 行事の準備をする男性



(写真 0-12) 居場所農園での作業



(写真 0-13) 収穫した野菜を販売する準備



(写真 0-14) 朝市



(写真 0-15) NPO 法人の総会



(写真 0-16) 運営のための定例会

第1章. 背景と目的

1-1. 各地に開かれる「まちの居場所」

本レポートでは大船渡市末崎町に2013年6月13日(木)にオープンした「居場所ハウス」を取り上げる。「居場所ハウス」は東日本大震災をきっかけとして開かれた場所であるが、2000年頃から各地に様々なタイプの「まちの居場所」が開かれているという大きな流れの中に位置づけることができる。「はじめに」でも書いたように、「まちの居場所」は不登校、引きこもり、遊び場の不足、育児をする親の孤立、虐待、貧困、退職後の地域での暮らし、介護、都市の空洞化、商店街の空シャッター街化、地方の人口減少などの切実な、けれども、従来の制度・施設の枠組みでは十分に対応できない課題に対して、地域の人々自らが向き合い、乗り越えようとする中から生まれてきた場所だと捉えることができる。「まちの居場所」が開かれるきっかけは多様であるが、それを常設的な場所として運営するための条件として、藤本(2012)は「物理的な場所があること」、「常設であること」、「誰でも気軽に利用できること」、「好きなききに自由に利用できること」の4つをあげている。「まちの居場所」は対象者、利用目的、利用時間、利用内容が限定されていない日常の場所だと捉えることができる。

「まちの居場所」の正確な数は把握されていないのが現状であるが、例えば、「この10年近くの間」に全国に広がり、その数は2000とも3000とも言われる(浅川, 2015)、「コミュニティカフェは全国に3万カ所以上あると推定している」(昆布山, 2015)、新潟だけでも「居場所と言われるものは、二千三百ほどある」^{*1-1)}と指摘されており、これらの指摘からは非常に多くの場所が開かれていると考えることができる^{*1-2)}。

大分大学福祉科学研究センター(2011)は2011年に全国の166カ所のコミュニティ・カフェを調査し^{*1-3)}、コミュニティ・カフェの特徴として9割以上が2000年以降に開かれていること、自治体が設置した場所は約1割あるが、自治体が運営している場所はないこと、運営主体はNPO法人・個人・任意団体が多いこと、8割弱が住宅街か商店街で運営されていること、半数以上が20坪(約66㎡)と小規模であること、飲食スペースを中心に展示スペース、販売スペースが基本的な空間構成となっていること、運営日数は月に16日以上運営しているのが約75%、月に26日以上運営しているのが約15%であることなどを明らかにしている。

「居場所ハウス」の詳細は次章以降でみていくが、NPO法人として運営していること、カフェスペースの運営を中心に行っていることは大学福祉科学研究センターがあげる平均的なコミュニティ・カフェの特徴に当てはまる。ただし、「居場所ハウス」は延床面積が約115㎡と規模が大きく、週に6日という運営日数は平均より多いという特徴がある。また、震災後に海外からの働きかけをきっかけとして生まれたという点は、特殊な事例だと言ってよい。

「まちの居場所」でキーワードになっているのが居場所という言葉である。居場所とは元々、物理的にいる空間を意味する言葉であったが^{*1-4)}、1980年代になってから不登校との関連でしばしば使われるようになり^{*1-5)}、近年では年代や性別を問わず様々な場面で使われるようになっている。居場所をタイトルに含む図書の出版数の推移をみると(図1-1)、居場所をタイトルに含む図書は1980年代の中頃から継続的に出版されるようになってきている。1990年の後半以降には出版数が増加し、年間で10冊以上出版されるようになってきていることがわかる。出版数が最も多いのは2006年の23冊である。

居場所は様々な意味で使われているが、大きく分けて、①ゆつくりできる、安心できること、②自分の力が発揮できる、役割があることの2つの意味があるとされる^{*1-6)}。居場所をキーワードとして近年開かれている「まちの居場所」は、これに対応した2つの役割を担うことが目指されていると考え

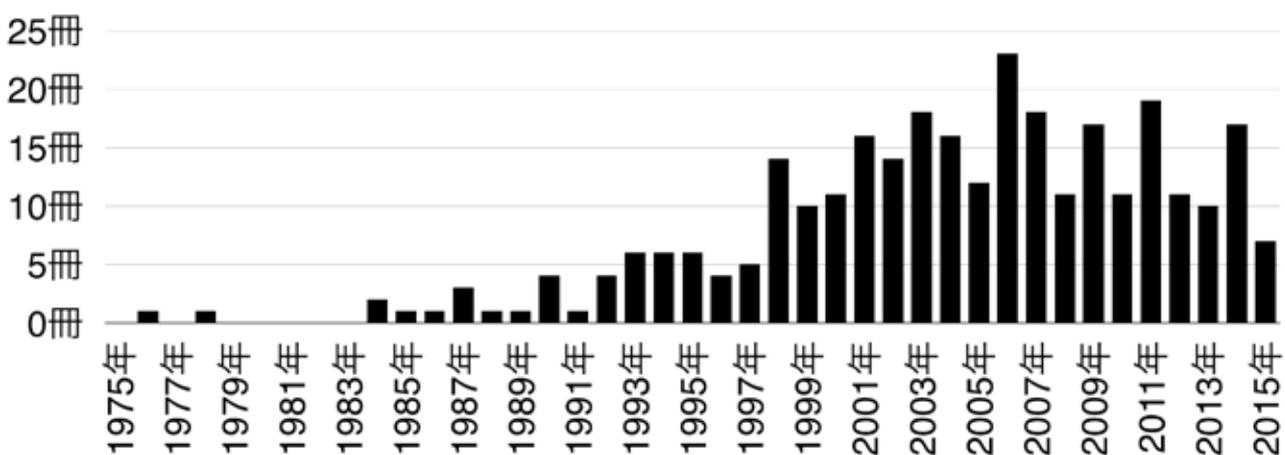
ることができる。①気軽に立ち寄って思い思いに過ごせる場所、見守りや助け合いが行われる場所と、②人々が何らかの役割を担える場所、様々な活動ができる場所という役割である。重要なことは、2つは「まちの居場所」の両側面であり、これらを両立させることが大切だということである。即ち、「まちの居場所」は決して安い値段でコーヒーが飲めるカフェではないし、あらかじめ決められたプログラムに参加する人々だけが集まる公民館やカルチャーセンターでもない。「まちの居場所」が目指すのは地域の人が個々に楽しんだり、生き生きしたりすることではなく、地域の人々が日常的に集まれる場所自体を、地域の人々が作りあげていくことで、豊かな暮らしを実現していくことである。居場所とは個人の中で完結するのではなく、他者との関係において実現されるものなのである。

1-2. 「まちの居場所」における公共性

大分大学福祉科学研究センター（2011）による調査で明らかにされていたように、「まちの居場所」は行政ではなくNPO法人、個人、任意団体によって運営されている場所が多い。

齋藤（2000）は、公共性という言葉がもつ意味として「国家に関する公的な (official) ものという意味」、「特定の誰かにではなく、すべての人びとに関係する共通のもの (common) という意味」、「誰に対しても開かれている (open) という意味」の3つをあげている。これを受け、小松（2010）は「まちの居場所」は「ある一定の範囲内の共通 (common) 課題を扱い、その範囲内では利用や運営の仕組み、物理的な空間が柔軟に開かれている (open) とみなせる。つまり、地域住民が求める公共の場のあり方の一端を運営者が自ら実現したものとしてみなすことができる」ものであり、「officialの機関として、提供サービスの一定水準の確保と平等な配分がまず前提となるこれまでの公共施設とは対照的な存在であると言える」と指摘する。大分大学福祉科学研究センター（2011）の調査でも自治体が設置した場所は約1割あるものの、自治体が運営している場所はないことが明らかにされていたように「まちの居場所」は国家に関する公的な (official) ものではないところ、言わば、草の根の動きとして立ち上がり、運営されているところに特徴があると言える。

しかし、このことは「まちの居場所」が私的な営みであることを意味しない。橋（2010）は「公共性のOpenやCommonという意味に注目してみると、個人と公共とは決して対立するものではなく、



※ 2016年1月18日にCiNii Books (<http://ci.nii.ac.jp/books/>)で「タイトル：居場所」「資料種別：図書・雑誌」の条件で検索した結果。ヒット数は305件。

(図 1-1) タイトルに「居場所」含む図書の出版数

個と公共とが互いに支え合う関係にある」と指摘しているが、これをふまえれば「まちの居場所」とは「自立した個人の参加によって」公共を作り出そうとする動きだと捉えることができる。「まちの居場所」は公共とは何か、個人と公共はどのような関係にあるのかについても問いを投げかけている。

1-3. 本レポートの目的

2000年頃から草の根の動きとして各地に開かれてきた「まちの居場所」は、現在、高齢者介護予防の観点からも注目され始めている。「要支援の通所・訪問サービスを自治体の事業に移管し、多様化を図る」新しい介護予防・日常生活支援総合事業においては、「住民主体の多様なサービスづくりが目指されており、コミュニティ・カフェもメニューの1つにあげられ」ているのである（昆布山, 2015）。こうした国家に関係する公的な (official) ところからの動きに対して、浅川 (2015) は「ボランティア活動はもともと純粋に自主的なもの。介護保険制度の補完的な役割に位置付けられるのはおかしい。行政の下請けになってしまう」というボランティア関係者の声を紹介し、コミュニティ・カフェが「安上がりの介護」の受け皿とされる可能性があることを懸念している^{*1-7)}。

高齢化のさらなる進展、人口減少を迎える社会においてプロダクティブ・エイジング（生涯現役社会）を実現していく上で、「まちの居場所」は大きな可能性をもつ。しかし、それは浅川が指摘するように、「まちの居場所」が「安上がりの介護」の受け皿とされることでは決してない。草の根の動きとして立ち上がり、運営されてきた「まちの居場所」を国家に関係する公的な (official) ものの受け皿として位置づけることで、「まちの居場所」の豊かな意味が損なわれてしまう恐れがあるからである。

草の根の動きに対して国家に関係する公的な (official) ものとの関わりを強制することはできないが、両者の連携のあり方にどのような可能性があるかを探ることは重要だと考える。そのためには迂遠ではあるが、「まちの居場所」はどのような場所なのかという実態を、具体的な取り組みを通して把握する作業が必要である。

本レポートでは、「居場所ハウス」におけるフィールドワーク^{*1-8)}、2014年10月に大船渡市民を対象とするアンケート調査^{*1-9)}の結果をもとに、「居場所ハウス」のこれまでの歩みを検証することにより、「まちの居場所」がもつ意味と、それを実現するためにどのような価値を共有する必要があるかを考察することを目的とする。

第2章. 「居場所ハウス」の概要

本章では、「居場所ハウス」がどのような経緯を得てオープンしたのか、オープン後どのような運営がなされてきたのかをみる。また、「居場所ハウス」のある大船渡市末崎町についても概観する。

2-1. プロジェクトの始まり

「居場所ハウス」は東日本大震災後、ワシントン DC の非営利法人 Ibasho の提案がきっかけとなり生まれた場所である（表 2-1）。

(表 2-1) 「居場所ハウス」略年表（オープン前）

年	月	日	曜日	出来事
2011	3	11	金	東日本大震災
	3	17	木	米国 Ibasho 代表の EK さんがワシントン DC で行ったレクチャーで、被災地の高齢者支援について言及
	3	22	火	レクチャーの参加者を通してオペレーション USA が EK さんにコンタクト。オペレーション USA は東日本大震災の被災地でのプロジェクトを計画していた
	3	24	木	ハネウエル社が Ibasho の EK さんにコンタクトをとる。高齢者支援の場所作りを提案したハネウエル社に対して、Ibasho は高齢者のための支援ではなく、「高齢者が役割をもてる機会を作る」というコンセプトでプロジェクトを行うことを提案
	11			Ibasho 代表の EK さんが、以前からの知人であった大船渡市の社会福祉法人 T 専務理事の YU さんに大船渡市・陸前高田市でのプロジェクト実施の可能性を打診
	12			大船渡市・陸前高田市で、Ibasho のコンセプトに基づくプロジェクトを行うことを確認
2012	1	12	木	9ヶ月の協議を経て、Ibasho の提案が Operation USA のプロジェクトとして正式に認可
	2	13	月	Ibasho の EK さん、Operation USA の SF さんらがプロジェクトの候補地として大船渡市・陸前高田市の 5 地域を訪問。大船渡市末崎町では（当時の）末崎地区公民館長 HK さんを訪問。大船渡市長を訪問し、市の理解・協力を依頼。5 地域を訪問した結果、大船渡市末崎町でプロジェクトを行うこととなる（～2月18日（土））
	2			Ibasho の EK さんが、スリランカのプロジェクトを一緒に行ったこともある H 大学大学院の SM 教授に基本設計を依頼
	4	27	金	大船渡市復興ワーキングチーム会議にて、プロジェクトが重要なテーマの 1 つとして取り上げられる
	5	8	火	Ibasho の EK さん、Operation USA の SF さん、ハネウエル社の担当者らが大船渡市長の訪問、プロジェクト候補地の視察を行う（～5月18日（金））
	5	14	月	ワークショップ（居場所カフェの理念・イメージを共有する）を開催
	5	16	水	ワークショップ（メニューを考える）を開催
	7	11	水	ワークショップ（運営・建物を考える）を開催
	8	7	火	プロジェクトの敷地所有者と土地契約を結ぶ
	9	15	土	NPO 法人・居場所創造プロジェクト、設立総会を開催。「居場所ハウス」の名称が決まる
	10	16	火	地域説明会を開催
	10	24	水	地鎮祭を開催
10	25	木	ワークショップ（運営・建物を考える／自分にできることを見つける）を開催	
12	7	金	ワークショップ（自分にできることを見つける）を開催	
2013	3	8	金	「居場所ハウス」の運営団体、NPO 法人・居場所創造プロジェクト設立。設立時の理事は（当時の）末崎地区公民館長の HK さん、Ibasho 代表の EK さん、社会福祉法人 T 専務理事の YU さんの 3 人
	3	27	水	NPO 法人・居場所創造プロジェクト、平成 24 年度社員総会を開催
	5	8	水	ワークショップ（自分にできることを見つける）を開催
	5	15	水	鍵引き渡し
	5	27	月	NPO 法人・居場所創造プロジェクト、平成 25 年度第 1 回社員総会を開催
	6	10	月	NPO 法人・居場所創造プロジェクト、平成 25 年度第 2 回社員総会を開催
6	13	木	「居場所ハウス」オープニングセレモニー	

※略年表は、NPO 法人・居場所創造プロジェクト平成 24 年度事業報告書、北海道大学大学院の修了生の蒔苗沢子氏の記録等をもとに作成した。

Ibashi は、米国在住の日本人女性 EK さんが 2008 年からボランティアで活動を初め、2011 年 1 月にアメリカ合衆国内国歳入庁から 501(c)3 (非営利法人) の認証を受けた団体であり、高齢者が介護を受けるだけの存在と見なされるのではなく、何歳になっても知恵や経験をいかしながら地域で暮らし続けることができる社会の実現と、そのために「歳をとること」の概念を変えていくことを目的とする活動を続けている^{*2-1)}。

東日本大震災から 1 週間も経たない 2011 年 3 月 17 日 (木)、Ibashi 代表の EK さんがワシントン DC で行った講演で、被災者の高齢者支援の可能性について言及した。翌週、講演の参加者を介して、世界各国の被災地でのプロジェクトを行う国際 NGO オペレーション USA^{*2-2)} が EK さんにコンタクトをとる。オペレーション USA には東日本大震災の被災地でプロジェクトを行う計画があり、プロジェクトの資金は米国の航空宇宙関連の大企業であるハネウェル社の社会貢献部門である「ハネウェル・ホームタウン・ソリューションズ」の基金^{*2-3)} があてられる話が出されていた。当初、ハネウェル社からは被災地の高齢者支援のための施設として診療所が提案されたが、これに対して Ibashi は高齢者が役割をもてる機会を作るというコンセプトでプロジェクトを行うことを提案し、合意にいたった。

2011 年 11 月、EK さんは、プロジェクトの提案書を作りあげる過程で、以前からの知り合いだった大船渡市の社会福祉法人 T の YU さんに、被災地でのプロジェクト実施の可能性を打診する。居場所作りの必要性を感じていた YU さんらとの検討の結果、大船渡市、または、陸前高田市でプロジェクトの候補となる地域をいくつか紹介するという連絡があり、Ibashi のコンセプトに基づくプロジェクトを進めることを確認した。

2012 年 1 月、Ibashi の提案が正式にオペレーション USA のプロジェクトとして認可される。これ以降、オペレーション USA がプロジェクトマネジメントを担当するかたちで、プロジェクトが進められていく。提案書の中でプロジェクトを実施する地域は、①地域のリーダー、及び、住民の協力が得られること、②地域でプロジェクトのコーディネートをしてくれる団体がいること、③津波の浸水区域ではないこと、④高齢化が進んでいることの 4 つの基準で選定することが決められていた。

2-2. 「居場所ハウス」オープンまでの経緯

2012 年 2 月、Ibashi の EK さん、オペレーション USA の SF さんらはプロジェクトの候補地として大船渡市と陸前高田市の 5 地域を訪問。この訪問の際、当時の末崎地区公民館長であった HK さんと出会う。5 地域の訪問の後、先にあげた 4 つの基準をふまえて末崎町でプロジェクトを行うことが決められた。

2012 年 5 月から実際にプロジェクトがスタートすることになる。5 月 14 日 (月) に最初のワークショップが開催されて以降(写真 2-1 ~ 2)、2013 年 5 月 8 日 (水) までの 1 年以上をかけて末崎町の人々を交えた計 6 回のワークショップが開催された。高齢者が役割をもてる機会を作ることがコンセプトであったため、ワークショップではまず従来の高齢者施設とプロジェクトで作る場所は何が違うのかについてイメージを出し合ったり、Ibashi が提唱する 8 理念 (図 2-1 ~ 2) を共有したりすることから始められた。その後、メニュー、運営内容、建物について意見交換したり、自分がどのような役割を担えるかを紹介し合ったりすることが行われた。

ワークショップと並行して、Ibashi、オペレーション USA、社会福祉法人 T のメンバーらを中心として敷地の選定も行われた。当初、大船渡市から金銭的な補助を受けることも視野に入れて、末崎地区サポートセンター^{*2-4)} の建設予定地に併設する案が出されていた。しかし末崎地区サポートセンター建設予定地の面積が不足していたため計画を変更。末崎地区サポートセンターの敷地以外では大船渡市

●**高齢者が知恵と経験を活かすこと (Elder Wisdom) :**

今の社会では、高齢者は周りに迷惑をかける人、面倒をみてもらう人だと思われがち。けれども、豊かな知恵や経験をもつ高齢者は、地域にとってかけがえのない財産。高齢者が頼りにされ、自信を持てるようにしよう。

●**あくまでも「ふつう」を実現すること (Normalcy) :**

誰かが管理し過ぎたり、がんじがらめの規則があったり、時間ごとにスケジュールが決められていたりする施設ばかりじゃ、暮らしは窮屈になる。誰にも強制されず、いつでも気軽に立ち寄れて、何となく好きなことができる、そんな「ふつう」の場所にしよう。

●**地域の人たちがオーナーになること (Community Ownership) :**

誰かがやってくれると受身になるのではなく、地域の人たちが良いことも、悪いことも引き受ける「当事者」になって場所を作っていきたい。みなで知恵や力を出し合い、助け合って、地域の自慢の場所にしよう。

●**地域の文化や伝統の魅力を発見すること (Culturally Appropriate) :**

地域には独自の文化や伝統がある。日々の生活ではあまり意識しなくても、じっくり見つめればたくさん魅力に気づくはず。他を真似せずに、地域ならではの魅力を発見していこう。

●**様々な経歴・能力をもつ人たちが力を発揮できること (De-marginalization) :**

若い人、高齢の人、障がいのある人・ない人、子育て・介護中の人、社会に馴染めないと悩む人など、地域には様々な人が暮らしている。「できないこと」ばかりの弱者と思い込んで孤立しないでいいように、それぞれが「できること」を持ち寄って、互いに支え合おう。

●**あらゆる世代がつながりながら学び合うこと (Multi-generational) :**

同じ世代の人と付き合うのは話も合うし、居心地がいいけれど、同じ世代で固まってるだけじゃもったいない。子どもや若者は人生の先輩である高齢者から、高齢者は新しいことに敏感ですぐ吸収していく子どもや若者からというように、世代を越えて学び合える場所にしよう。

●**ずっと続いていくこと (Resilience) :**

場所を続けていくには「環境」「経済」「人」の3つのつながりを考えよう。それは、暮らしに恵みを与えてくれる自然環境を破壊しないこと、必要なお金を自分たちでまかなうこと、人と人との関係を大切にすること。3つのつながりを大切にしながら、ずっと場所を続けていくこと。そこから、ささやかでもいい、地域や国境を越えたつながりを築いていこう。

●**完全を求めないこと (Embracing Imperfection) :**

初めから完全であることを求めずに、その時々状況に対応しながら、じっくりと、ゆっくりとやっていけばいい。その道のりは地域によって違うはず。だから、今は不完全であることに焦らず、変われるという可能性を信じたい。時間とともに、人とともに、柔らかに歩いていこう。

※ Ibasho は 2008 年の活動スタート時点からこれらの理念に基づいた活動を行っているが、現在の表現（図の表現）が確定したのは 2012 年 4 月である。現在の表現は、2012 年 4 月に Ibasho 代表の EK さんと、認知症をもつ高齢者に対する介護と社会概念の変革を提唱する医師の AP さんがロックフェラー財団から補助を受けて確定させた。なお、8 理念の日本語訳は清田ほか（2014）による。

（図 2-1）ワシントン DC の非営利法人「Ibasho」の 8 理念

Ibasha カフェのコンセプトについて

世界規模での高齢者数の急速な増加に伴い、高齢者が安心して暮らせる社会の構築が急がれている。先進諸国では、医療、介護、住宅、年金という側面からのサポートを提供することにより、彼らの老後の保障が行われてきた。しかし、これまでの高齢者介護制度は財政的な負担が増大し、少子化現象ももたない国民への負担では抱えきれなくなってきた。また、既存の高齢者介護のあり方と、これから増加していく高齢者の求めるサービスとのギャップが大きく見られる。我々の社会は、これまでに経験したことのない「超高齢社会」に直面していくことになる。

特に日本は世界中のトップランナーとして超高齢社会の解決策を迫られることになる。財政面だけでなく、介護者の不足、地域インフラのアクセシビリティの問題、医療アクセスなど、高齢者問題に対する、高齢者を社会的な負担として捉えている概念を変えていかなければならない

Ibasha カフェは、従来の高齢者介護イコール「高齢者の面倒を見る」といった介護に対する考え方を変え、今後増え続ける高齢者と共生していくという考えに基づいている。Ibasha カフェは、デイサービスやシニアセンターのように「高齢者のためのサービス」といった施設的な考え方ではなく、「普通（ノーマル）」な環境で地域高齢者が主体となり、「地域のためのサービス」を行うことを目的とした居場所作りの一環事業です。

ハネウェル居場所ハウスへの Ibasha カフェ基本理念の導入

大船渡でのハネウェル居場所ハウスが、Ibasha カフェの基本理念と一致するよう、以下の点を軸として環境とサービスの構成を実現する。

- ・高齢者が集まる場所ではなく、地元高齢者が主体となった多世代の地元住民へのサービスであること。
- ・居場所ハウスは、単なる地元の公民館のような集会所ではなく、気軽に立ち寄れてグループが集まる事の出来る「カフェ」であること。（カフェ付きの集会所ではなく、集会所も出来るカフェといったイメージです。）
- ・食堂ではなく、若い人達が行きたくくなるような、古民家を利用した少しおしゃれなカフェであること。（若い人や子供連れの若いお父さんお母さんに来てもらえるような環境）
- ・無料で使用できる集会所ではなく、お金を払ってもいきたくくなるような、美味しい飲み物と手作りの味が楽しめるおしゃれなカフェの機能を持つこと。
- ・子供が立ち寄りたいたいと思える環境とサービスを提供すること。
- ・認知症の方やその家族が気軽に立ち寄れる場所を提供すること。
- ・この場所は、自宅から出て立ち寄る「出先の目的地」のコンセプトをとっており、“家”のコンセプトではないこと。
- ・仮設住宅の住民の憩いの場所としての機能を果たし、仮設住宅に住む高齢者がサービス提供者としての役割に参加できること。

※ 2012年10月24日（水）に開催された地鎮祭での「Ibasha」のプレスリリースを元に作成。

(図 2-2) 「Ibasha」の理念と「居場所ハウス」

からの補助が出ないことになり、ハネウエル社からの基金のみで建設することとなった。ハネウエル社の担当者も交えて、末崎地区サポートセンター付近の候補地を検討した結果、高台移転の敷地に近いことなどを考慮し現在の敷地でプロジェクトを行うことが決定した。

建物は、社会福祉法人 T の YU さんの知人で、米国のメンバーの訪問時に通訳を務めた MO さんから古民家を提供してよいという申し出があった。陸前高田市気仙町で昭和 32 年（1957 年）に建設された民家であり（写真 2-3）、「居場所ハウス」はこの民家を移築・再生したものである。建物の基本設



(写真 2-1) 第 1 回目のワークショップ



(写真 2-2) 第 1 回目のワークショップでは「居場所カフェ」のイメージを出し合った



(写真 2-3) 移築前の古民家



(写真 2-4) 建物のデザインの検討



(写真 2-5) 建物の施工



(写真 2-6) 竣工間近の居場所ハウス

計は、EKさんが知人のH大学大学院のSM教授に依頼（写真2-4）。施工は陸前高田市の有限会社Iが担当した（写真2-5～6）。

「居場所ハウス」の運営主体に関しては、NPO法人が新たに立ち上げられることになった。運営を継続するためには特定の個人に依存するのではなく、地域で運営体制を築く必要があるというEKさんの提案によるものである。2012年9月15日（土）にNPO法人・居場所創造プロジェクトの設立総会が開催された。建設する場所を「居場所ハウス」と名づけることは、この設立総会で決められた^{*2-5)}。

NPO法人は2013年3月8日（金）に設立された。設立時の理事は、設立に中心的な役割を担った当時の末崎地区公民館長のHKさん（理事長）、Ibasho代表のEKさん、社会福祉法人TのYUさんの3人である。「居場所ハウス」オープン後はこのNPO法人が運営を担っている。米国からのプロジェクトの地域への受け入れ、NPO法人の設立、オープニングセレモニーなどの事務は社会福祉法人Tが担当した。

2-3. 大船渡市末崎町の概要

「居場所ハウス」に入る前に、「居場所ハウス」のある大船渡市末崎町を概観することとする。大船渡市は三陸海岸南部の代表的な都市の1つで、市の一部は典型的なリアス式海岸となっている。末崎町は、市内に10ある町の1つで、大船渡市の最南端に位置（図2-3）、陸前高田市に隣接している。末崎町はワカメ養殖発祥の地であり、漁業が盛んである（写真2-7）^{*2-6)}。

末崎町の東部は三陸復興国立公園に指定されている碇石海岸があり、穴通磯、乱暴谷展望台（写真2-8）、碇石海岸レストハウス、世界の椿館、大船渡市立博物館などの観光名所・施設が集まっている。しかし、末崎町内には店舗や飲食店がほとんどなく、また、大船渡市と陸前高田市を結ぶ三陸道自動車道・国道45線は末崎町の北端をかすめるように通っているだけであることから、町外の人が末崎町内を通り抜けていくことはあまりない。

2015年9月30日現在の末崎町の人口は4,334人と、大船渡市に10ある町の中で4番目に多い。平均世帯人数は2.86人/世帯であり、大船渡市では三陸町綾里と日頃市町に次いで3番目に多い（表2-2）。市内では比較的人口の多い末崎町ではあるが、その人口は1980年代から減少傾向にある（図2-4～5）。世帯数は近年微増傾向にあったが、2011年の東日本大震災後は減少している（図2-6）。

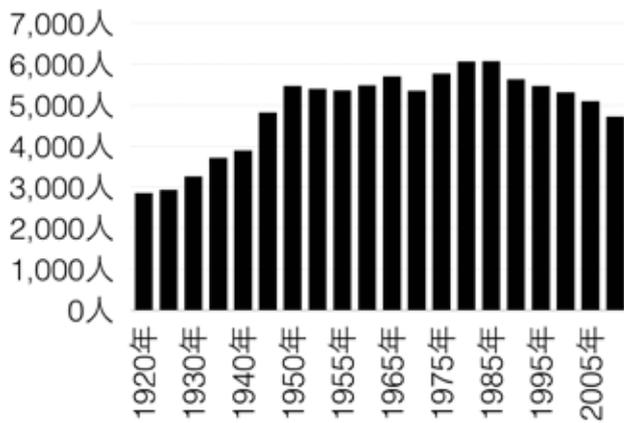


（図2-3）岩手県大船渡市

（表2-2）大船渡市の各町の人口・世帯数・面積

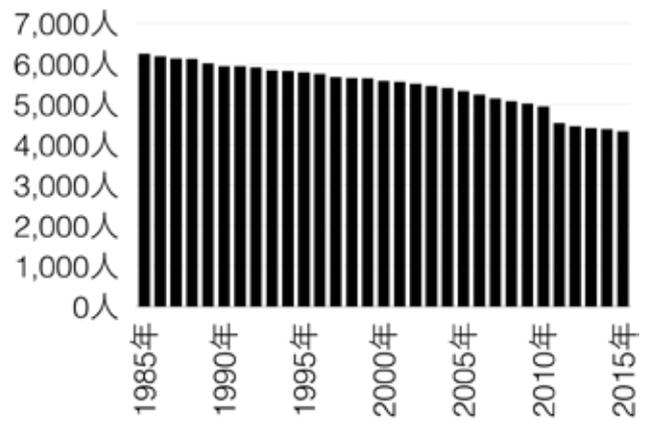
	人口 (人)	世帯数 (世帯)	平均世帯 人数 (人)	面積 (Km ²)
大船渡町	8,431	3,541	2.38	14.38
猪川町	4,856	1,956	2.48	26.43
赤崎町	4,380	1,608	2.72	14.93
末崎町	4,334	1,518	2.86	28.88
立根町	4,316	1,678	2.57	21.89
盛町	3,480	1,515	2.30	5.29
三陸町綾里	2,626	853	3.08	34.78
三陸町越喜来	2,488	998	2.49	53.64
日頃市町	1,978	685	2.89	74.3
三陸町吉浜	1,341	483	2.78	48.78
大船渡市 (計)	38,230	14,835	2.58	323.3

※ 2015年9月30日現在の人口・世帯数（大船渡市住民基本台帳より）。



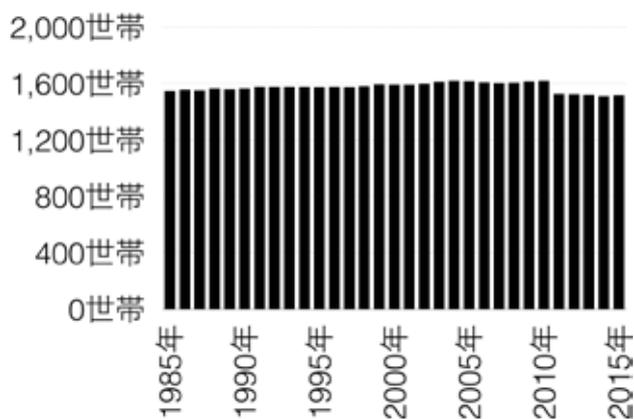
※各年10月1日の人口（国勢調査結果より）。昭和27年は4月1日の人口（市制施行時の住民登録人口）。

(図 2-4) 末崎町の人口推移



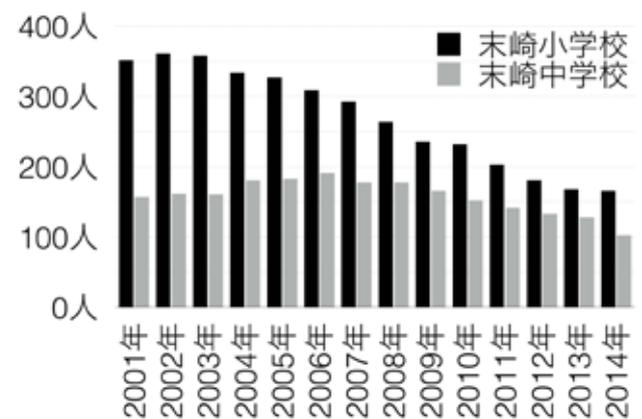
※各年9月30日の人口（大船渡市住民基本台帳より）。

(図 2-5) 末崎町の近年の人口推移



※各年9月30日の世帯数（大船渡市住民基本台帳より）。

(図 2-6) 末崎町の近年の世帯数推移



※各年5月1日の児童・生徒数（大船渡市統計書より）。

(図 2-7) 末崎小中学校の児童・生徒数の推移



(写真 2-7) 細浦港



(写真 2-8) 基石海岸

75歳以上の人口の割合は約20%であり、大船渡市の平均を上回っている（表2-3）。末崎町内には市立の小学校、中学校が1校ずつある。2014年5月1日（木）現在の末崎小学校の児童数は166人、末崎中学校の生徒数は103人である。10年前（2004年）と比べると末崎小学校の児童数は半数以下、末崎中学校の生徒数は約55%にまで減少している（図2-7）。

末崎町は東日本大震災で津波の被害を受け、死者・行方不明者は65人になる。震災の後、末崎町内の5カ所に計313戸の仮設住宅が建設された（写真2-9～10）。仮設住宅には2016年1月6日（水）時点で178戸と、まだ半数以上が入居している（表2-4）。

（表 2-3） 末崎町・大船渡市・全国の高齢化率

	人口	65歳以上の人口（割合）	75歳以上の人口（割合）
末崎町	4,406人	--	870人（20.0%）
大船渡市（末崎町を含む）	40,737人	12,552人（30.9%）	6,571人（16.2%）
全国	128,057,352人	29,245,685人（22.8%）	14,072,210人（11.1%）

※2015年9月時点で、末崎町内の人口は4,406人、75歳以上の人口は870人であり、75歳以上の割合は約20%である（『平だより』2015年10月5日号より）。

※大船渡市（末崎町を含む）は2010年10月1日現在の人口（平成22年国勢調査より）。

※全国は2010年10月1日現在の人口（平成22年国勢調査より）。

（表 2-4） 大船渡市末崎町の応急仮設住宅の概要

名称	住所	建設戸数	住戸タイプ			完成 (2011年)	2016年1月6日 現在の世帯数
			1DK	2DK	3K		
大田	字大田 142-10 (市営球場)	134 第1期：118 第2期：16	35	64	35	第1期：5月11日 第2期：6月8日	89
平林	字大田 142-10 (末崎中学校)	70	16	38	16	5月11日	38
山岸	字山岸 122 (末崎小学校)	58	16	26	16	5月11日	18
小中井	字小中井 108-2	27	0	27	0	6月13日	22
大豆沢	字大豆沢 24-1	24	0	24	0	6月16日	11

※2016年1月6日現在の世帯数は大船渡仮設住宅団地 Official Site (<http://ofunatocity.jp>) より。



（写真 2-9） 山岸仮設団地



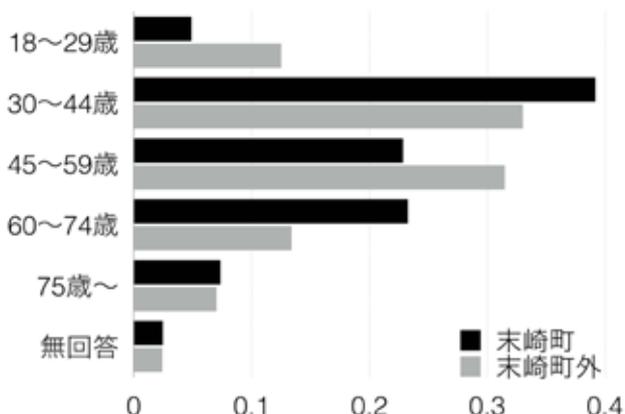
（写真 2-10） 大田仮設団地

次に2014年に実施したアンケート調査の結果から末崎町の特徴をみることにする。アンケート調査の回答者を、末崎町の人245人と、末崎町外の人911人に分けて、両者の回答を比較すると、回答者の年代は末崎町内外で大きな違いは見られないが(図2-8)、末崎町の回答者は居住年数が長い人の割合が大きいという特徴がある(図2-9)。末崎町に住み始めたきっかけは、「生まれた時から」、「結婚」が約8割を占めており、「仕事」、「東日本大震災の影響」という回答が他の町に比べて少ない(図2-10)。「仕事」という回答が少ないのは、末崎町内には大きな企業がないことも1つの要因だと考えられる。「東日本大震災の影響」という回答が少ないのは、末崎町内に建設された5ヵ所の仮設住宅に入居したのは、震災前から末崎町に住んでいた人が大半であるという理由である。以上の結果からは、末崎町は他に比べて人の出入りが少ない町であることが伺える。

居住している町での地域活動への参加状況を見ると(図2-11)^{*2-7)}、末崎町の回答者は地域活動に参加している人の割合が大きい。末崎町は大船渡市の中でも地域の結びつきが強い町だと言われ、これがプロジェクト実施場所として末崎町が選ばれた理由だが、地域の結びつきの強さはこの結果にも現れている。

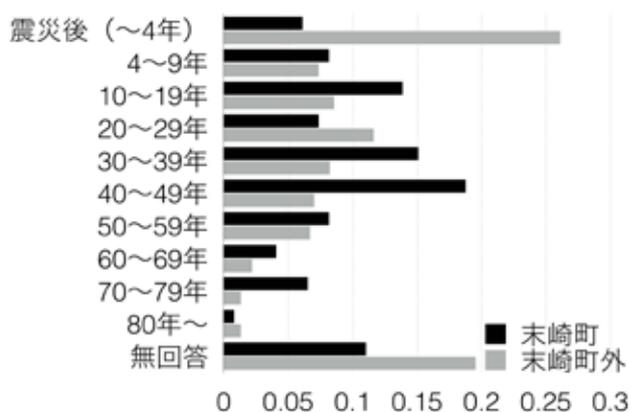
2-4. 「居場所ハウス」周辺

末崎町は北から細浦地区、中央地区、基石地区の3地区に大きく分けられる。「居場所ハウス」は中



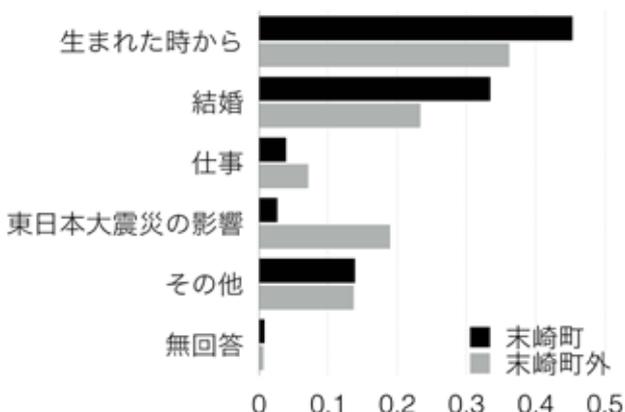
※末崎町は245人、末崎町外は911人に対する割合。

(図2-8) 回答者の年代



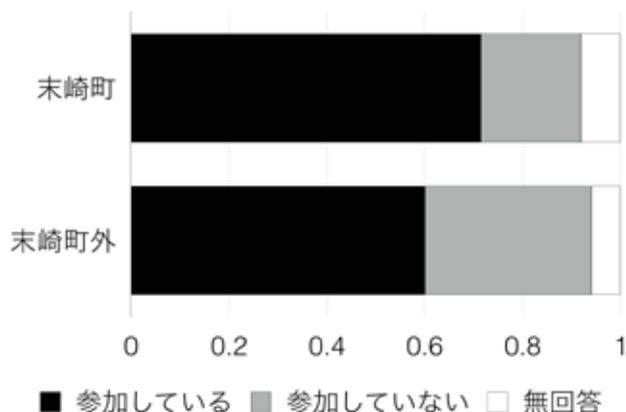
※末崎町は245人、末崎町外は911人に対する割合。

(図2-9) 現在の町の居住年数



※末崎町は245人、末崎町外は911人に対する割合。

(図2-10) 現在の町に住み始めたきっかけ



(図2-11) 現在住んでいる町での地域活動への参加

中央地区に位置するが、中央地区の中でも末崎地区公民館「ふるさとセンター」、末崎保育園、末崎小学校、末崎中学校、大船渡市農協末崎支店、末崎地区サポートセンターなどの施設が集まる場所にある（図2-12）（写真2-11～13）。「居場所ハウス」の周囲では高台移転が進められており、2014年5月には市営の災害公営住宅11戸への入居が行われた（写真2-14）。現在、県営の災害公営住宅と防災集団移転による戸建て住宅、合わせて約100戸の建設が進められている。このうち県営の災害公営住宅へは2016年4月から入居が始まる予定である（写真2-15）。防災集団移転の敷地は既に土地の造成が終わり、戸建て住宅の建設が進んでいる（写真2-16）。

2-5. 「居場所ハウス」の運営

2013年3月8日（金）にNPO法人・居場所創造プロジェクトが設立され、「居場所ハウス」オープン後はこのNPO法人が運営を担っている。現在（2015年12月末現在）のNPO法人の正会員は、末崎町の住民を中心とする約50名である。NPO法人の設立当初の理事は既に述べた通り設立に中心に関わった3人であったが、その後、末崎町の住民が中心となり運営していく体制を確立するため、2014年度からは末崎町の6人が新たに理事に就任した（表2-5）。新たに理事に就任した6人のうちGSさん、TKさんは「居場所ハウス」の運営を中心になって担ってきた人であり、理事の就任の少し前からGSさんが館長を名乗るようになった。

「居場所ハウス」では毎月運営のための定例会を開催しており、数人の理事を含めて毎回10～15人



（写真2-11）末崎小学校校庭から
「居場所ハウス」方面を望む



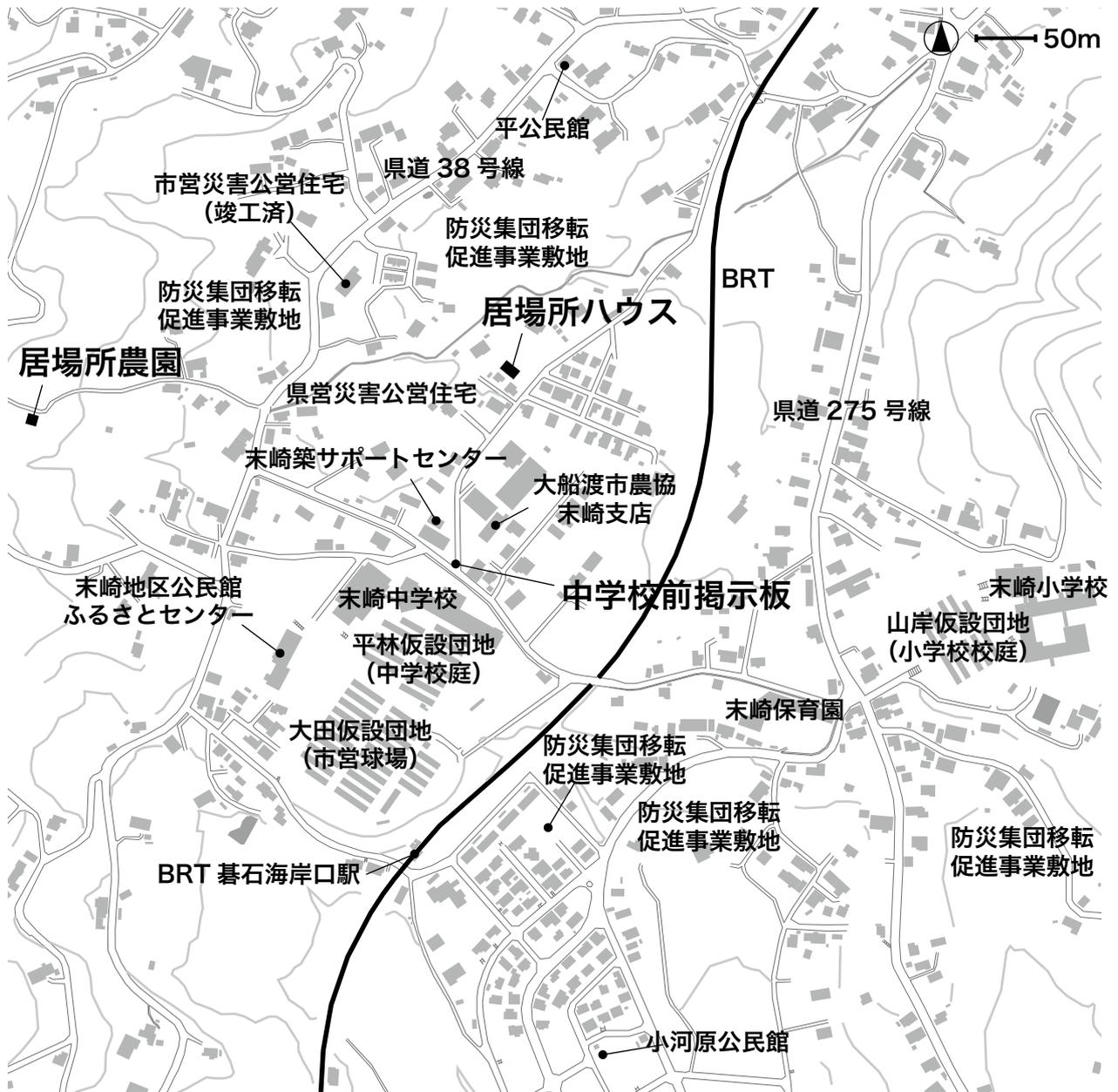
（写真2-12）末崎地区公民館「ふるさとセンター」



（写真2-13）末崎地区サポートセンター・おたすけ



（写真2-14）市営の災害公営住宅



(図 2-12) 居場所ハウス周辺



(写真 2-15) 県営の災害公営住宅



(写真 2-16) 防災集団移転の敷地

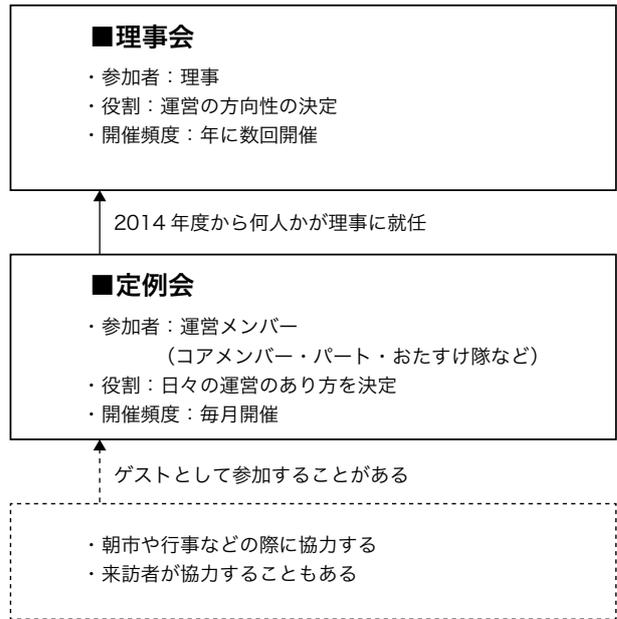
(表 2-5) NPO 法人の役員

■ 2013年3月～2014年5月

名前	役職	居住地	日々の運営への参加
HK	理事長	末崎町	○
EK	理事		
YU	理事		
KK	監事	末崎町	

■ 2014年5月～

名前	役職	居住地	日々の運営への参加
HK	理事長	末崎町	○
EK	理事		
YU	理事		
GS	理事・館長	末崎町	○
EO	理事	末崎町	○
TK	理事	末崎町	○
TN	理事	末崎町	
KM	理事	末崎町	
MK	理事	末崎町	
KK	監事	末崎町	



(図 2-13) 居場所創造プロジェクトの体制

(表 2-6) 「居場所ハウス」の運営メンバー (2015年12月現在)

	人数	居場所ハウスでの役割	概要
コアメンバー	約 15 人	行事の企画、朝市の準備・運営、事務、備品の面テンス、パートスタッフとおたすけ隊のサポートなど運営全般を担当。日曜は交代でスタッフを担当している	ほとんどが末崎町の住民で、オープン前のワークショップから参加していた人、オープンした頃から関わっている人、最近関わり始めた人がいる。末崎町の民生委員、婦人会も何人か参加。2014年度以降は何人かが理事に就任した
パート	3 人	平日のスタッフを担当している。水曜日はボランティアでスタッフを担当	末崎町に住む 3 人の女性。2 人は 2014 年 1 月から、1 人は 2014 年 9 月からパートをしている
おたすけ隊	3～4 人	土曜のスタッフを担当、日曜は昼食の調理を担当している。花・植木などの手入れも中心となって行っている	毎週月・水曜日に、近くにある末崎地区サポートセンターで開催されている「おたすけクラブ」の参加者有志によって結成。メンバーは全員末崎町の住民。現在は「おたすけクラブ」に参加していないメンバーもいる

※本レポートでは運営日誌に、その日の担当者（当番）として名前が記載されている人を「スタッフ」と呼んでいる。



(写真 2-17) 運営メンバーが参加する定例会



(写真 2-18) 日常の「居場所ハウス」の様子

が定例会に参加している（図 2-13, 写真 2-17）。この定例会に参加しているのは、日々の運営、朝市や行事の企画・運営、事務作業などを担当するコアメンバー、主に平日の運営を担当するパートのメンバー、主に土曜・日曜の運営を担当する「おたすけ隊」メンバーである。このうち、コアメンバーというのは「居場所ハウス」のプロジェクトを立ち上げるにあたって声をかけられた民生委員、婦人会、末崎町平地区の公民館の関係者や、運営が始まってから関わるようになった人など約 15 人である。本レポートでは「居場所ハウス」の日々の運営に関わるコアメンバー、パート、「おたすけ隊」のメンバーを合わせて「運営メンバー」と呼ぶこととする（表 2-6）。運営メンバーは、ほぼ全員が末崎町に住んでおり、60～70 代が中心である。運営メンバーに加えて、朝市や行事に協力する人、日々の運営でお茶碗を洗ったり食器を運んだりする来訪者、様々な差し入れをする人など、「居場所ハウス」の運営には多くの人々

(表 2-7) 「居場所ハウス」略年表（オープン後）

年	月	日	曜日	出来事
2013	6	29	土	最初の定例会を開催
	7	1	月	この日より、週 5 回の運営をパート（女性 1 人）に依頼
	10	1	火	この日より、ボランティアが毎日の運営を担当
	11	24	日	「居場所感謝祭」を開催
2014	1	13	月	この日より、週 3 回の運営をパート（女性 3 人）に依頼
	3	1	土	「ひな祭り」を開催
	5	3	土	「鯉のぼり祭り」を開催
	5	23	金	NPO 法人・居場所創造プロジェクト、平成 26 年度社員総会を開催。末崎町の 6 人が新たに理事に就任
	7	13	日	「一周年記念感謝祭」を開催
	8	15	金	「納涼盆踊り」を開催
	8	24	日	「居場所農園」での作業を始める
	9	2	火	理事の定数変更、販売支援事業実施のための定款変更が認証
	9	22	月	末崎町門之浜地区の K さん夫妻より寄贈されたカマドを移設
	10	18	土	「ふれあいキッズデー」（主催：デジタル公民館まっさき）を開催
	10	25	土	朝市を開催（年内は毎月第 1・3 土曜日に開催。2014 年 1 月から毎月第 3 土曜日に開催）
	11	15	土	「ふれあいキッズデー」（主催：デジタル公民館まっさき）を開催
12	3	水	クリスマス・イルミネーションを点灯開始	
12	21	日	「居場所ハウスクリスマスキッズデー」を開催（デジタル公民館まっさき、ふらいパンダ、三陸みらいシネマとの共催）	
2015	1	9	金	「居場所ハウス」の理事 2 人が 2013 年台風 30 号（台風ヨランダ）の被災地、フィリピン・レイテ島のオルモック市とカナンガを訪問（～1 月 10 日）
	1	10	土	「ふれあいキッズデー（小正月のミズキだんご作り）」（主催：デジタル公民館まっさき）を開催
	1	末		屋外にキッチンスペースの建設を始める
	2	21	土	「ふれあいキッズデー（ひな祭り）」（主催：デジタル公民館まっさき）を開催
	3	14	土	「ふれあいキッズデー（ぼたもち作り）」（主催：デジタル公民館まっさき）を開催
	3	14	土	フィリピン・オルモック市の「Ibashi フィリピン」のメンバー 3 人が「居場所ハウス」を訪問（～3 月 15 日）
	3	18	水	「居場所ハウス」のメンバー 4 人が、仙台で開催の第 3 回国連防災世界会議のシンポジウムにパネリストとして参加
	5	3	日	「鯉のぼり祭り」を開催。屋外のキッチンスペースを活用して昼食を販売
	5	8	金	屋外のキッチンスペースを活用して、毎日の食堂運営を始める
	5	24	日	NPO 法人・居場所創造プロジェクト、平成 27 年度社員総会を開催
	6	14	日	「二周年記念感謝祭」を開催
	7	19	日	「被災地見学会」を開催
8	15	日	「納涼盆踊り」開催	
10	21	水	「居場所ハウス」の運営理念を振り返り、これからの運営を考えるワークショップを開催	
10	23	金	「居場所ハウス」の理事 1 人が 2013 年台風 30 号（台風ヨランダ）の被災地、フィリピン・レイテ島のオルモックとカナンガを訪問（～10 月 29 日）	
11	14	土	「居場所農園」の収穫祭・感謝祭を開催	
12	20	日	クリスマスケーキ作りを開催	

の協力がなされている。

「居場所ハウス」は木曜を除く毎日10時から16時までカフェスペースを運営しており、コーヒー、ハーブティーなどの飲物を若干のお気持ち料で提供している（写真2-18）。日々の運営スタッフ^{*2-8)}は週3日をパートが、週3日をボランティアが担当している。

「居場所ハウス」は目的がなくても気が向いた時にやって来てよい場所であり、過ごし方が決められているわけではない。「居場所ハウス」にやって来た人はお茶を飲んだり、話をしたり、あるいは、1人で本や雑誌を読んだりして過ごす。季節の食材を使って干し柿作り、凍み大根作り、クルミの皮むきを行ったりすることもある。「居場所ハウス」はカフェスペースの運営を基本としているが、日によっては生花や郷土食作り、囲碁、健康体操などの教室が行われたり、歌声喫茶や会議が開かれたりする。また、1月のミズキ団子作り、3月のひな祭り、5月の鯉のぼり、7月の七夕飾り、8月の納涼盆踊り、12月のクリスマスと季節ごとの行事も行っている（写真2-19～22）。

周囲に店舗や飲食店がほとんどないため、2014年10月から毎月朝市を、2015年5月から屋外に建設したキッチンスペースを活用し食堂の運営をスタートさせた（写真2-23～25）。昼食はうどん、そば、カレーライス、チャーハン、親子丼などの定番メニューの他に、週替わりでひつつみ汁、小豆ぼつと、結婚式の披露宴で出される「おぢずき（おちつき）」などの郷土食がメニューになることもある。また、朝市をスタートする少し前の2014年8月末からは近くの休耕地を借りて「居場所農園」とし、野菜作りを始めている（表2-7, 写真2-19～22）。「居場所農園」から収穫した野菜は朝市で販売したり、食堂の食材として用いたりしている。このように「居場所ハウス」では、末崎町の人々によって、カフェスペースの枠にはおさまりに切らない多様な活動が展開されている。「居場所ハウス」はオープン以来、主に民間からの被災地支援の補助金を受けて運営している^{*2-9)}。「居場所農園」での野菜作り、朝市、食堂の運営は、補助金に頼らずに運営を継続するための運営基盤の確立という目的もある。

なお、木曜は定休日であるが、薪ストーブの設置や煙突掃除をしたり、会計などの事務作業をしたり、花や植木の手入れをしたり、干し柿を作ったりと、定休日にも運営メンバーの出入りがみられる。

2-6. 「居場所ハウス」の建物

「居場所ハウス」の建物は陸前高田市気仙町で昭和32年（1957年）に建設された民家を移築・再生したものである。建物の設計はワークショップや会議で出された意見をふまえて、H大学大学院のSM教授・研究室メンバーが担当した（写真2-27～34）。

当初、建物は道路のある東側を正面として配置される計画であったが（図2-14）、地盤調査の結果を受けて、90度回転した形で北側を正面として配置されることになった（図2-15）。

「居場所ハウス」の空間は大きく土間のカフェスペースと和室に分かれており、和室の外側には月見台がある（図2-16）。土間と和室を緩やかに分離するため、当初、土間と和室の間には柱が設置されていた。また、和室を屋外の月見台と緩やかにつなぐため、和室の一部が板の間になっていた。

玄関があること、スタッフがいるキッチンがあること、冬季には薪ストーブが置かれていることなどの理由から、来訪者の大半は土間のカフェスペースで過ごす。和室は来訪者が多い時や、生花教室、歌声喫茶などグループでの利用に使われている。和室には本棚のある図書コーナーと、テーブル、プリンターなどを置いた事務コーナーがある。

2015年1月末より月見台の西側にキッチンスペースを建設し、2015年5月より食堂の運営をスタートさせた。昼食は屋外のキッチンスペースで調理し、「居場所ハウス」内に運んで食事をしているが、大半の人が土間部分で食事をする。



(写真 2-19) 干し柿作り



(写真 2-20) そば打ち講習会



(写真 2-21) 健康体操



(写真 2-22) 納涼盆踊り



(写真 2-23) 朝市



(写真 2-24) 屋外のキッチンスペース



(写真 2-25) 屋外のキッチンスペース



(写真 2-26) 居場所農園

気候がよい時期には屋外にテーブル・椅子を出しており、屋外で過ごす来訪者もいる。また朝市や周年記念感謝祭、鯉のぼり祭りなどの大きな行事の際は、建物前のスペースにテントを立てて開催している。

2-7. 「居場所ハウス」と公民館・集会所との違い

地域の人々が集まるという点で、「居場所ハウス」は公民館・集会所と類似の場所だと見なされることがある。しかし、「居場所ハウス」は公民館・集会所とは人々の集まり方が異なっている。

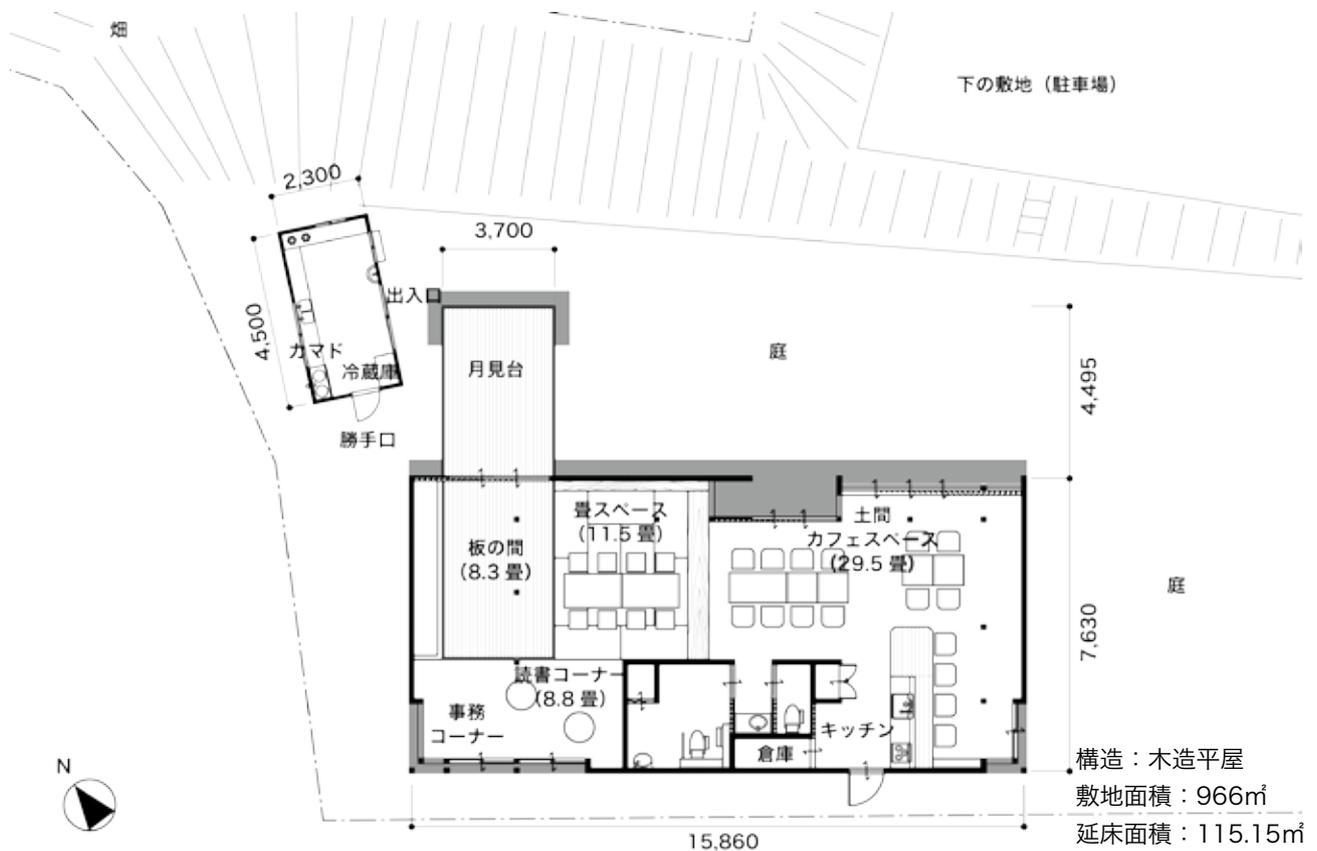
一般的に公民館・集会所は、会議や教室、同好会など特定の活動に参加するために利用する場所で



(図 2-14) 当初の配置計画



(図 2-15) 実現した配置



(図 2-16) 居場所ハウスの建物



(写真 2-27) 南東の道路側より



(写真 2-28) 月見台側より



(写真 2-29) 北側より。右奥は県営の災害公営住宅



(写真 2-30) 南西側より



(写真 2-31) 土間のカフェスペース



(写真 2-32) 土間のカフェスペース



(写真 2-33) 和室の畳スペース・図書スペース



(写真 2-34) 和室の板の間

あり、会議室、和室、調理室、体育館など様々な部屋や設備が整っている。事前に利用する時間帯を予約しておけば、参加者だけでこれらの部屋や設備を利用することができ、会議や教室、同好会が行われている間、参加者以外の人ややって来ることはない。それに対して「居場所ハウス」は木曜以外は毎日開いていて、特定の目的がなくても訪れることができ、行けばいつでも地域の誰かがいる日常の場所である。過ごし方が決められているわけではない。会議や教室、同好会などが行われることがあるが、カフェスペースの運営がベースであるため、活動をしている間にも絶えず人の出入りがある。活動が行われている周りでは参加者以外の人がお茶を飲んだり、話をしたりしており、時には活動の様子を覗く人もいる。

つまり、「居場所ハウス」は様々な人々が居合わせる状況が生まれやすい場所だと言え、この点が公民館・集会所との大きな違いだと言える（写真 2-35）。ここで言う「居合わせる」とは「別に直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いどのような人が居るかを認識しあっている状況」のことである（鈴木，2004）。様々な人々が居合わせる場所であるため、「居場所ハウス」に行けば地域には様々な人々がいることを認識することができる。

また、居合わせた人同士の会話から様々なことが生まれており、時には行事でなく日常の運営の中で地域の文化や暮らしの技術の継承が行われることもある。2014年1月17日（金）、「居場所ハウス」に時々やって来る高齢の女性が「かぼちゃけ」（カボチャと小豆ともち米が入ったお粥）という郷土食を作り、みなに振る舞ってくださったことがある（写真 2-36）。「子どもの頃食べたけど。50年は食べ



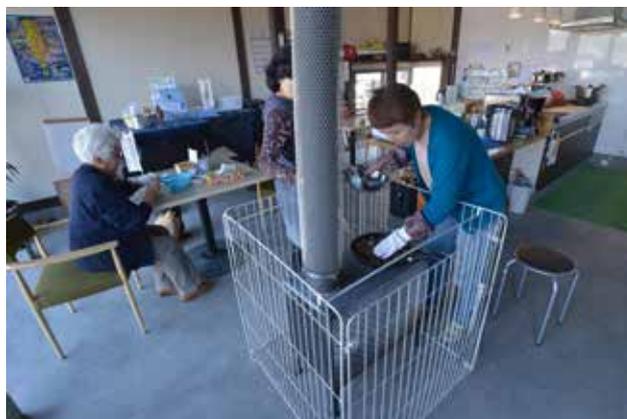
（写真 2-35）様々な人々が居合わせる場所



（写真 2-36）郷土食のかぼちゃけを作る女性



（写真 2-37）裁縫を教わる女性



（写真 2-38）クルミの殻割り

てない」と80代の女性が話したように、最近ではほとんど食べるものがなくなったものである。若い世代のパートスタッフは「作ったことも、食べたこともない」と言って、女性が料理する様子を覗き込んでいた。振る舞われた「かぼちゃけ」を食べて、90代の女性からは「オラ、初めて食べた。子どもの頃に出されたけど、ドロドロして見かけが悪かったから、嫌だと言って食べなかった」という思い出話が出てきた。暮らしにまつわる思い出は、普段の生活では思い出すことがなくても、何らかのきっかけがあれば溢れるように蘇ってくるのである。

2015年10月18日（日）、1人の女性が年上の女性からお祭りのために刺繍を教わっていた。大船渡市末崎町の細浦熊野神社で4年に1度開催される式年大祭では、身につけるものに各家の家紋を刺繍することになっている。この女性の家の家紋は形が複雑だということで、刺繍の方法を教わっていたということだった（写真2-37）。

何かを教えると言うと年上の人から年下の人へというイメージがあるが、「居場所ハウス」ではその逆のことも起きる。2014年4月8日（火）に、自分では殻を剥くのが大変だからと「居場所ハウス」にクルミの差し入れがあった。その日、パートだった女性は、フライパンで熱すると殻の先端が開くので、そこに包丁を入れて割ればよいと話し、薪ストーブの上でクルミを炒り始めた。母親から教えてもらった方法だとのこと。包丁で2つに割ったクルミから実を取り出す作業は、来訪者の80代の女性も手伝ってくれたが、80代の女性はこのような方法で殻を割る方法について「80で初めて知った。今日、「居場所ハウス」に来てよかった」と話していた（写真2-38）。「居場所ハウス」は、地域の人々が居合



（写真 2-39）末崎地区公民館の町民文化祭



（写真 2-40）「居場所ハウス」でのカラオケ同好会



（写真 2-41）末崎地区公民館で調理する「おたすけクラブ」メンバー



（写真 2-42）末崎地区公民館の末崎にぎわい民謡歌謡ショー

わせる場所であるため、ここでみたような学びが生まれることもある。

そして、「居場所ハウス」と公民館・集会所とは性質の違う場所であるから、両者は互いの役割を補完し合うことができる。「居場所ハウス」の近くには末崎地区公民館「ふるさとセンター」がある。末崎地区公民館は規模の大きな施設であり和室、会議室、調理室、体育館などがあり、毎年11月の「町民文化祭」をはじめ、末崎町の人々を対象とする様々な行事・活動が開催されている（写真2-39）。

「居場所ハウス」では2013年12月から2014年2月にかけてカラオケ同好会が開かれていたが（写真2-40）、参加者数に対して和室が狭く、カフェスペースではカラオケ同好会に参加しない人も過ぎているという理由から、カラオケ同好会は末崎地区公民館の体育館で行われるようになった。

2015年2月21日（土）、「居場所ハウス」では「デジタル公民館まっさき」*2-10) 主催のひな祭りが開催された。その翌日、末崎地区公民館で「町民ひな祭り」が開催されたが、参加した子どもは両日も同じ顔ぶれだった。そのため、来年（2016年）「デジタル公民館まっさき」が主催するひな祭りは、「町民ひな祭り」に合わせて末崎地区公民館で開催した方がよいという意見が出された。

末崎地区公民館に場所を移した活動・行事がある一方で、末崎地区公民館で行われる予定だった行事・活動が「居場所ハウス」で行われたこともある。閉館後、末崎地区公民館で同級会を開催予定だった人が、鍵を借り忘れて末崎地区公民館に入ることができなかった。そこで急遽「居場所ハウス」に会場を変更して同級会が開催されたこともある。こうした柔軟な対応ができたのは、「居場所ハウス」は運営メンバーの何人かが鍵を管理しているからである。

「居場所ハウス」と末崎地区公民館が役割を補完し合うこともある。2013年11月24日（日）の「居場所感謝祭」の際には、「おたすけクラブ」のメンバー有志が末崎地区公民館の調理室で、販売用の三色だんごを作ったことがある（写真2-41）。逆に、2014年7月18日（金）に末崎地区公民館で開催された「末崎にぎわい民謡歌謡ショー」では、「居場所ハウス」の運営メンバーがかき氷機を持参して、かき氷を販売したことがある（写真2-42）。2015年11月7～8日に末崎地区公民館で開催された「町民文化祭」に、「居場所ハウス」の草月流生花教室のメンバーが作品を出展したこともある。

「居場所ハウス」と末崎地区公民館は性質の違う場所であるために、互いの役割を補完しており、地域の人々はこの2つの場所を使い分けている。

第3章. 「居場所ハウス」の来訪者

本章では、東日本大震災後、海外からの提案でスタートし、オープン後は末崎町の住民を中心メンバーとするNPO法人が運営する「居場所ハウス」には実際にどのような人が来ているのかをみていくこととする。

3-1. 来訪者数の推移

「居場所ハウス」は2013年6月13日(木)のオープン以来、当初は週7日、2013年7月1日(月)からは木曜を除く週6日の運営を継続してきた。オープンから2015年12月末までの2年半の来訪者数の合計は約15,600人、1日の平均は約20.2人である^{*3-1)}。2年半にわたる運営を通して来訪者は徐々に増加傾向にあり、オープンからしばらくは1日平均が15人程度であったのが、最近では1日平均が20～25人であり、1日平均が30人近い月もある(図3-1)。

朝市、周年記念感謝祭や鯉のぼり祭りなどの大きなイベント、各種教室、会議など何らかの行事・活動が行われている日と、行事・活動が行われていない日の来訪者数の違いをみると、何らかの行事・活動が行われている日の方が来訪者は多い。行事・活動が行われていない日の平均来訪者数は徐々に増加しており、オープン当初は1日に10～15人だったのが、最近では15～20人を推移している。行事・活動がなくても訪れる来訪者が増えていることがわかる(写真3-1～4)。

天候が悪いと外出が億劫になり、来訪者数が減少する可能性が考えられる。そこで、天候を「晴・曇」



(写真 3-1) 日常の様子



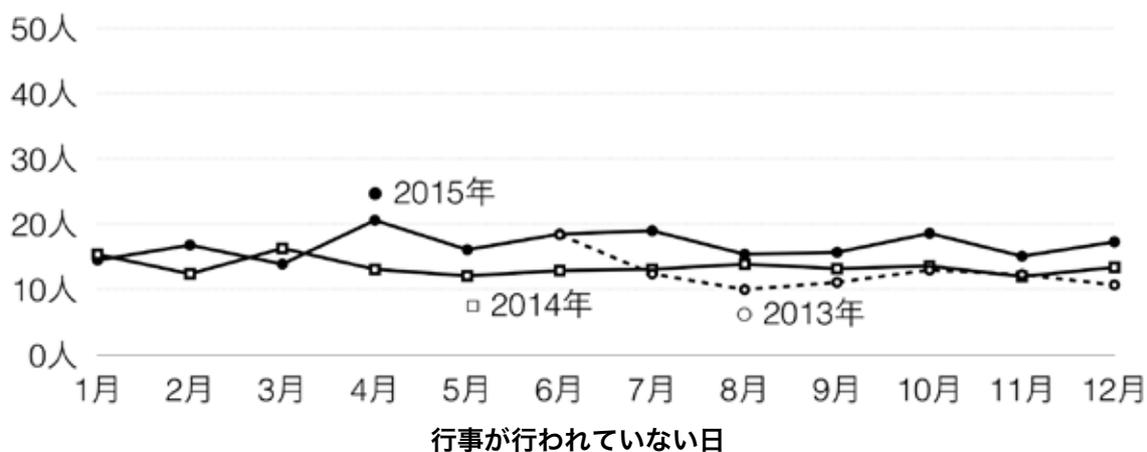
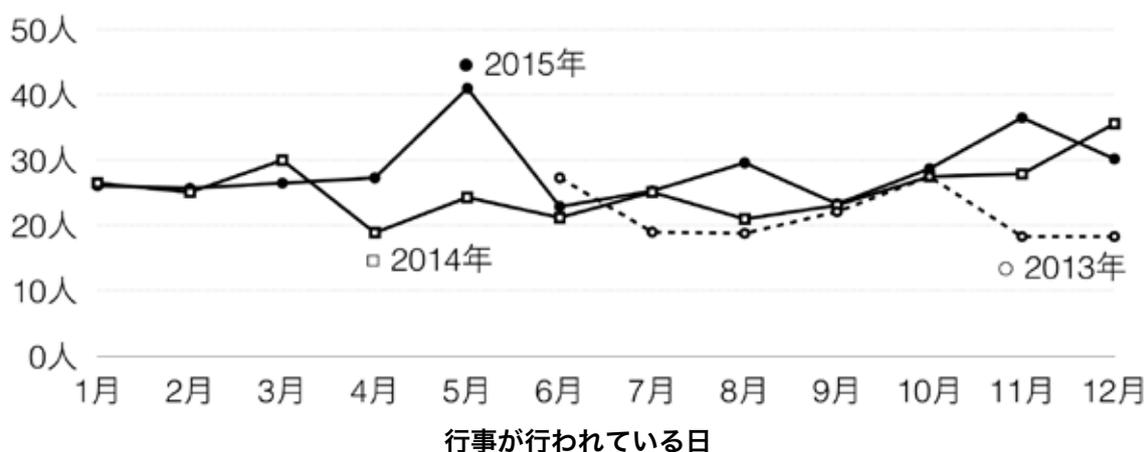
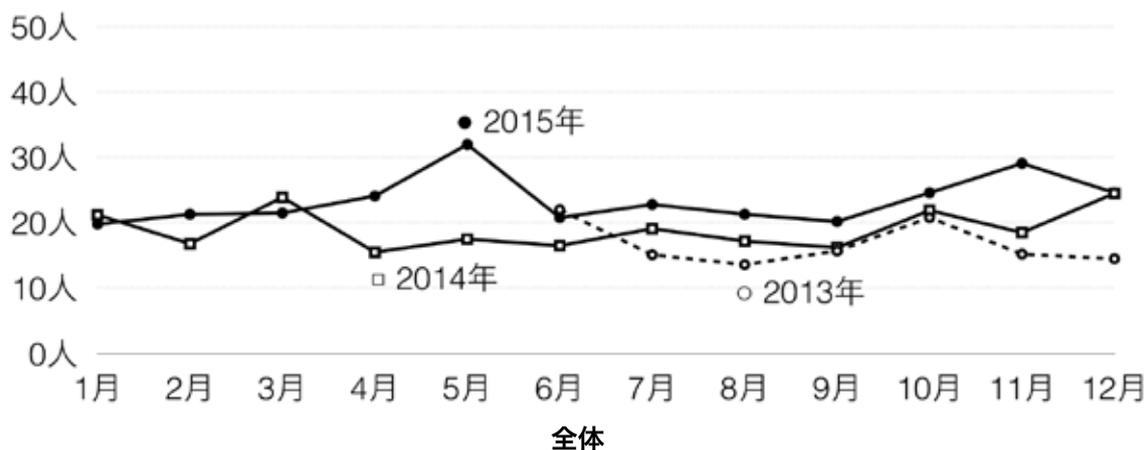
(写真 3-2) 雑誌を読んで過ごす来訪者



(写真 3-3) クリスマスキッズデー



(写真 3-4) 二周年記念感謝祭



※来訪者数のグラフは運営日誌、ゲストブックより作成した。

※2013年6月13日の「オープニング」、「オープニング・シンポジウム」、2013年11月24日の「居場所感謝祭」の前日・当日、2014年5月3日の「鯉のぼり祭り」、2014年7月13日の「一周年記念感謝祭」、2014年8月15日の「納涼盆踊り」、2014年10月25日の朝市の来訪者数は、表・グラフの人数には含まれていない。

※2014年11月1日以降の朝市の来訪者数は、おおよその人数で集計している。

※行事が行われていない定休日の来訪者数は含まれていない。

(図 3-1) 1日の平均来訪者数の推移

と「雨・雪」の2つに大きく分類し^{*3-2)}、さらに、行事・活動が行われた日と行われていない日それぞれで来訪者数を集計した(図3-2)。これをみると、行事・活動が行われている日は、「晴・曇」の日の方が「雨・雪」の日に比べて来訪者が多い。それに対して、行事・活動が行われていない日は天候によって来訪者数に違いは見られない^{*3-3)}。行事・活動の参加者は天候に左右されるが、行事・活動が行われていない日に訪れる人は、天候に左右されないということである。

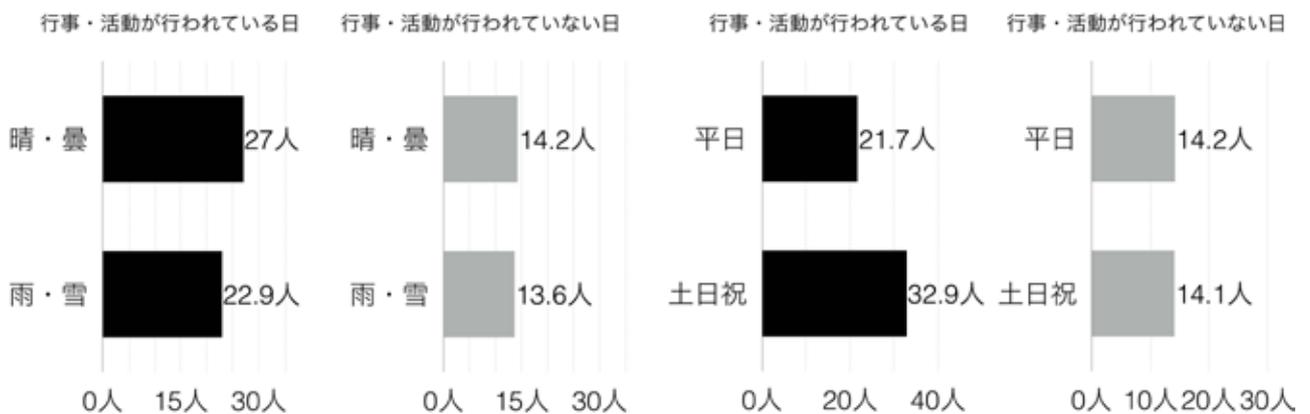
次に、曜日による来訪者数の違いをみる。平日と土日祝日の来訪者それぞれについて、行事・活動が行われた日と行われていない日それぞれで来訪者数を集計した(図3-3)。これをみると、行事・活動が行われている日は土日祝日の方が来訪者が多い。これは、朝市、周年記念行事、ひな祭り、鯉のぼり祭りなどの大きな行事・活動は土日に開催することが多いという理由を考えることができる。一方、行事・活動が行われていない日は平日と土日祝日で来訪者数の違いは見られない^{*3-4)}。

これらの結果からは、行事・活動が行われていない日の来訪者、即ち、特定の行事・活動に参加することを目的とせず訪れる来訪者は、天候や曜日には左右されないことがわかる。

2015年5月から屋外に建設したキッチンペースを活用して食堂の運営を始めた。昼食を食べる来訪者数は1日に7～10人ほどである(図3-4, 写真3-5)。

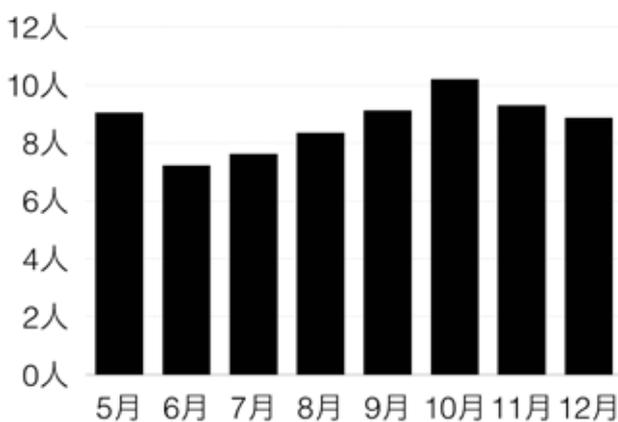
3-2. 来訪者・運営メンバーの属性

2014年10月に実施したアンケート調査の結果から、「居場所ハウス」の来訪者の属性をみる。アン



(図3-2) 天候による来訪者数の違い

(図3-3) 曜日による来訪者数の違い



(図3-4) 昼食を食べる来訪者数(1日の平均)

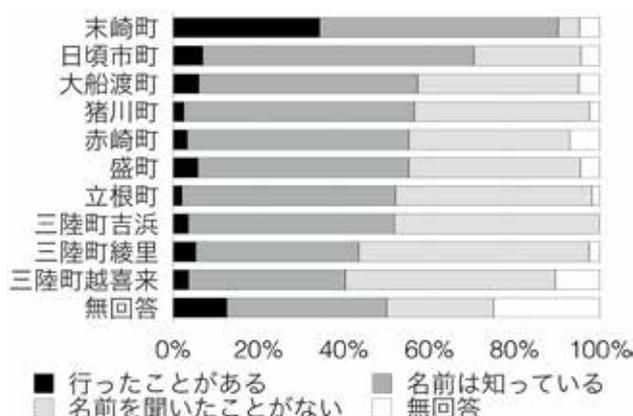


(写真3-5) 昼食時の様子

ケート調査には「居場所ハウス」の運営メンバーも回答しているため、以下でみるのは運営メンバーを含めて「居場所ハウス」に出入りする人々の属性である。調査結果をみると、回答者1,164人のうち「居場所ハウス」に「行ったことがある」のは約10%であるが、末崎町に限れば約35%である。また、「居場所ハウス」に「行ったことがある」回答者と「名前は知っているが、行ったことはない」回答者を合わせた人数、つまり、「居場所ハウス」のことを知っているのは大船渡市全体では約60%だが、末崎町では90%になっている。「居場所ハウス」は末崎町の人々で運営することを目指しているが、この結果より2014年10月の調査時点において、「居場所ハウス」の存在は末崎町内でほぼ認知されていると言ってよい(図3-5)。

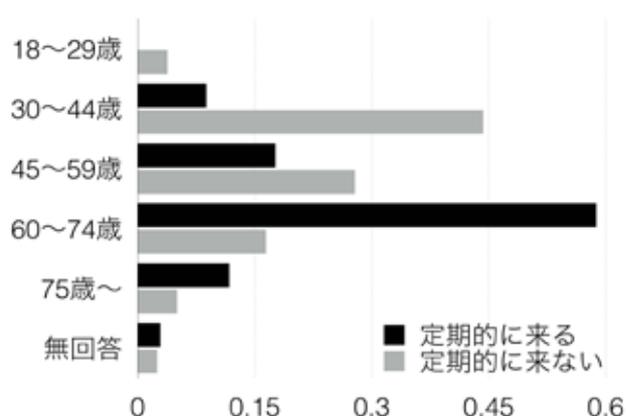
回答者1,164人のうち「居場所ハウス」に「行ったことがある人」は123人である。このうち月に1回以上来る人を「定期的に来る人」、それ以外の人を「定期的に来ない人」に分類すると^{*3-5)}、「定期的に来る人」は34人、「定期的に来ない人」は79人となる。以下では回答者を「定期的に来る人」と「定期的に来ない人」に分けて、その属性をみていくこととする。来訪者の年代をみると「居場所ハウス」は30～70代と幅広い年代の人が来る場所になっている。その中で、「定期的に来る人」は60～74歳の人を中心である一方、「定期的に来ない人」は30～44歳、次いで、45～59歳が多くなっている(図3-6、写真3-6～7)。

来訪者の性別は「定期的に来る人」は男性と女性が半数ずつであり、「定期的に来ない人」は女性の



※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図3-5) 居場所ハウスの認知度



※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

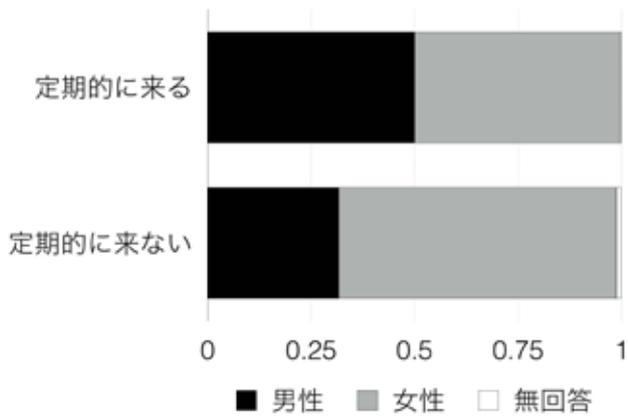
(図3-6) 来訪者の年代



(写真3-6) 子どもと一緒に行事に参加する母親

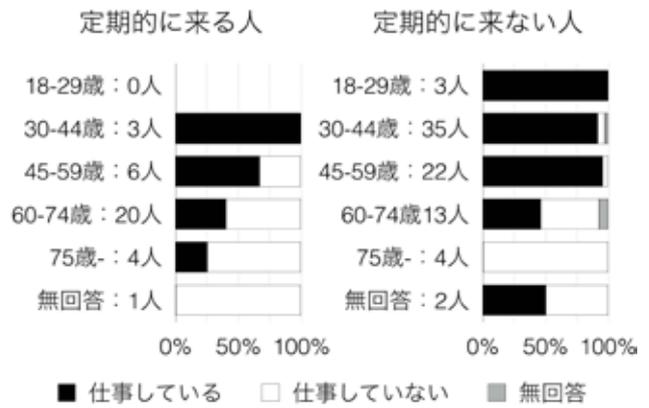


(写真3-7) 多世代の人々が過ごす日



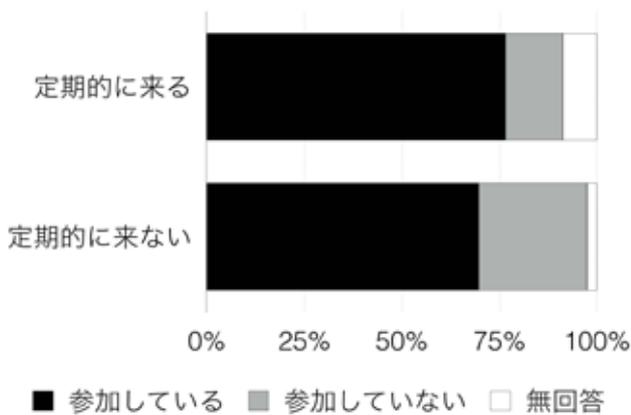
※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図 3-7) 来訪者の性別



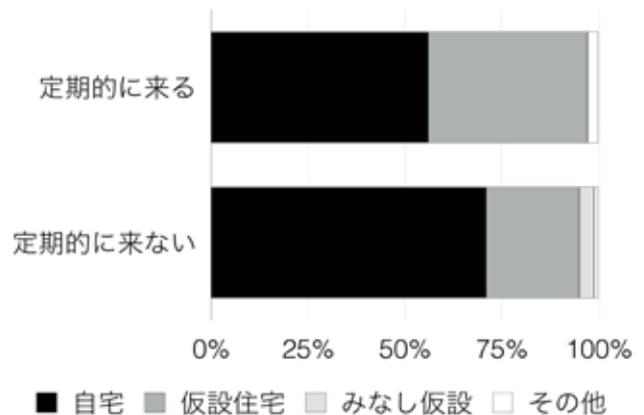
※現在の仕事として「居場所ハウス」のみを記入している回答者4人は「仕事をしていない」に分類した。

(図 3-8) 来訪者の現在の仕事



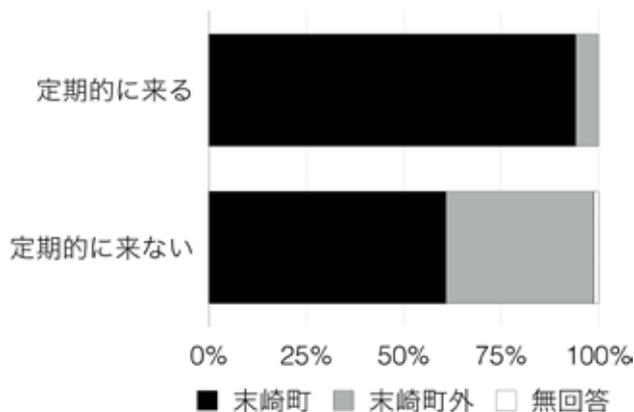
※参加している活動として「居場所ハウス」のみを回答している人は、活動に参加していない人に分類した。
※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図 3-9) 震災後の地域活動への参加状況



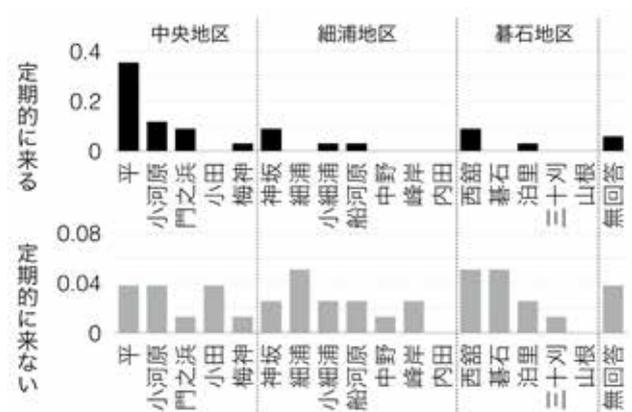
※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図 3-10) 来訪者の住まい



※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図 3-11) 来訪者の居住地



※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

※市営球場の大田応急仮設住宅とい回答した人は図中では「無回答」に分類している。

(図 3-12) 来訪者の末崎町内の居住集落

方が多い (図 3-7)。

回答者の現在の仕事の有無をみると、「定期的に来る人」も「定期的に来ない人」も 60 歳未満の人の大半が仕事をしている。60～75 歳の人でも半数が仕事をしている。75 歳以上になると、仕事をしない人が多くなる (図 3-8)。

地域活動への参加状況については、「定期的に来る人」の約 75%、「定期的に来ない人」の約 70%は現在、何らかの地域活動に参加している (図 3-9) *3-6)。

3-3. 来訪者・運営メンバーの住まいと居住地

「居場所ハウス」に「行ったことがある人」123 人の住まいをみると自宅に住んでいる人が約 6 割、仮設住宅に住んでいる人が約 3 割である (図 3-10)。「定期的に来る人」と「定期的に来ない人」を比較すると、「定期的に来る人」の方が仮設住宅の人の割合が大きくなっている。先に述べた通り、現在、「居場所ハウス」の周囲では高台移転が進められており (図 2-12)、仮設住宅の居住者が高台移転を終えた後にも「居場所ハウス」と関わりをもってもらうことが重要である。

「居場所ハウス」に「行ったことがある人」123 人が住んでいる町をみると、約 7 割が末崎町に住んでいる。ただし、「居場所ハウス」に「定期的に来る人」に限れば 9 割が末崎町に住んでいることになる (図 3-11)。



※内田、神坂、小細浦、門之浜、小河原は再建後の公民館の位置である。西館、細浦の公民館は 2015 年 12 月末現在でまだ再建されていないため、震災前の公民館の位置を記している (「広報大船渡」No.1066, 2015 年 11 月 5 日)。

※東日本大震災において泊里は 36 戸のうち 35 戸が被災したため、2013 年 3 月に解散した (東京文化財研究所, 2014)。

(図 3-13) 末崎町内の公民館の位置

末崎町に住んでいる来訪者・運営メンバーのうち、末崎町のどの地区から来ているのかに注目する（図 3-12）。現在、末崎町には 17 の地区があり、それらは大きく細浦地区、中央地区、碁石地区の 3 つに分けられている。「居場所ハウス」に「定期的に来る人」は中央地区のうち、「居場所ハウス」のある平地区から来ている人が多い。「定期的に来る人」の割合が多い地区の公民館の位置をみると^{*3-7)}、「居場所ハウス」からほぼ半径 1km の範囲内にあることがわかる（図 3-13）。一方、「定期的に来ない人」については細浦地区、中央地区、碁石地区のいずれからも来ていることがわかる。

3-4. 来訪者・運営メンバーの特徴

「居場所ハウス」の来訪者・運営メンバーの属性をみてきたが、ここでは大分大学福祉科学研究センター（2011）による全国 166 のコミュニティ・カフェの調査結果を比較することで、「居場所ハウス」の特徴をおさえることとする（表 3-1）。

オープンから 2015 年 12 月末までの 1 日の平均来訪者数は 20.2 人であり、最近はそれより増加す

（表 3-1）「居場所ハウス」の来訪者の特徴

	居場所ハウス	全国 166 のコミュニティ・カフェ
1 日の来訪者数	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンから 2015 年 12 月末までの平均来訪者数は 1 日に約 20.2 人 ・来訪者数は増加傾向にあり、最近では 1 日 20 ～ 25 人 	<ul style="list-style-type: none"> ・20 人未満が 6 割を占めている
来訪者の年代	<ul style="list-style-type: none"> ・「定期的に来る人」は 60 ～ 74 歳が中心 ・「定期的に来ない人」は 30 ～ 44 歳、次いで、45 ～ 59 歳が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者を初めとして、比較的幅広い年齢層が来訪
来訪者の性別	<ul style="list-style-type: none"> ・「定期的に来る人」は男性と女性が半数ずつ ・「定期的に来ない人」は女性が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・77.0% のコミュニティ・カフェが女性が多いと回答
来訪者の職業	<ul style="list-style-type: none"> ・60 歳未満の人の大半は何らの仕事をしている（専業主婦がいない） ・60 ～ 74 歳の人でも半数は何らかの仕事をしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・主婦（8 割）、無職（5 割）、勤め人（3 割）の順に多い
住まいとの距離	<ul style="list-style-type: none"> ・「居場所ハウス」のある平地区から来ている人が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・徒歩圏内の地域の住民の利用が多い場所が約 8 割

※右列は大分大学福祉科学研究センター（2011）が 2011 年に全国のコミュニティ・カフェを対象として実施したアンケート調査の結果をもとに作成。アンケート調査の有効配布数は 478 ヲ所で、有効回答数は 166 ヲ所（有効回収率は 34.7%）。



（写真 3-8）男性が多いのが「居場所ハウス」の特徴



（写真 3-9）駐車場に並ぶ来訪者の車

る傾向にある。大分大学福祉科学研究センター（2011）が調査した全国 166 のコミュニティ・カフェでは 20 人未満の場所が 6 割を占めており、これと比較すれば「居場所ハウス」の来訪者数は平均よりやや多いと言える。行事・活動の有無による「居場所ハウス」の来訪者数の違いについては、行事・活動が行われている日の方が来訪者数が多いこと、行事・活動が行われている日の来訪者数は天候がよい日の方が多く、行事・活動が行われていない日の来訪者数は天候や曜日に左右されないことが明らかとなった。

「居場所ハウス」の来訪者の年代は「定期的に来る人」は 60～74 歳の人を中心、「定期的に来ない人」は 30～44 歳、次いで、45～59 歳が多くなっていた。全国 166 のコミュニティ・カフェでも高齢者を初めとして、比較的幅広い年齢層が来訪するとされており、年代については他のコミュニティ・カフェと同様の傾向が見られる。

来訪者の性別は、全国 166 のコミュニティ・カフェの 77.0%が、利用者は女性が多いと回答している。それに対して、「居場所ハウス」に「定期的に来る人」は男性と女性が半数ずつであり、定期的に入出入りする男性が多いのが特徴である（写真 3-8）。「居場所ハウス」では大工仕事、薪割り、朝市の準備などの作業があり、これらの作業は男性が「居場所ハウス」に関わるきっかけになっているのが理由の 1 つではないかと考えることができる。また、「居場所ハウス」のある大船渡市末崎町では漁業・農業などを営む人が多く、男性も現役時代から地域と密接に関わっていることも理由の 1 つだと考えることができる。

来訪者の職業については、全国 166 のコミュニティ・カフェの来訪者は主婦、無職、勤め人の順に多くなっているに対して、「居場所ハウス」の来訪者は 60 歳未満の人の大半が何らかの仕事をしており、65～75 歳の人でも半数が何らかの仕事をしている。ここにも「居場所ハウス」のある大船渡市末崎町の状況が現れていると言える。即ち、大船渡市末崎町では漁業・農業を営む人が多いのに加えて、ワカメやサンマの収穫の時期にだけ働きに出ている人も多いのである。実際、2015 年 10 月 21 日（水）に「居場所ハウス」で開催したワークショップでは、ボランティアを集めることについて「末崎ではなかなかむずかしい（わかめや、さんまや、畑仕事で忙しい）」という意見が出されている。

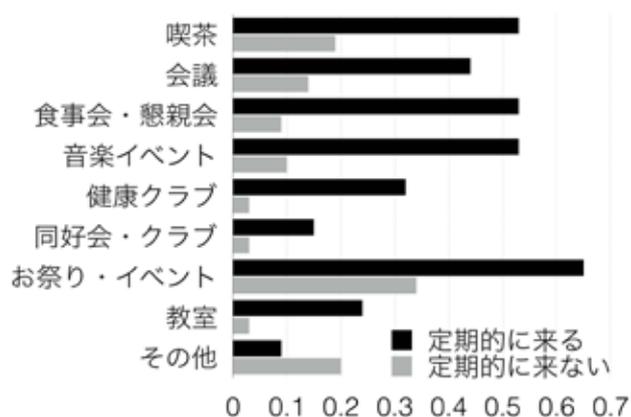
住まいとの距離については、全国 166 のコミュニティ・カフェの約 8 割は徒歩圏内の地域住民の利用が多いと回答している。「居場所ハウス」でも平地区の人が多くなっており、「居場所ハウス」をはじめとする「まちの居場所」へは遠くからわざわざ来るといより、近くにあるから来る人が多いこと、即ち、住まいとの空間的な近接性が意味をもっていると言える。ただし、「居場所ハウス」では徒歩だけでなく、自家用車でやって来る人も多く、「居場所ハウス」敷地内の駐車場に来訪者の車が並ぶという光景はしばしば見られる（写真 3-9）。ここにも自家用車を運転する人は近距離でも自家用車で移動するという大船渡市末崎町の状況が現れている。2015 年 12 月 19 日（土）に「居場所ハウス」で開催したワークショップでは、末崎町は坂と曲がり道が多くて「自転車が活躍できない町」だという意見、100m を越えたら車で行くという意見が出されている。

第4章. 「居場所ハウス」における人々の関係

前章で「居場所ハウス」にどのような人々が入り出しているのかをみた際、来訪者と運営メンバーの属性を同時に考察したのは、「居場所ハウス」では運営メンバーもスタッフでない日に来訪者としてやって来ることがあり、逆に、来訪者も運営の協力をするというように、厳密に主客の関係を分離することができないという理由がある。本章では「居場所ハウス」で築かれている人々の関係をみていくこととする。

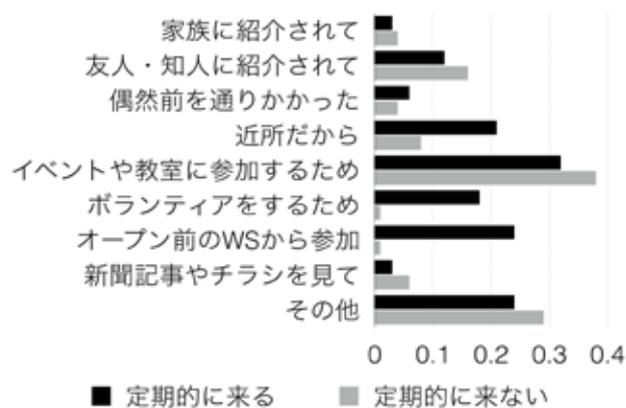
4-1. 「居場所ハウス」への関わり

2014年に実施したアンケート調査の回答者のうち、「居場所ハウス」に「定期的に来る人」は34人、「定期的に来ない人」は79人であったが、「居場所ハウス」への関わりは両者で大きく異なっている。「居場所ハウス」への関わりとして「定期的に来ない人」があげている割合が大きいのは「お祭り・イベント」だけであるのに対して、「定期的に来る人」は「お祭り・イベント」に加えて、「喫茶」、「会議」、「食事会・懇親会」、「音楽イベント」、「健康クラブ」、「同好会・クラブ」をあげている割合も大きく、「定期的に来る人」は多様なかたちで「居



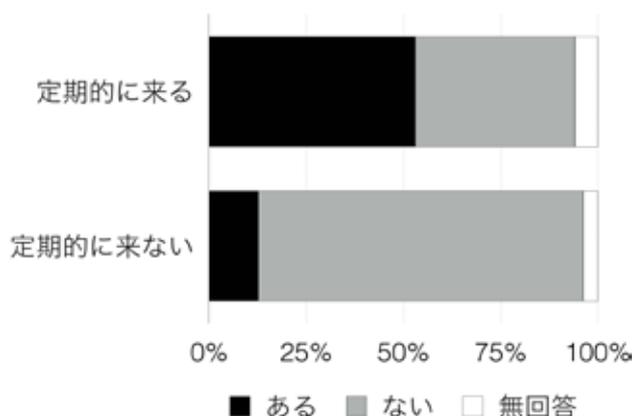
※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図 4-1) 居場所ハウスへの関わり



※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図 4-2) 来るようになったきっかけ



※定期的に来る人は34人、定期的に来ない人は79人に対する割合。

(図 4-3) 運営への協力の有無



(写真 4-1) 食器を洗う来訪者

場所ハウス」の活動に関わっていることがわかる（図 4-1）。

「居場所ハウス」に来るようになったきっかけについては、「定期的に来る人」も「定期的に来ない人」も「イベントや教室に参加するため」をあげている人が最も多いが、「定期的に来る人」は「近所だから」、「ボランティアをするため」、「オープン前のワークショップから参加している」をあげている人も多い（図 4-2）

これらの結果から、「居場所ハウス」へは、定期的に来て様々な活動に参加するという関わりから、行事がある時にだけ参加するという関わりまで、濃淡のある関わりがなされていると考えることができる。

4-2. 緩やかな主客の関係

先に見た通り「居場所ハウス」に定期的に来る人の中には「ボランティアをするため」、「オープン前のワークショップから参加している」をあげている人がいた（図 4-2）。このことは、「居場所ハウス」に定期的に来る人の中にはお客さんとして定期的に来るだけでなく、何らかのかたちで運営に関わっている人もいるということである。アンケート調査では「定期的に来る人」の半数以上が「居場所ハウス」でボランティアをしたと回答している（図 4-3）。

「居場所ハウス」の日々のスタッフは2～4人のパート、ボランティアが担っているが、「居場所ハウス」



(写真 4-2) 朝市の後片付け



(写真 4-3) 手作りのお菓子を差し入れする女性



(写真 4-4) 差し入れをする高齢の女性

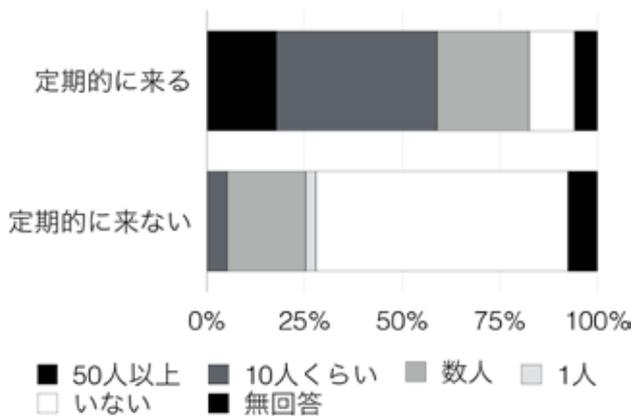


(写真 4-5) スタッフも一緒になって過ごす

ではスタッフ以外の人による多様な運営への協力がある。スタッフが忙しくしている時に来訪者にお茶をいれたり、食器を洗ったり、料理を食堂から運んだり、ゲストブックに来訪者の名前を書いたりする人もいる。仕事の経験をいかして花・植木の手入れをしたり、本棚や収納を作るなどの大工仕事をしたりする人もいる。朝市やイベントの時にテントを設置したり、農作業をしたり、事務作業をしたり、薪ストーブのための薪を割ったりする人がいる。自分で作ったお菓子や漬物、収穫した野菜や果物など、様々なお裾分けがあるのも「居場所ハウス」の特徴である。自分には何もできないからと砂糖や小麦粉などを差し入れしてくださる 90 代の女性もいる。「居場所ハウス」はスタッフに加えて、多くの人々の関わりによって成立しているのである（写真 4-1～4）。

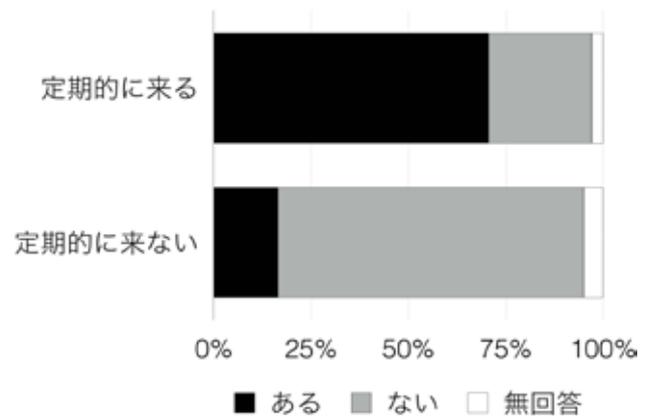
それと同時に、日々の運営を担うスタッフも一方的にサービスを提供する店員ではない。スタッフも時間があれば他の人と一緒にテーブルに座ってお茶を飲んだり、話をしたりしながら過ごしている（写真 4-5）。

このように「居場所ハウス」においてはスタッフとそれ以外の人との関係は緩やかなものとなっている。



※定期的に来る人は 34 人、定期的に来ない人は 79 人に対する割合。

（図 4-4）居場所ハウスで知り合った人



※定期的に来る人は 34 人、定期的に来ない人は 79 人に対する割合。

（図 4-5）生活の変化の有無



（写真 4-6）居場所ハウスで顔見知りになった 2 人



（写真 4-7）朝市に来る人々

4-3. 「居場所ハウス」で築かれる人々の関係

末崎町は長い年月にわたって住み続けている人の割合が大きく（図 2-9）、生まれてから、あるいは、結婚してからずっと住み続けている人が多い（図 2-10）。父母、息子娘、兄弟姉妹が末崎町に住んでいる人も多い。そのため「居場所ハウス」では「私は〇〇さんと親戚」、「〇〇さんと〇〇さんは兄弟」という会話をよく耳にする。けれども、当然ながら全住民が顔見知りというわけではない。何十年も別の土地で暮らしていて、退職してから末崎町に戻って来たという人もおり、そういう人が「居場所ハウス」で居合わせた人と少しずつ顔見知りになっていくこともある。また「〇〇君のお母さん？ どっかで見たことあると思った」、「〇〇さんだね？ どこか面影あるね。〇〇さんの同級生でしょ」という会話のように、居合わせた人が家族や知人の知り合いだったという出会いもある。このように「居場所ハウス」は他の人と知り合うきっかけを生み出している。

このことはアンケート調査の結果にも現れている。「定期的に来る人」の約 8 割が、「居場所ハウス」で知り合った人が「数人」以上いると回答している。一方、「定期的に来ない人」は約 65%が「居場所ハウス」で知り合った人はいないと回答している（図 4-4）。「居場所ハウス」に定期的に顔を出すことが、地域での知り合いを生むことにつながっていることがわかる。

●他者との関わりができるようになった

- ・地域の人にどこの家の者かわかってもらえた（45～59 歳・女性）
- ・新たに知り合う人がふえたので楽しいです。（60～74 歳・女性）
- ・イベントに参加して色々な人と交流（60～74 歳・男性）
- ・いろいろな方と交流できる（75 歳～・男性）
- ・仮設住宅には茶の間（お客さんを迎える）がないので、快く居場所ハウスでおもてなしできる。（45～59 歳・女性）
- ・震災前の友人と居場所ハウスで会える。（75 歳～・女性）
- ・人々とのつながり（60～74 歳・男性）

●生活に楽しみ・メリハリができた

- ・張り合いがある生活。地元の人々と親しくなった。（45～59 歳・女性）
- ・メリハリが出来た（60～74 歳・女性）
- ・楽しみ、はりが出てきた。（60～74 歳・男性）
- ・楽しみが増えた（45～59 歳・女性）
- ・生きがいを感じるようになり楽しさが増しました。（60～74 歳・女性）

●立ち寄れる場所ができた

- ・フラックと立ち寄れる場所が増えた（45～59 歳・女性）
- ・時間が空いた時にふらっと立ち寄りところができた。（30～44 歳・男性）

●運営に参加するようになった

- ・運営に参加し、新たなつながりができた。（60～74 歳・女性）
- ・ボランティアして参加するようになった。（30～44 歳・男性）
- ・居場所の管理をやっておりますので（60～74 歳・男性）
- ・ますますいそがしくなった（60～74 歳・女性）

●子どもの遊び場ができた

- ・子どもの遊び場ができた。（30～44 歳・男性）
- ・子供の遊び場が増えてよかった。（30～44 歳・女性）
- ・近所の子供同士で遊びに行かせていただいております。（30～44 歳・女性）

●新たな知識を得ることができた

- ・居場所ハウスで行った勉強会？が今行っている勉強につながっています（30～44 歳・女性）
- ・新たな分野の芸能を見ることができた。（30～44 歳・女性）

●その他

- ・大船渡に居場所ハウスがある事を知れたので、良かった。（30～44 歳・女性）
- ・何か集中して作業をしたい時の場所を見つけた（18～29 歳・女性）
- ・暇つぶし（45～59 歳・男性）
- ・高齢化に伴う自由作教室意識（60～74 歳・男性）

※ 「居場所ハウス」ができたことで、あなたの生活に変化がありましたか？という質問について、自由記述を記入した全回答者（33 名）の回答であり、「定期的に来る人」「定期的に来ない人」の両方の回答者の回答が含まれる。

（図 4-6）「居場所ハウス」ができたことによる生活の変化（自由記述）

次に「居場所ハウス」ができたことで、あなたの生活に変化がありましたか?という質問への回答をみると(図4-5)、「定期的に来る人」の約7割、「定期的に来ない人」の約15%が生活に変化があったと回答しており、「居場所ハウス」に定期的に来る人ほど生活の変化を感じていることがわかる。アンケート調査の自由記述から具体的な生活の変化をみると(図4-6)、「地域の人にどこの家の者かわかってもらえた」、「新たに知り合う人がふえたので楽しいです」というように他者との関わりができるようになったという回答、「張り合いがある生活。地元の人々と親しくなった」というように生活に楽しみやメリハリができたという回答、「運営に参加し、新たなつながりができた」というように運営に参加し新たな関わりが生まれたということなどがあげられている。これらの自由記述からも、「居場所ハウス」は人々の新たな関係を築くきっかけになっていることがわかる。

4-4. 「居場所ハウス」を介した広がりのある関係

「居場所ハウス」ができたことによる生活の変化として、「地域の人にどこの家の者かわかってもらえた」という回答がみられた(図4-6)。通常、人と人との関係と言うと個人と個人が顔見知りになったり、親しくなったりすることが注目されがちであるが、「居場所ハウス」が築いているのは個人と個人の関係におさまるものではない。先にあげた「地域の人にどこの家の者かわかってもらえた」というのは、自分が地域のどのような人々と関係があるのかが認識されたということであり、「居場所ハウス」は個人と個人の間におさまらない広がりのある関係を生み出しているのである。

2013年12月24日(火)、「居場所ハウス」で次のような出来事があった。90代の女性と80代の女性は「居場所ハウス」で顔見知りになり、話をするようになった2人である。2人は頻繁に「居場所ハウス」にやって来るため、姿を見ない日が続くと周りが心配するという状況も生まれており、運営メンバーが90代の女性に電話をかけたり、家まで様子を見に行ったりしたことも何度かある。この日、午前中にやって来た90代の女性は、「最近、〇〇さん来ないなあ」と80代の女性のことを気にかけていた。80代の女性は、90代の女性とすれ違いに午後からやって来て、「〇〇さん、最近来てる? 昨日、〇〇さんの家の近くに救急車とまっていたから」と90代の女性のことを気にかけていた。ここで重要なのは、互いに気遣いあっている2人の関係が、2人の中で閉じたものではなく、「居場所ハウス」で居合わせた人々が、2人が互いに気遣いあっていることを認識していることである。この場合、互いに気遣いあう2人と、2人が気遣いあっていることを認識している人々というように、多層的な関係が築かれている(写真4-6)^{*4-1)}。

「居場所ハウス」に対する協力を通して、関係の広がりが生み出されることもある。先に述べた通り、「居場所ハウス」では日々の運営を担うスタッフと来訪者との関係が緩やかなものであり、スタッフ以外からも例えば大工仕事をしたり、花・植木の手入れをしたり、事務作業をしたりなど様々な協力がある。自分で作ったお菓子や漬物、収穫した野菜や果物など様々なお裾分けもある。大切なのはこうした協力やお裾分けは特定の個人に対してなされるものではなく、「居場所ハウス」という具体的な場所に対してなされているということである。特定の個人ではなく「居場所ハウス」に対してなされる行為であるから、その行為は居合わせた人々によっても認識されるのである。結果として、「〇〇さんは、〇〇をしてくれた人だ」、「〇〇さんは、〇〇をするのが得意だ」という認識が共有されていく^{*4-2)}。

地域の人々が日常的に居合わせる「居場所ハウス」は、地域の人々の広がりのある関係を生み出していると言える(写真4-7)。

第5章 「居場所ハウス」の運営体制の変化

「居場所ハウス」のプロジェクトは東日本大震災後、海外からの提案がきっかけとなりスタートした。提案の受け入れと、運営主体となる NPO 法人の設立、オープニングセレモニーは社会福祉法人 T が事務局を務めた。こうした経緯でオープンした「居場所ハウス」の運営は末崎町の人々が中心となって担っている。ただし、現在の運営体制が築かれるまでの過程は決してスムーズだったわけではない。本章では「居場所ハウス」のプロジェクトの体制がどのように変化してきたかをみることにする。

5-1. 理事会と定例会

「居場所ハウス」の運営主体として設立された NPO 法人の当初の理事には、設立に中心に関わった当時の末崎地区公民館長の HK さん（理事長）、Ibashi 代表の EK さん、社会福祉法人 T の YU さん

(表 5-1) 理事会一覧

年	月	日	曜日	時間	主な議題	理事								
						HK *	EK	YU	GS *	TK *	EO *	TN	KM	KM
2013	6	29	土	13:20 ～14:00	居場所ハウスの運営体制、NPO 法人の組織体制、理事会の役割、建物の登記、土地の賃貸契約	●	●							
	9	4	水	11:00 ～12:30	近況報告、パートの雇用、補助金、建物の登記	●	●	●	○					
	10	17	木	10:45 ～13:00	理事会の役割、居場所ハウスの運営体制、ハネウェル社からの運営協力金で購入する備品、見学者への対応	●	●	●						
2014	1	21	火	10:35 ～12:00	パートの雇用、理念の振り返り、運営の方向性、運営体制、地域への周知、環境改善（柱の撤去）、地域通貨、地域団体との関係	●	●	●						
	3	4	火	10:35 ～12:25	土地の賃貸契約、見学者の対応、オープンまでのワークショップに参加していた地域住民への声かけ、補助金、オープンまでの記録の管理、地域通貨	●	●	●						
	3	23	日	10:30 ～12:00 13:20 ～15:30	理事会の体制、運営の方向性（キッチンカー、産直）、末崎町内への周知、地域通貨	●	●	●	○	○				
2014	5	20	火	10:30 ～13:10	理事会の体制、定款の変更、キッチンカー、土地の賃貸契約、一周年記念感謝祭、見学者への対応	●	●	●	○					
	6	29	日	13:30 ～15:00	理事会の役割、定款の変更、地域団体との関係、運営費の確保、館長の役割、一周年記念感謝祭、行事案内、7月の日曜日の運営スタッフ	●			●	●	●	●	●	●
	10	11	土	13:30 ～15:00	補助金、朝市、キッチンカー、理事会の役割、地域通貨、フィリピンとの交流	●	●		●	●	●	●	●	●
2015	5	17	日	10:00～ 11:45	補助金、2014年度の活動報告、2015年度の活動計画、朝市の報告、キッチンスペースの運営、パートの雇用、二周年記念感謝祭、運営体制	●	●		●	●	●	●	●	

※ 2013年9月4日（水）は末崎地区サポートセンターで開催した。

※ 2014年6月29日（日）は定例会、「一周年記念感謝祭」第2回実行委員会と同時開催。

※表中の * は運営メンバーとして日々の運営に関わっている理事を表す。

※表中の ○ はオブザーバーとして参加したことを表す。

の3人が就任した。「居場所ハウス」オープン後、理事会は2～3ヶ月に1回開催されおり、理事会の役割、建物の登記、土地の賃貸契約などNPO法人の体制に関わることや、運営の方向性、そして、パートの雇用、環境改善など、運営メンバーから出された課題について議論している（表5-1）。

「居場所ハウス」では理事会とは別に、日々の運営に関わる運営メンバーが情報共有したり、イベントに向けた打合せをしたり、運営や環境整備について意見を出し合ったり、ボランティアの担当日を決めたりするための定例会を毎月開催している。定例会に参加しているのが、「居場所ハウス」の日々の運営を中心になって担っている運営メンバーである。

理事会はNPO法人の方向性を決める会議、定例会は日々の運営のあり方を決める会議であり、両者は「居場所ハウス」を運営していくための両輪であるが、オープン当初は理事長のHKさんのみが両方の会議に参加していただけであり、理事会と定例会の意志の疎通が十分になされていたわけではなかった。

<p>●具体的な運営</p> <p>①開館日 ・閉館日 毎週 月曜日（日曜日 or 木曜日） ※利用目的、利用申し込みにより開館利用させることができる</p> <p>②開館時間 ・10時～17時 ※内容により21時まで利用させることができる</p> <p>③運営経費 ○お気持ち料 ・任意で募金していただく。100～200円 ・コーヒー、お茶、お菓子代ほか ※メニュー紹介</p> <p>○利用料金（運営協力金） ・会場使用料 グループ、団体で利用する場合、 ・2時間以下 500円</p>	<p>・ただしガス、器具、備品など使用+200円 ・2時間以上 1,000円 ・冬季（11月～3月）は+100～200円</p> <p>④管理当番（日直） ・9:30～17:30</p> <p>⑤管理当番の仕事 ○玄関カギの開閉 ○来訪者、見学者対応（資料） ・接客要領把握 お茶、コーヒー（コーヒーマーカーの使い方） ○備品・金銭管理・・・閉館時所定の場所に収納 ○日誌記入 ○館内整頓、火気、ガス元栓、各種電源、スイッチ確認、清掃、館内窓の施錠確認、カーテン開閉等 入り口施錠 ※確認事項は日誌記載事項などによる</p>
---	--

※理事長のHK氏が2013年6月29日（土）の定例会で配布した資料を元に作成。

（図5-1）第1回目の定例会で議論された内容



（写真5-1）理事会（2014年10月）



（写真5-2）最初の定例会（2013年6月）

設立当初の理事の任期は2013年度末であることが定められていた。そこで末崎町の人々が中心となって運営する体制を確立するため、2014年度からは末崎町の6人が新たに理事に就任した(表2-5、写真5-1)。6人のうちGSさん、TKさんは「居場所ハウス」の運営を中心になって担ってきた人物であり、理事の就任の少し前からGSさんが館長を名乗るようになった。この他に理事に就任したのは仮設住宅支援員、末崎小学校のPTA、末崎町の老人クラブ、末崎町の婦人会と、末崎町で様々な活動をしている人々である。運営メンバーの何人かが理事に加わった2014年度以降は、理事会の開催回数は減少している(表5-1)。

5-2. オープン直後の運営体制

先に述べた通り、海外から提案されたプロジェクトの受け入れ、NPO法人の設立、オープニングセレモニーは社会福祉法人Tが事務局を務めた。しかし、社会福祉法人Tの法人としての関わりは「居場所ハウス」のオープニングセレモニーまでであり、オープン後の運営はコアメンバーを中心とする末崎町の人々が担うことになっていた。けれども、社会福祉法人Tが中心的な役割を果たしていた段階から、末崎町の人々が中心となって運営する段階への移行はスムーズにいったわけではなかった。オープニングセレモニー翌日の6月14日(金)から誰がスタッフを担当するのか、どのように運営するかが全く決められていなかったのである。

現在の「居場所ハウス」の運営メンバーになっている何人かは、オープン前のワークショップや会議から参加していた。しかし、末崎町の人々同士でオープン後の運営を担っていくための議論がなされていたわけではない。こうした状態で運営がスタートしたため、オープン後しばらくは社会福祉法人Tの職員が事務作業を担当していた。運営を担当するボランティアスタッフがいない時間帯は、社会福祉法人Tが委託運営する末崎地区サポートセンターの職員が手伝いにくる日もあった。こうした状況を見て、「居場所ハウス」は末崎町の人々ではなく社会福祉法人Tが運営するのだと捉えた人もいた。

誰がスタッフを担当するのか、どのように運営するのかが曖昧なまま10日ほど経過した頃、ボランティアスタッフが集まらないのでRTさんをパートとして雇用するのはどうかという話が出てくることになる。2013年6月29日(土)、理事会が開催された後、理事とコアメンバーが参加する運営会議が開催された(写真5-2)。この会議では毎週木曜を定休日とすること、7月1日(月)からRTさんにパートを依頼すること^{*5-1)}、日曜はコアメンバーが週替わりでボランティアをすることが確認された(写真5-3)。この他、運営時間、飲物の値段、団体で利用する際の手続き、コアメンバーの役割なども議論され(図5-1)、運営していくための最低限のルールがようやく定められたのである。

2013年7月5日(金)に開催された2回目の運営会議には社会福祉法人TのYUさんら数名の職員が出席し、今後、社会福祉法人Tは法人として運営に関わらないことが直接伝えられた^{*5-2)}。これにより、末崎町の人々が中心になって運営することがコアメンバーによって確認された。この日には、今後も運営会議を定期的に開催することも提案された。次の運営会議は7月26日(金)である。この日、運営会議を毎月継続して開催することが提案され、以後、毎月の定例会として定着していくことになる。

5-3. 運営体制の変遷

2013年7月1日(月)からパートを依頼していたRTさんは、2013年9月30日(月)でパートを辞めることとなる。この背景には個人的な事情に加えて、パートが1人であったため交代を頼める人がいなかったこと、運営内容が定まっていなかったことからパートの役割も定まっていなかったこと、他の運営メンバーがボランティアで関わっている中でのパートの位置づけが曖昧だったことなどの理由

をあげることができる。特に最後の点に関しては、ボランティアである運営メンバーは好きな時間に来て、好きな時間に帰るという状況であったため、運営メンバーに協力を依頼しにくいという状況も生まれていた。

2013年10月からは木曜と土曜を除く週5日を、コアメンバーが日替わりでボランティアとして運営することになった。けれども、次第に毎日ボランティアで運営するのは大変だという声コアメンバーからあがってくるようになり、特定の人に負担が集中する状況となっていた。

11月末から12月上旬にかけて、再びパートを雇用するという話が出てくることとなる。2013年12月16日(月)、GSさんの呼びかけで運営に中心に関わっているコアメンバーで運営会議を開催することとなった。定例会とは別に開催されたこの運営会議は今後の運営について議論するために開かれたもので、運営体制についてはパートを雇用したいという話となった。そして、12月20日(金)頃、「居場所ハウス」の近くにある4つの仮設住宅に若干名のパートスタッフを募集するためのチラシを配布することとなった。

チラシを配付した仮設住宅の住民からの応募はなかったが、毎週水曜の午前中に開催されている「居場所健康クラブ」に参加していた3人からの応募があった。このうち2人は母親を「居場所健康クラブ」

(表 5-2) 日々の運営体制の変遷

期間	運営時間	曜日	運営の担当(スタッフ)	期間中のスタッフ数
2013年 6月14日(金) ～ 6月30日(日)	10～17時 定休：なし	毎日	・コアメンバーが交替で、ボランティアで運営 ・ボランティアがいない時などは、「末崎地区サポートセンター」職員も運営をサポート	・コアメンバー：5人 (男性3人・女性2人)
2013年 7月1日(月) ～ 9月30日(月)	10～16時 定休：木曜	月・火・水 金・土	・末崎町在住のRTさんがパートで運営 ・コアメンバーが交替で、ボランティアで運営	・パート：1人(女性1人) ・コアメンバー：8人 (男性4人・女性4人)
		木	※定休日だが7月4日(木)、7月18日(木)、8月1日(木)、8月22日(木)の午前中に「いきいき健康教室」が開催	
2013年 10月1日(火) ～ 2014年 1月12日(日)	10～16時 定休：木曜	月・火 水(午後) 金・日	・コアメンバーが交替で、ボランティアで運営	・コアメンバー：12人 (男7人・女性5人) ・おたすけ隊：10人 (女性10人)
		水(午前)	・末崎地区サポートセンターが「居場所健康クラブ」を開催	
		土	・「おたすけ隊」がボランティアで運営	
2014年 1月13日(月) ～ 9月7日(日)	10～16時 定休：木曜	月・火・金	・末崎町在住のCHさん、FSさん、KNさんが交替で2人ずつ、パートで運営	・パート：3人(女性3人) ・コアメンバー：12人 (男性8人・女性4人) ・おたすけ隊：7人 (女性7人)
		水	・末崎町在住のCHさん、FSさん、KNさんがボランティアで運営	
		土	・「おたすけ隊」がボランティアで運営	
		日	・コアメンバーが交替で、ボランティアで運営	
2014年 9月8日(月) ～ 2015年 12月27日(日)	10～16時 定休：木曜	月・火・金	・末崎町在住のCHさん、FSさん、MKさんが交替で2人ずつ、パートで運営	・パート：3人(女性3人) ・コアメンバー：17人 (男性7人・女性10人) ・おたすけ隊：4人 (女性4人)
		水	・末崎町在住のCHさん、FSさん、MKさんがボランティアで運営	
		土	・「おたすけ隊」がボランティアで運営	
		日	・コアメンバーが交替で、ボランティアで運営 ※食堂の運営をスタートしてからは「おたすけ隊」がボランティアで昼食を調理	

※期間中のスタッフ数は末崎町の住民のみを掲載。

※「いきいき健康教室」は末崎地区サポートセンターが末崎町住宅介護支援センターから委託して実施。

に参加させるために付き添いとして参加していた人だった。3人と条件やスタッフの役割について話をし、2014年1月13日（月）の週から月・火・金曜の週3日のパートでの運営を行うこととなった（写真5-4）*5-3）。この時からパートをしているCHさん、FSさんは現在（2015年12月末現在）までパートを続けている。KNさんはパートを辞めることになり、2014年9月8日（月）の週からは「居場所ハウス」の近くに住むMKさんにパートを依頼している（表5-2）。なお、パートでの運営を再開するにあたって、コアメンバーは日曜に週替わりで運営を担当することとなった。

2013年10月1日（火）から2014年1月12日（日）までの3ヶ月半は、ボランティアだけで毎日運営するのは大変だという意見が出されていたものの、定休日の木曜と年末年始以外は1日も休まずに運営を継続した。詳細は次章でみるが、「居場所ハウス」で最初に開催した大きな行事「居場所感謝祭」はこの期間に開催されたものである。さらに、この期間は運営への協力者が増えている。オープン直後に運営を担当したコアメンバーの末崎町の人々は5人だったが、この期間には12人に増加している（表5-2）

土曜の運営については、RTさんがパートを辞めた2013年10月から現在まで、「おたすけ隊」のメンバーがボランティアで運営を担当している。「おたすけ隊」というのは、末崎地区サポートセンター「おたすけ」で毎週月・水曜に開催され、裁縫、小物作りなどを行っている「おたすけクラブ」の参加者有志である。「おたすけクラブ」メンバーは、2013年5月8日（水）に末崎地区サポートセンターで開



(写真 5-3) 2013年7月から9月まで
パートでの運営を行う



(写真 5-4) 2014年1月から
再びパートでの運営が始まる



(写真 5-5) オープン前の「居場所ハウス」を
清掃する「おたすけクラブ」メンバー



(写真 5-6) 「おたすけクラブ」メンバー
による食事会

催されたワークショップに参加し、「居場所ハウス」オープン前に掃除をしたり（写真 5-5）、オープン後に花・植木の手入れ、図書の整理などを行ったりしてきた。何度か「居場所ハウス」でも「おたすけクラブ」が開催されたこともある（写真 5-6）。そして、RT さんがパートを辞めた後は土曜の運営を担当することになるが、自分たちが楽しむために「居場所ハウス」に来ているのでパートではなく、ボランティアで運営に関わりたいという話であった。「おたすけ隊」の中心になっているのは KO さん、AS さん、AS さんの 3 人であり、2014 年 3 月頃から「おたすけ隊」という名称が使われるようになった。「おたすけ隊」は 2014 年 5 月に食堂の運営が始まってからは、日曜の調理も担当している。なお、「おたすけ隊」は、元々「おたすけクラブ」の参加者有志であったが、現在は「おたすけクラブ」に参加していないメンバーもいる。

パートでの運営は 2014 年 1 月 13 日（月）の週から始まり、現在まで継続されている。ただし 2014 年 1 月 13 日（月）からパートを雇用することに関しては理事会と運営メンバーで意見の相違がみられた。パートの雇用を提案したのは、ボランティアのなり手がいない状況を日々感じていた運営メンバーだったが、当初、理事の 2 人からは、パートを雇用するとパートに任せっきりになる恐れがあるため、ボランティアでの運営を基本とした方がよいという意見が出されていた。運営メンバーはボランティアで運営するには人数が不足しているという状況を伝えたため、理事は、パートの雇用を十分な人数のボランティアが集まるまでの暫定的な対応として、2013 年 12 月 16 日（月）の運営会議の決定事項を事後的に認めたという経緯がある^{*5-4}。この出来事により「居場所ハウス」の日々の運営を担う運営メンバーには、「居場所ハウス」の運営の方向性を決めるにあたってどのような決定権があるかが問われることになったといえる。

この後の展開は先に述べた通り、2014 年度からは末崎町の 6 人が新たに理事に就任することになり、日々の運営を担う運営メンバーが、運営に対して決定権を持てる体制が整うことになる。末崎町の人に理事に加わってもらうことは、2013 年 10 月 17 日（木）に開催された理事会で提案されたのが最初であるが、この時点では具体的な候補者の名前が出されたわけではなかった。NPO 法人の設立当初の理事の任期は 2014 年度の総会までであったため、2014 年 3 月 23 日（日）に開催された理事会で、再度、理事について議論された。この日の理事会では、日常的な運営に関わることができる末崎町の人に理事に加わってもらい運営体制を確立すること、2014 年度の総会までに候補となる人を探すことが確認された。総会の数日前に開催された 2014 年 5 月 20 日（火）の理事会では、新たに理事に加わってもらう候補者 6 人が確認された。6 人の中には、それまで運営を中心になって担ってきた GS さん、TK さんも含まれており、理事に就任する少し前から GS さんは館長を名乗るようになった^{*5-5}。

5-4. 定例会

2013 年 6 月 29 日（土）に初めて開催された運営会議は、現在は毎月の定例会として定着している。オープンからしばらくの間、用事があって昼間は都合が悪い、女性は夕方参加しにくいなどの意見を考慮し、定例会は昼間に開かれたり夕方に開かれたりしており、夕方に開かれた日は定例会後に懇親会を開催していた。2014 年 4 月 25 日（金）からは月末の平日の午後に開いており、現在まで定着している。定例会では「居場所ハウス」の近況の共有、運営で生じた課題についての意見交換、大きな行事に向けての打合せ、環境整備や備品購入、次月の日曜のボランティアスタッフの決定などを行っている。また、鯉のぼり祭りや周年記念感謝祭など、大きなイベントがある時には、定例会とは別に実行委員会を開催することがある（表 5-3～5, 写真 5-7～10）。

定例会などの会議には、明示的に参加資格をもうけているわけではないが、毎回 10～15 名ほどの

運営メンバーらが参加している。当初は男性の割合が多かったが、最近では女性の割合が増える傾向にある（図5-2）。今までに定例会などの会議に参加したことのある理事と運営メンバーをみると（表5-6）、当初はコアメンバーだけが参加していたが、最近ではパート、「おたすけ隊」のメンバーも参加するようになってきている（表2-6）。会議への参加者を見ると、継続して参加している人もいれば、当初は参加していたが参加しなくなった人、最近参加し始めた人がおり、オープンから2年半の間にメンバーには入れ替わりがあることがわかる。なお最近、女性の出席者の割合が増えているのはパート、「おたすけ隊」のメンバーが参加するようになったことも要因の1つである。

なお、定例会などの会議とは別に、2015年4月20日（月）、5月18日（月）には子どもの一時預かりに向けての会議を開催した。この会議には「居場所ハウス」の運営メンバー数人と、末崎町の元保母・教員の住民ら合わせて約15人が参加した。保護者が仕事や病気で子どもの世話ができなくなった時のために、末崎保育園・小学校に通う幼児・児童を学校の休日（代替休日）と土曜日に「居場所ハウス」で一時的預かりをすることを議論し、集まったメンバーで「わらしっ子見守り隊」を結成した^{*5-6)}。

5-5. オープンまでに開催されたワークショップ・会議の参加者

「居場所ハウス」ではオープンの1年以上前から末崎町の人々を交えたワークショップや会議が重ねられてきた。ここでは「居場所ハウス」の運営メンバーが、どの時点からワークショップや会議に関わり始めたのかという観点から、オープンまでの経緯を振り返ることとする。

プロジェクトのワークショップが最初に開催されたのは2012年5月14日（月）で、IbashiのEKさん、オペレーションUSAのSFさんの来日に合わせて開催された。この時には既に末崎町でプロジェクト

（表5-3）2013年の定例会・会議一覧

年	月	日	曜日	時間	活動名	出席者数	定例会の主な議題
2013	6	29	土	14:10 ～16:20	定例会	15	運営時間、休館日、飲物の「お気持ち料」、団体利用の手続き、RTさんをパートとして雇用すること、毎週日曜はコアメンバーがボランティアで当番すること、コアメンバーの役割分担
	7	5	金	19:00～	定例会	17	団体利用の手続き、コアメンバーの役割分担、道路沿いの看板、定期的に会議を開催すること
	7	26	金	18:00 ～19:15	定例会	9	団体利用の手続き、お盆休み、飲物の「お気持ち料」の表示、NPO法人の会員募集、チラシ配布、会議を毎月継続して開催すること
	8	23	金		定例会		—
	9	27	金	11:30 ～13:00	定例会	9	暖房、ハネウェル社からの運営協力金で購入する備品、RTさんがパートを辞めた後の運営体制、行事の案内、行事のアイデア
	10	7	月	10:00 ～12:00	定例会	10	ハネウェル社からの運営協力金で購入する備品、行事案内、10月後半の運営スタッフ、定休日に来訪する人への対応、運営協力を募ること
	10	25	金	18:00 ～19:30	定例会	11	理事会の報告、ハネウェル社からの運営協力金で購入する備品、コアメンバーの役割分担、11月前半の運営スタッフ、居場所感謝祭に向けて、行事案内、運営費の確保
	11	15	金	18:15 ～19:30	定例会	11	ハネウェル社からの運営協力金で購入する備品、居場所感謝祭に向けて、行事案内、11月後半の運営スタッフ
	12	8	日	17:00 ～20:00	定例会	25	環境整備（薪ストーブ・柱の撤去・勝手口）、12月の運営スタッフ、行事案内、年末年始の予定、地域通貨、居場所感謝祭の報告・慰労会
	12	16	月	15:00 ～17:15	運営会議	7	運営の方向性、運営体制、補助金、NPO法人の会計、環境整備（薪ストーブ・柱の撤去・勝手口・土間部分の床の補修）、委託販売、ハネウェル社からの運営協力金で購入する備品

※ 2013年12月8日（日）は定例会終了後に「居場所感謝祭」の慰労会を開催。

(表 5-4) 2014 年の定例会・会議一覧

年	月	日	曜日	時間	活動名	出席者数	定例会の主な議題
2014	1	6	月	13:00～	定例会	15	パートの雇用、運営体制、環境整備（柱の撤去・勝手口の設置）、運営の方向性、行事案内、地域通貨、1月の運営スタッフ
	1	14	火	11:30～13:00	補助金打合せ	4	補助金、NPO 法人の会計
	1	28	火	13:30～15:00	定例会	約10	理事会の報告、CHさん・FSさん・KNさんの3人をパートとして雇用したこと、行事案内、カラオケ同好会、2月の日曜日の運営スタッフ
	2	25	火	13:30～15:00	定例会	10	環境整備（柱の撤去・勝手口・裏の物置）、行事案内、ひな祭り、地域通貨、キッチンカーの情報、建物のメンテナンス、3月の日曜日の運営スタッフ
	3	23	日	17:40～18:30	定例会	14	理事会の報告、地域通貨、コアメンバーの役割分担、NPO 法人の体制、キッチンカーと産直、行事案内、KUMON 東北トリップ、昼食のまかない、4月の日曜日の運営スタッフ
	4	6	日	10:00～12:00	企画運営委員会	8	鯉のぼり祭り、一周年記念感謝祭に向けて
	4	25	金	13:30～	定例会	11	補助金への応募、表の花壇、行事案内、鯉のぼり祭り、5月の日曜日の運営スタッフ
	5	30	金	13:30～	定例会	15	補助金への応募、キッチンカーの運営、行事案内、一周年記念感謝祭、コーヒーメーカー・かき氷機の使い方講習、地域通貨、6月の日曜日の運営スタッフ
	6	10	火	18:00～20:00	一周年記念感謝祭第1回実行委員会	16	一周年記念感謝祭に向けて
	6	29	日	13:30～15:00	定例会 一周年記念感謝祭第2回実行委員会	16	理事会の役割、定款の変更、地域団体との関係、運営費の確保、館長の役割、一周年記念感謝祭、行事案内、7月の日曜日の運営スタッフ
	7	25	金	13:30～	定例会	13	一周年記念感謝祭の報告、お盆休み、納涼盆踊り、行事案内、8月の日曜日の運営スタッフ
	8	26	火	13:30～15:00	定例会	8	朝市、キッチンカー、行事案内、居場所農園の草取り作業、9月の日曜日の運営スタッフ
9	27	土	13:30～	定例会	13	居場所農園、カマドの移設、行事案内、朝市、コアメンバーの役割分担、10月の日曜日の運営スタッフ	
10	29	水	13:30～	定例会	11	理事会の報告、大槌町・釜石市への視察報告、朝市の報告、グランドピアノ、行事案内、来月の朝市、11月の日曜日の運営スタッフ	
11	26	水	13:30～14:45	定例会	12	クリスマスキッズデー、行事案内、来月の朝市、フィリピンへの訪問、12月の日曜日の運営スタッフ	
12	24	水	13:20～15:00	定例会	15	クリスマスキッズデーの報告、補助金への応募、朝市の報告、2014年の振り返り、2015年の運営（朝市・キッチンカー）、年末大掃除、行事案内、来月の朝市、フィリピンへの訪問、1月の日曜日の運営スタッフ	

※ 2014年6月29日（日）は理事会と同時開催。

※ 2014年12月24日（水）は定例会終了後に忘年会を開催。

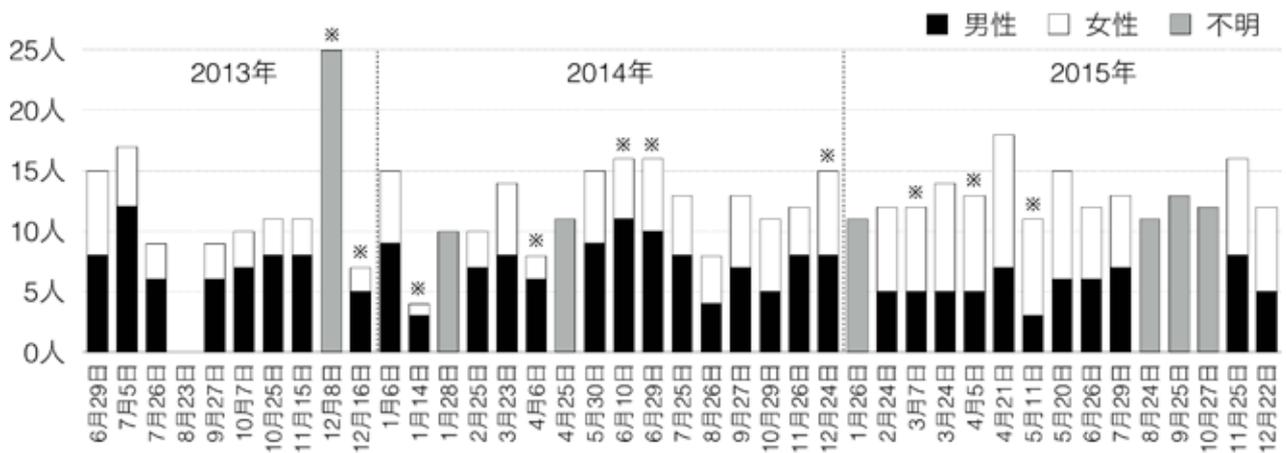
を行うことが決まっていたが、ワークショップが行われたのは事務局をつとめた社会福祉法人Tの大船渡町にある本部であった。この後も社会福祉法人Tの本部でワークショップや会議が重ねられる(表5-7)。

敷地の見学を除き、末崎町内で初めて開催されたワークショップや会議は2012年9月15日(土)のNPO法人の設立総会である、この後は末崎町内の末崎地区公民館「ふるさとセンター」、末崎町サポートセンター、「居場所ハウス」建設現場のプレハブ事務所でワークショップや会議が開催されるようになる。

オープン前に開催されたワークショップや会議には、後にNPO法人の理事に就任するIbashiのEK

(表 5-5) 2015 年の定例会・会議一覧

年	月	日	曜日	時間	活動名	出席者数	定例会の主な議題
2015	1	26	月	13:30～	定例会	11	補助金への応募、朝市の報告、行事案内、来月の朝市、キッチンスペースの増築、2月の日曜日の運営スタッフ
	2	24	火	13:30～15:00	定例会	12	ひな祭りの報告、キッチンスペースの増築、行事案内、来月の朝市、子どものゲーム、フィリピン・世界銀行メンバーの訪問への対応、国連防災会議への出席、3月の日曜日の運営スタッフ
	3	7	土	13:00～13:40	国連防災会議打合せ	12	フィリピン・世界銀行メンバーの訪問への対応、国連防災会議への出席
	3	24	火	13:30～	定例会	14	フィリピン・世界銀行メンバーの訪問の報告、高連防災会議の報告、キッチンスペースの増築、行事案内、来月の朝市、来年度の運営、4月の日曜日の運営スタッフ
	4	5	日	13:30～	鯉のぼり祭り実行委員会	13	鯉のぼり祭りに向けて
	4	21	火	13:30～	定例会	18	補助金の採択、行事案内、来月の朝市、子どもの一時預かり、鯉のぼり祭り、キッチンスペースの運営、5月の日曜日の運営スタッフ
	5	11	月	12:55～13:25	キッチンスペース打合せ	11	キッチンスペースの運営、メニュー
	5	20	水	13:30～14:00	定例会	15	鯉のぼり祭りの報告、キッチンスペースの運営、子どもの一時預かり、農園体験・ボランティア、二周年記念感謝祭、行事案内、来月の朝市、6月の日曜日の運営スタッフ
	6	26	金	13:30～14:20	定例会	12	二周年記念感謝祭の報告、行事案内、来月の朝市、子どもの一時預かり、被災地見学会、納涼盆踊り、7月の日曜日の運営スタッフ
	7	29	水	13:30～14:45	定例会	13	被災地見学会の報告、お盆休み、行事案内、来月の朝市、納涼盆踊り8月の日曜日の運営スタッフ
	8	24	月	13:30～	定例会	11	納涼盆踊りの報告、行事案内、来月の朝市、キッチンスペース・朝市の運営、9月の日曜日の運営スタッフ
	9	25	金	13:30～	定例会	13	昼食のメニュー、行事案内、来月の朝市、居場所農園、10月の日曜日の運営スタッフ
10	27	火	13:30～	定例会	12	フィリピン訪問、行事案内、来月の朝市、居場所農園収穫祭、Ibashiの理念の振り返り、運営についての意見交換、11月の日曜日の運営スタッフ	
11	25	水	13:30～14:45	定例会	16	居場所農園収穫祭の報告、行事案内、来月の朝市、クリスマスの飾り付けと薪運び、年末年始の予定、12月の日曜日の運営スタッフ、運営についての意見交換、12月の日曜日の運営スタッフ	
12	22		13:35～14:40	定例会	12	クリスマスケーキ作りの報告、年末年始の予定、建物のメンテナンス(月見台の再塗装、屋外のキッチンスペースから居場所ハウス内への雨よけ)、行事案内、来月の朝市、歴史を学ぶ会、運営についての意見交換、1月の日曜日の運営スタッフ	



※ 2013年12月8日(日)は定例会終了後に「居場所感謝祭」の慰労会を開催、12月16日(月)は運営会議として開催。
 ※ 2014年1月14日(火)は補助金打合せ、4月6日(日)は企画運営委員会、6月10日(火)は「一周年記念感謝祭」第一回実行委員会として開催。6月29日(日)は理事会、「一周年記念感謝祭」第二回実行委員会と同時開催、12月24日(水)は定例会終了後に忘年会を開催。
 ※ 2015年3月7日(土)は国連防災会議打合せ、4月5日(日)は鯉のぼり祭り実行委員会、5月11日(月)はキッチンスペース打合せとして開催。

(図 5-2) 定例会などの会議の参加者数の推移



(写真 5-7) キッチンスペースの打合せ



(写真 5-8) 定例会でのコーヒーのいれ方講習会



(写真 5-9) 定例会 (2015年11月)



(写真 5-10) ホワイトボードで次の定例会を案内

(表 5-6) 理事・運営メンバーの定例会・会議への参加状況

2013年

月	日		理事			理事 (2014～)									コアメンバー										パート				おたすけ隊				他の参加					
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚		㉛	㉜			
6	29	定例会	●	●		●				●	●	●	●	●	●	●	●	●										●										2
7	5	定例会	●		●	●					●	●	●	●	●	●	●			●	●							●										4
7	26	定例会	●			●	●			●	●	●	●	●																							0	
8	23	定例会																																				
9	27	定例会	●			●	●				●	●			●												●										0	
10	7	定例会	●			●	●				●						●			●	●																3	
10	25	定例会	●			●	●			●		●			●		●	●	●																		1	
11	15	定例会	●			●					●	●	●	●	●	●				●	●																1	
12	8	定例会																																				
12	16	運営会議	●			●	●					●			●	●																					0	

2014年

月	日		理事			理事 (2014～)									コアメンバー										パート				おたすけ隊				他の参加					
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚		㉛	㉜			
1	6	定例会	●		●	●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●																			3
1	14	補助金打合せ			●	●									●	●																					0	
1	28	定例会																																				
2	25	定例会				●	●				●	●	●	●	●							●															2	
3	23	定例会	●	●		●	●			●	●	●	●	●	●							●															2	
4	6	企画運営委員会	●			●					●		●		●						●	●															0	
4	25	定例会																																				
5	30	定例会	●			●	●				●	●		●	●	●	●	●	●								●	●									3	
6	10	記念感謝祭実行委員会	●			●	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●																	2	
6	29	理事会 定例会 記念感謝祭 実行委員会	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●																		3	
7	25	定例会				●	●			●		●	●	●	●	●	●	●	●			●	●														3	
8	26	定例会	●			●	●				●	●						●				●															1	
9	27	定例会	●			●	●				●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								0	
10	29	定例会	●			●	●				●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								0	
11	26	定例会	●			●					●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								2	
12	24	定例会				●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●							1	

2015年

月	日		理事			理事 (2014～)									コアメンバー										パート				おたすけ隊				他の参加				
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚		㉛	㉜		
1	26	定例会																																			
2	24	定例会	●			●	●				●			●	●	●	●	●	●			●	●				●	●									0
3	7	国連防災世界 会議打合せ	●			●	●				●			●	●	●	●	●	●			●															0
3	24	定例会	●			●	●				●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								0
4	5	鯉のぼり祭り 実行委員会	●			●				●	●	●					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								3
4	21	定例会	●			●	●				●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								1
5	11	キッチンス ペース打合せ				●	●				●			●								●						●	●	●	●	●	●	●	●		0
5	20	定例会	●			●	●				●	●		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								1
6	26	定例会	●			●	●				●			●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								0
7	29	定例会	●			●	●			●			●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								0
8	24	定例会																																			
9	25	定例会																																			
10	27	定例会																																			
11	25	定例会	●			●	●				●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								0
12	22	定例会				●	●				●	●		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								0

※メンバーの数字①～⑳は表5-8と対応している。コアメンバーの理事は、理事の欄に記入している。

※「他の参加」は表に記入した理事・運営メンバー以外の参加者数を表す。

(表 5-7) オープンまでのワークショップ・会議一覧

年	月	日	曜日	時間	出来事	開催場所	末崎町内	末崎町外
2012	5	14	月	10:00～15:00	ワークショップ（居場所カフェの理念・イメージを共有する）を開催	社会福祉法人T本部		●
	5	15	火	14:00～16:00	会議（ワークショップの振り返りなど）を実施	社会福祉法人T本部		●
	5	16	水	13:30～17:00	ワークショップ（メニューを考える）を開催	社会福祉法人T本部		●
	5	17	木	11:45～	会議（サポートセンターとの関係などについて）を実施	社会福祉法人T本部		●
	5	17	木		会議（サポートセンターとの関係などについて）を実施	大船渡市総合福祉センター		●
	5	17	木	14:15～14:30	会議（建物などについて）を実施	社会福祉法人T本部		●
	6	8	金		プロジェクトの敷地を見学	居場所ハウス敷地	●	
	6	29	金	10:30～12:00	会議（建物などについて）を実施	社会福祉法人T本部		●
	7	10	火	11:00～12:30	会議（敷地、NPO法人設立などについて）を実施	社会福祉法人T本部		●
	7	10	火	16:00～18:00	会議（敷地、建物、備品購入などについて）を実施	社会福祉法人T本部		●
	7	10	火		プロジェクトの敷地を見学	居場所ハウス敷地	●	
	7	11	水	10:20～12:00	会議（建物についてなど）を実施	社会福祉法人T本部		●
	7	11	水	13:30～15:30	ワークショップ（運営・建物を考える）を開催	社会福祉法人T本部		●
	7	11	水	17:00～18:00	会議（NPO法人設立、運営などについて）を実施	社会福祉法人T本部		●
	7	13	金	10:00～11:30	会議（建物、運営などについて）を実施	社会福祉法人T本部		●
	8	7	火		プロジェクトの敷地所有者と土地契約を結ぶ			
	9	15	土	16:30～18:30	NPO法人・居場所創造プロジェクト、設立総会を開催	末崎地区公民館	●	
	10	16	火	18:30～	地域説明会を開催	末崎地区公民館	●	
10	24	水	11:45～	地鎮祭を開催	居場所ハウス敷地	●		
10	25	木	14:00～16:00	ワークショップ（運営・建物を考える／自分ができることを見つける）を開催	末崎地区公民館	●		
12	7	金	13:30～	ワークショップ（自分ができることを見つける）を開催	末崎地区公民館	●		
12	18	火	10:30～	会議（運営などについて）を実施	末崎地区公民館	●		
2013	1	22	火	12:00～14:00	会議（運営などについて）を実施	居ハ現場事務所	●	
	1	24	木	13:30～15:30	会議（運営などについて）を実施	末崎地区公民館	●	
	3	8	金		「NPO法人・居場所創造プロジェクト」設立			
	3	27	水	14:00～16:00	NPO法人・居場所創造プロジェクト、平成24年度社員総会を開催	末崎地区サポートセンター	●	
	5	8	水	14:00～15:30	ワークショップ（自分ができることを見つける）を開催	末崎地区サポートセンター	●	
	5	15	水	10:30～12:20	会議（運営などについて）を実施	居場所ハウス現場事務所	●	
	5	15	水		鍵引き渡し	居場所ハウス	●	
	5	27	月	9:00～11:00	NPO法人・居場所創造プロジェクト、平成25年度第1回社員総会を開催	居場所ハウス現場事務所	●	
	6	10	月	09:10～1:50	NPO法人・居場所創造プロジェクト、平成25年度第2回社員総会を開催	居場所ハウス	●	
	6	13	木	11:00～	「居場所ハウス」オープニングセレモニー	居場所ハウス	●	
6	13	木	18:00～20:00	はじまりのシンポジウム	居場所ハウス	●		

※オープンまでのワークショップ・会議の一覧は、北海道大学大学院の修了生の蒔苗沢子氏の記録等をもとに作成した。

12)。末崎町の人々で運営する体制を作るために「居場所ハウス」に対して自分に何ができるかを紹介するワークショップである。このワークショップには運営メンバーを含め約40人の参加があり、郷土料理が作れる、大工仕事ができる、お茶碗が洗える、草取りができる、お茶を教えることができる、英語が得意などの多様な特技が紹介された(図5-3)。同様のワークショップは2012年12月7日(金)、2013年5月8日(水)にも開催された。地域には様々な特技を持つ人がいることが共有できたこと、高齢者であっても「居場所ハウス」の運営に関われるという雰囲気が生まれてきたことは有意義であった。

2012年12月7日(金)のワークショップの後、事務局はワークショップで出された特技をもとに「居場所ハウス」で実現可能なプログラム案を作成した(表5-9, 図5-4)。「居場所ハウス」の運営時間帯をカバーするように時間帯が設定され、実施場所や対象者までが考えられた詳細な内容ではあるが、このプログラム案がオープン後の運営に結びつくことはなかった。このプログラムが妥当なものかどうかという議論、具体的にどのように実施していくかという議論が行われることがなかったからである。こうした議論を、その時点で事務局を担当していた社会福祉法人Tが中心となって行うのか、オープン後の運営を担う末崎町の人々が中心になって行うのかという根本的な部分が議論されていなかったからである。さらに重要なことは、地域の人々が特技をいかすプログラムの寄せ集めでは、日常の場所である「居場所ハウス」を運営できないということである。「居場所ハウス」オープンまでに抜け落ちていたのは、地域の人々が特技をいかすための場所をどう成立させていくかという視点である。オープン後に「居場所ハウス」を運営するためのボランティアが集まらなかったことの要因として、こうした視点の欠如をあげることができる。

「居場所ハウス」がオープンしてから、オープンまでに開催したワークショップをやりっ放しにしてはいけないという意見が何度か出された。そこでワークショップで発表した人に声をかけ、2014年4月19日(土)に「日本茶を楽しむ会」を1度開催したことがある。また、ワークショップで提案された「ふれあい産直市場」、「花壇作り」、「だれでもできるニュースポーツ教室」などいくつかのものは、当初の計画とは異なっているが現在の「居場所ハウス」で行われている。

5-6. 地域外からの働きかけで始まるプロジェクトが抱える難しさ

本章では「居場所ハウス」のプロジェクトは、米国からの提案によってスタートし、当初はIbasho、オペレーションUSA、社会福祉法人T、H大学大学院のメンバーを中心にプロジェクトが進められた



(写真5-11) 2012年10月25日のWS



(写真5-12) 2012年10月25日のWS

●料理

- ・どじょうを作っている、どじょうを食べたことがない奥さんにも食べさせた、みなさんにも食べてもらいたい、あら汁も作れる
- ・ちょっとしたおやつ作り
- ・パンを作って安く売りたい。手作りパン
- ・かまもち作り
- ・料理ができる
- ・食べることができる、一日に一回はお年寄りが作る料理を食べたい。
- ・遠野の「ともちゃん」の産直で作っているパンを作りたい、今はできないけれど今後やりたい。
- ・お客さんになって色々教えていただきたいです。歌など、新しい料理。食べ物は洋食が食べたい。郷土料理だけでなく。
- ・漬物を漬けたり、豚汁を作ったり、畑仕事、洋裁
- ・料理作りのお手伝い、子どもと遊ぶこと

●家事

- ・草取りは得意です。
- ・ご飯を食べた後の茶碗洗いができる
- ・片づけ方ならできる
- ・大工仕事ができる

●喫茶

- ・美味しいコーヒー作りを挑戦したい
- ・客として、おいしいコーヒーが飲みたい。ケンミンショーで話題になったメニューおちづきセット、あんこもちとうどんのセット、を目玉にはどうか。
- ・皆さんでコーヒーを飲みに行きたい

●教室

- ・ソフトテニスをやっている。岩手県の代表で試合に出ている。年に一度、熊野神社の元朝参りの時に作っている甘酒を飲みたい。甘酒作りのお手伝いもできる。水彩・油絵でもできる
- ・英語ができる
- ・スペイン語が教えられる
- ・長い外国生活で世界の国々のお話ができます。
- ・時事問題の解説が得意です
- ・ヨガ療法の先生をお願いする。あまり体を動かさずに血行を抑制、体調を整える
- ・家に来てもらって月謝をもらってお茶を教えているが、居場所カフェでは月謝まで取らなくてもお茶代くらいで教えられる。八畳以上の広さが欲しいです。
- ・①和裁や洋裁の教室、②昔語りを語れる

●郷土文化

- ・アイヤを踊れる
- ・民謡、トーク&ライブ

●趣味

- ・謡や詩吟などやりたいです。
- ・囲碁、将棋
- ・パッチワーク作りができる
- ・誰でもできる簡単なスポーツ（ニュースポーツ）ができる
- ・唱歌が歌える
- ・横浜でオーケストラをやっている、コントラバスの演奏ができる、ほかに演奏できる演奏者の人を募ってコンサートをしたい
- ・聴くこと、お酒を飲むこと、ダンス

●その他

- ・遠くの人を末崎に呼びます
- ・自分は特技がありません。何でも教わることができます
- ・家の中にいて若い人たちになんだかんだと言っていると、自分はひどい顔をしていると思うが、好きなパッチワークをやっているときはすごく楽しい。そういうことをしていると、同じように好きなことをしている人が集まってきて、楽しい。そういうことをやりたい。
- ・たくさんの特技のある人がいるので、どういう風にこれらを調整するのか、という点が気になる。また、環境整備。花をここに植えようとか、東屋をここにしようとか。できることは、たまに写真を撮ったりして、記録写真を撮ったりすること
- ・今日は忙しいから手伝ってほしい、と言われたら馳せ参じます、子どもと一緒に遊ぶこと、傾聴すること
- ・特技は無いけれども、少しならパソコンやワープロができる
- ・大正・昭和初期のレコードを持っている、千正男のデビュー当初のレコードを持っている、火のある生活体験
- ・手芸をすることができる、材料を集める仕事ができる、差し入れができる

(図 5-3) 2012 年 10 月 25 日 (木) のワークショップで発表された「私のできること・特技」

(表 5-9) ワークショップで出された意見をふまえた「居場所ハウス」で実施するプログラム案

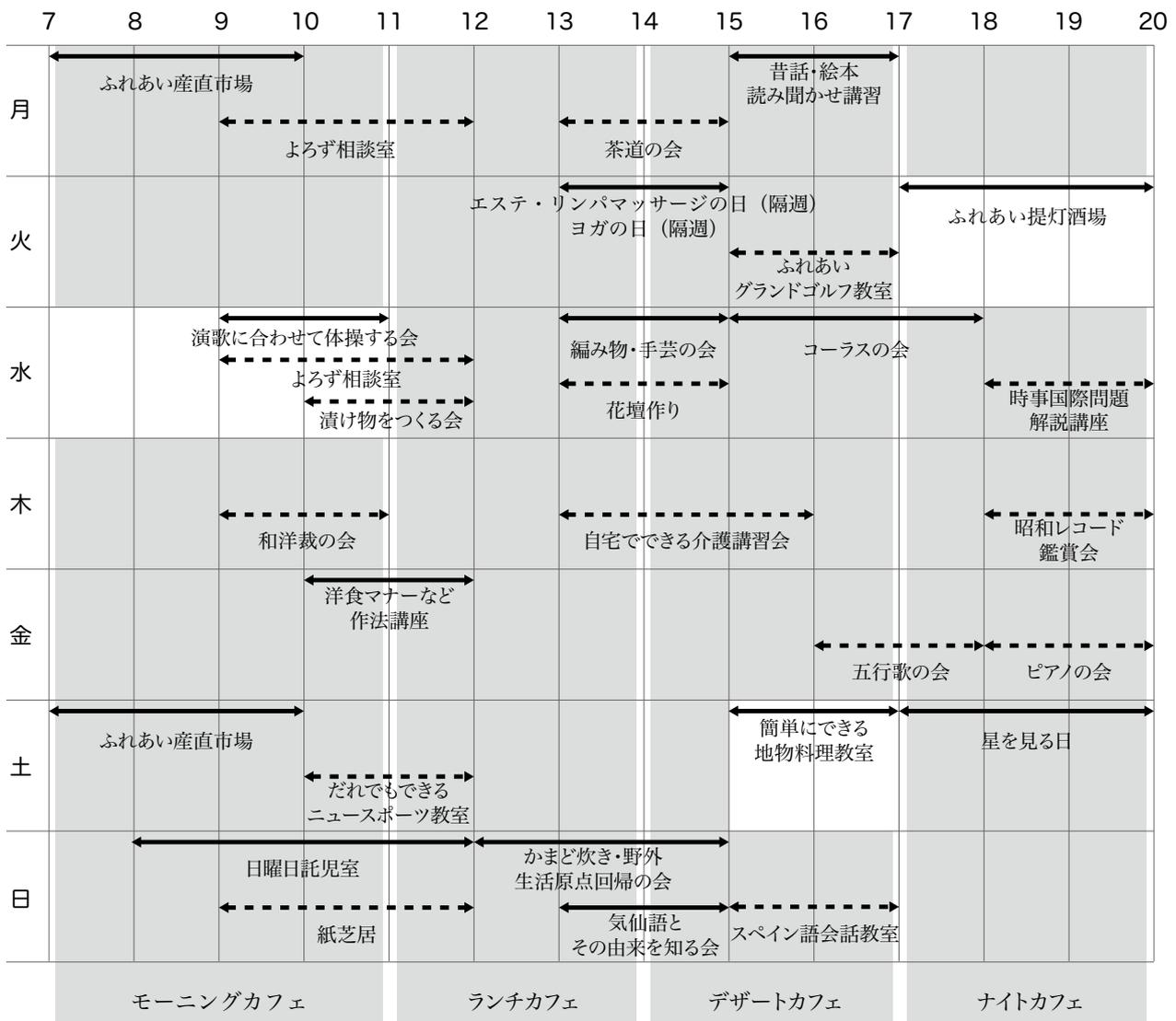
分類	プログラム名	開催日	開催場所	対象者
生活	自宅でできる介護講習会	週1回(木・13～16)	室内	青年からお年寄りまで
	洋食マナーなど作法講座※	週1回(金・10～12)	室内	青年からお年寄りまで
	日曜日託児室※	週1回(日・8～12)	室内	育児ママ
	エステの日・リンパマッサージの日※	隔週1回(火・13～15)	室内	女性
	ヨガの日※	隔週1回(火・13～15)	室内	女性
	星を見る日※	週1回(土・17～20)	月見台	老若男女
	花壇作り	週1回(水・13～15)	庭	だれでも
	ふれあい産直市場※	週2回(月土・7～10)	前庭、裏庭、入口土間、雨天は土間及びキッチン	子供から大人まで、地物を取り扱ってる方、手作りの商品をお持ちの方
	簡単にできる地物料理教室※	週1回(土・15～17)	庭、室内で勉強会	地元の家料理を学びたいという方、単身者、食生活が乱れがちな若年層の方、講師は、末崎地区でずっと家庭料理を作ってきた女性陣
	漬け物をつくる会	週1回(水・10～12)	土間、キッチン	興味のある人
	紙芝居	週1回(日・9～12)	読書ラウンジ、託児タイムに合わせて	子供達、育児ママたち
	かまど炊き・野外生活原点回帰の会※	週1回(日・12～15)	読書ラウンジ、託児タイムに合わせて	若年層からお年寄りまで、特に子供達
	よろず相談室	週2回(月・水・9～12)	読書ラウンジ、和室を一体的に利用	ご相談のある方、お話しにきたい方、特に介護者、育児ママ達の声を聞きたい
	和洋裁の会	週1回(木・9～11)	読書ラウンジ、和室を一体的に利用	老若男女
昔話・絵本読み聞かせ講習※	週1回(月・15～17)	和室・土間	育児ママからおばあちゃんまで	
文化	五行歌の会	週1回(金・16～18)	室内	子供からお年寄りまで
	ピアノの会	週1回(金・18～20)	土間	興味のある人、いい感じでカフェタイムを過ごしたい人
	時事国際問題解説講座	週1回(水・18～20)	室内であればどこでも可能	子供から大人まで、国際社会に興味のある方
	コーラスの会※	週1回(水・15～18)	読書ラウンジ	興味のある人
	編み物・手芸の会※	週1回(水・13～15)	読書ラウンジ	高齢者層ターゲット
	スペイン語会話教室	週1回(日・15～17 [15～16、スペイン語会話/16～17、スペイン文化談話])	読書ラウンジ、和室を一体的に利用	子供から大人まで、スペイン語圏に興味のある方、スペイン語会話を習得したい方
	気仙語とその由来を知る会※	週1回(日・13～15)	読書ラウンジ、和室を一体的に利用	老若男女
	昭和レコード鑑賞会	週1回(木・18～20)	読書ラウンジとカフェ	老若男女
	茶道の会	週1回(月・13～15)	和室・土間	若年層からお年寄りまで
	演歌に合わせて体操する会※	週1回(水・9～11)	屋外、雨天時室内	高齢者を中心とした幅広い世代
運動	だれでもできるニュースポーツ教室	週1回(土・10～12)	庭、雨天中止	子供から高齢者まで、できれば多世代で参加が望ましい
	ふれあいグランドゴルフ教室	週1回(火・15～17)	庭、室内で勉強会	高齢者を中心にグランドゴルフの技術向上を望む方
飲食	ふれあい提灯酒場※	週1回(火・17～20)	キッチンまわり	成人以上、15人程度

※2012年10月25日(木)、12月7日(金)のワークショップをふまえ、事務局が作成したプログラム一覧資料をもとに作成。表中で「※」をつけたものは「居場所ハウス」が主催するプログラムと計画されていた。

※この表のプログラム案はオープン後の運営には直接はつながらなかった。

こと、現在の「居場所ハウス」の運営メンバーは当初のワークショップや会議にはほとんど参加しておらず、末崎町内でワークショップや会議が行われるようになってから参加し始めたこと、「居場所ハウス」は具体的な運営のあり方が決まらない状態でオープンを迎えてしまったこと、オープンから半年が経過した頃から理事と運営メンバーの間で意見の相違が顕在化してきたこと、そして、2014年5月23日(金)に開催されたNPO法人の総会で末崎町の6人が新たに理事に就任したことをみてきた。

何度か述べた通り、NPO法人の設立当初の理事には、設立に中心となって関わった3人が就任した。しかし、3人のうち2人は末崎町に住んでおらず、日々の運営には関わっていなかった。日々の運営は理事会とは別に開かれていた定例会に参加する運営メンバーが担っていた。運営メンバーは具体的な運営のあり方が何も決まっていなかった状態から、運営のあり方を定め、生じた課題に対応しながら運営を継続してきたのである。運営メンバーと理事の意見の相違が顕在化した2013年11～12月頃から、運営メンバーの中で中心的な役割を担っていたGSさん、TKさんをはじめ、末崎町の6人が理事に就



※ 2012年10月25日(木)、12月7日(金)のワークショップをふまえ、事務局が作成したプログラム一覧資料をもとに作成。実線で示したものは「居場所ハウス」が主催するプログラムと計画されていた。

※この表のプログラム案はオープン後の運営には直接はつながらなかった。

(図5-4) ワークショップで出された意見をふまえた「居場所ハウス」で実施するプログラム案

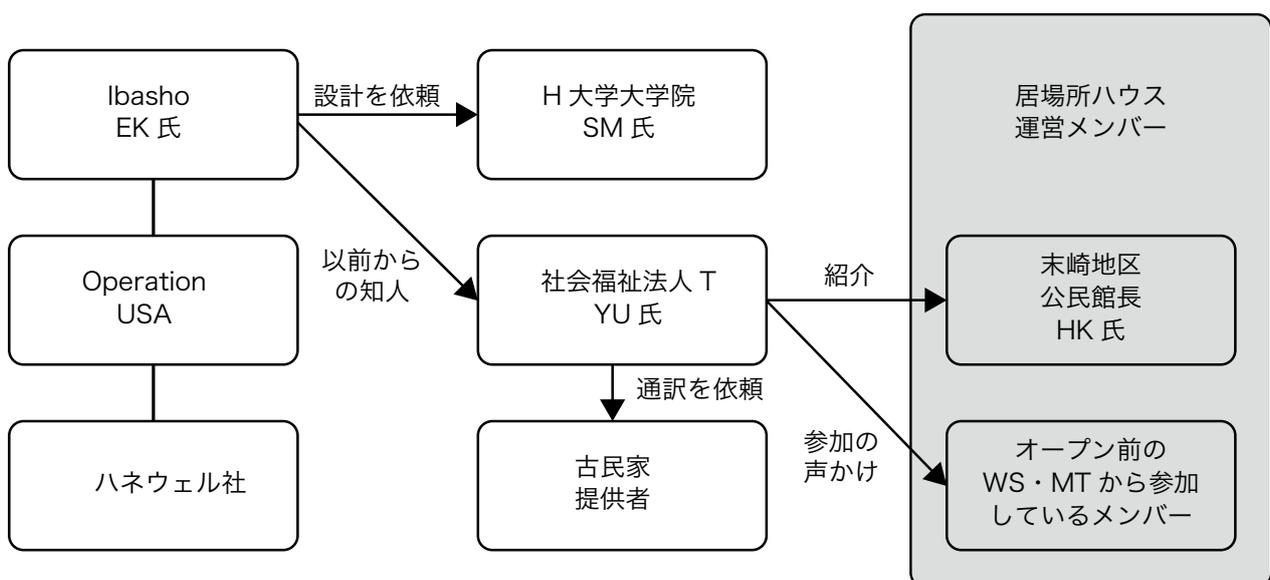
任する 2014 年 5 月頃まで、つまり、オープンして半年から 1 年が経過する頃までの時期は、「居場所ハウス」を末崎町の人々で運営する体制が確立された時期だったと捉えることができる^{*5-7)}。

こうした経緯を振り返れば、「居場所ハウス」が現在の体制で運営されるようになるまでの過程は決してスムーズだったとは言えない。この点に関しては当初からワークショップや会議を末崎町内で開催するという場所の選定、オープンまでの事務を担った社会福祉法人 T の役割の明確化、限られた人しか参加していなかった会議の議事録の公開、末崎町の人々がワークショップや会議を主催する機会の提供、地域の人々が特技をいかすための日常の場所をどう成立させていくかという視点の必要性など改善できた点が多い。しかし、これらを個々に改善するとしても、地域外からの提案で始まるプロジェクトが抱える難しさは依然として残されたままである。この難しさを、地域外からの働きかけが地域の人々にどう関わりをもっていくかという側面と、地域の人々がプロジェクトにどう関わりをもっていくかという側面からみることとする。

前者については、「居場所ハウス」のように特定の個人や組織ではなく、地域の人々を対象として提案されたプロジェクトの場合、当初は、地域の人々が提案されたプロジェクトを受け入れる体制すら存在しない。そこで地域外からの提案を受け入れる窓口となったり、運営体制を立ち上げるための事務を担ったりするコーディネーターが必要である。「居場所ハウス」のプロジェクトでは社会福祉法人 T がこの役割を担った。しかし、社会福祉法人 T が事務局を勤めていたオープニングセレモニーまでの段階から、末崎町の人々が中心となって「居場所ハウス」を運営する段階へと移行するには時間がかかった。

バート（2006）によれば、どのような人間関係が価値をもたらすかに関しては、2つの考え方があるという。「相互に強く結合した要素間のネットワーク」が価値をもたらすという「ネットワーク閉鎖性論」と、「分離している部分間を唯一自分だけが仲介（broker）し、結合できるようなネットワーク」が価値をもたらすという「構造的隙間論」の2つである。「居場所ハウス」のプロジェクトにおいては、これら2種類のネットワークが要請された。

プロジェクトが末崎町で行われるようになったのは、Ibashi 代表の EK さんが、知人の社会福祉法



(図 5-5) オープンまでの人・組織のつながり

人 T の YU さんに声をかけたこと、そして、社会福祉法人 T の紹介で当時の末崎地区公民館長の HK さんと出会ったことが大きなきっかけであり、この 3 人が NPO 法人の設立時の理事となった。ここでは YU さんが HK さんとの、HK さんが末崎町の人々との仲介者となっており、構造的隙間の仲介により「居場所ハウス」は生まれたと言える（図 5-5）。バートが指摘する通り「構造的隙間を仲介することは新たな付加価値をもたらす」のである。こうして生まれた「居場所ハウス」は末崎町という限定された地域に住む人々が中心となって運営されることが期待された。しかし、「居場所ハウス」のプロジェクトの経緯を振り返れば、構造的隙間の仲介は個人と個人の関係であるため時間がかからなかったのに対して、「居場所ハウス」を末崎町の中に位置づけるためには、オープン後に場所を作りあげるといふプロセスを経る必要があった。つまり、ネットワークの閉鎖性が価値を生み出すには時間がかかるということである。2 種類のネットワークが新たな価値をもたらすまでには時間差があることが、運営体制の移行に時間がかかったことに現れていると考えることができる^{*5-8)}。

後者の地域の人々がプロジェクトにどう関わりをもっていくかという側面については、特定の個人や組織ではなく、地域の人々を対象とするワークショップの難しさをあげることができる。多くの人がワークショップに参加できるように配慮することは必要だが、地域の全ての人々がワークショップに参加するわけではない。実際、本章でみたように「居場所ハウス」の現在の運営メンバーのほとんどは、当初のワークショップから参加していなかった。何回目かのワークショップから関わり始めた人、オープンしてから関わり始めた人にとっては、自分たちの知らないところで計画が進められ、建物が完成したということになる。オープン後の活動の広がりという意味で、ワークショップに参加していない人が関わりをもつことは歓迎すべきことであるが、ワークショップには地域の一部の人しか参加しない点は、地域を対象とするワークショップの難しさである。このような難しさがあるとしても、ワークショップは地域の人々がオープンまでのプロセスに参加するための重要な機会の 1 つであり、地域の全ての人々が参加しないとしてもワークショップで出された意見を取り入れながらオープンを目指すしかない。誰かが中心となって、ある程度のことを決めていかないとプロジェクトが進まないのは事実である。

何度かのワークショップが重ねられた後、末崎町の人々同士で十分な議論ができないまま、具体的な運営のあり方が決まらない状態で「居場所ハウス」の運営はスタートした。末崎町の人々はここから「居場所ハウス」を作りあげてきたと言えるが、結果的にみれば、こうしたプロセスがあったことは重要だったと筆者は考えている。オープン時点では具体的な運営のあり方が決まっていなかった状態は、末崎町の人々が自分たちの場所として作りあげていくための余地になったからである。この点については、第 6～7 章で、オープン後に「居場所ハウス」がどのように変化していったかをみていくこととする。

地域外からの働きかけでスタートするプロジェクトには多くの難しさがある。けれども地域外からの働きかけがなければ、「居場所ハウス」が生まれなかったのは事実である。ここで必要になるのが、プロジェクトの進め方についての認識を変更することである。場所をオープンさせることが最終目的ではないことを共有しておくことが求められ、そのためには最初に理念を共有し、ワークショップで出された意見をふまえて建物を完成させ、完成した建物を地域の人々が利用するというように一方的なプロセスに縛られる必要はないのである。

理念の共有については、2012 年 5 月 14 日（月）に開催されたプロジェクトの最初のワークショップでは、従来の高齢者施設とプロジェクトで作る場所は何が違うのかについてイメージを出し合ったり、Ibasho が提唱する 8 理念（図 2-1）を共有したりすることが行われた。しかし、このワークショッ

プに参加した現在の「居場所ハウス」の運営メンバーはほとんどいなかった。そこで、Ibashi の EK さんの訪問にあわせて、2015 年 10 月 21 日（水）に理念を振り返り、今後の運営を考えるためのワークショップを開催し、コアメンバー、パート、「おたすけ隊」のメンバーら 18 人が参加した。

第6章 「居場所ハウス」で行われる行事・活動

「居場所ハウス」はオープン以来、カフェスペースの運営を基本としているが、運営メンバーの試行錯誤を通して、カフェスペースの枠にはおさまりきらないような様々な行事・活動が行われるようになってきている。本章では「居場所ハウス」でどのような行事・活動が行われてきたのか、それは2年半の運営を通してどのように変化してきたのかをみることにする。

6-1. 「居場所ハウス」の行事・活動

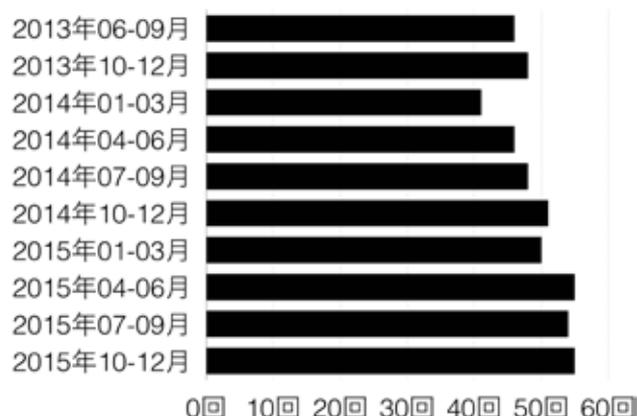
2013年6月13日(木)のオープンから2015年12月末までの期間を3ヶ月ごとに区分すると^{*6-1)}、3ヶ月間で40～50回の行事・活動が行われていることになる(図6-1)。1～2時間程度の会議や教室、丸1日使った大きな行事など種類は色々だが、ほぼ2日に1回の割合で何らかの行事・活動が行われていることになる。

行事・活動には「居場所ハウス」が主催するものと^{*6-2)}、他の団体が主催するものがある。「居場所ハウス」が主催するものには周年記念感謝祭、鯉のぼり祭り、納涼盆踊りなどの大きな行事、毎月の朝市、運営のための定例会、囲碁教室、健康体操、農園体験・農園ボランティアなどがある。他の団体が主催して行事・活動を行う場合は、優先的にスペースを確保するという意味合いで事前に申し込み、会場使用料を支払ってもらうようにしている(表6-1)。会場使用料をとることは2013年6月29日(土)に開催された第1回目の定例会で決定された。その後、2013年12月に金額が改定され現在に至っている。なお、東日本大震災の被災地支援を目的とする行事・活動については、会場使用料は免除している^{*6-3)}。

オープンから2015年12月末までに行われた行事・活動は、内容により大きく11種類に分類できる(表6-2, 写真6-1～8)。それぞれの開催回数を見ると、最も多く開催されているのは「①健康クラブ」であり、次いで「②教室」、「③会議」の順に多くなっている。

6-2. 転機となった行事・活動

「居場所ハウス」では多様な行事・活動が行われてきたが、2年半の運営を通していくつか転機となっ



※グラフでは最初の時期のみ2013年6月13日～9月30日までの約3.5ヶ月となっている。

(図6-1) 行事・活動の開催数の推移

(表6-1) 「居場所ハウス」の会場使用料の規定

会場使用料	2時間まで	500円
	2時間～4時間	1,000円
冬季の暖房料 (11月～3月頃)	4時間～	1,500円
	4時間まで	+300円
ガス・器具・備品などを使用する場合	4時間～	+500円
		+300円

※会場使用料は2013年6月29日(土)に開催された第1回目の運営会議で決定された。その後、2013年12月に金額が改定され、現在に至っている。表は改訂後の金額である。

(表 6-2) 行事・活動の種類と開催数 (オープンから 2015 年 12 月末までの開催数)

種類	開催数	説明
① 健康クラブ	112	毎週、水曜日の午前中に行なわれている「居場所健康クラブ」(主催はサポートセンター・おたすけ)。「居場所ハウス」のオープン当初は、末崎町住宅介護支援センターが主催する「いきいき健康教室」として行われていた
② 教室	94	毎月開かれている草月流生花教室に加えて、囲碁教室、竹とんぼ作りなど末崎町や近隣にお住まいの人を講師とする教室、磯花寿司、陶芸教室、和服リメイクなど末崎町以外から来てくださった方が講師となる教室
③ 会議	87	毎月欠かさず行われている「居場所ハウス」の定例会をはじめ、同級会の打合せ、民生委員、西ロータリークラブなどの団体の会議
④ 体操・セラピー	37	健康体操、ヨガ・セラピー、コミュニティダンスなど
⑤ 懇親会・食事会	34	地域の人たちの食事会、同級会や、「居場所ハウス」主催のイベントが行なわれた後の慰労会など
⑥ 交流イベント	27	NPO 法人・居場所創造プロジェクトが主催する感謝祭、盆踊り、ひな祭り、「デジタル公民館まっさき」による居場所キッズデー、被災者の支援として行われた交流イベントなど
⑦ サークル・同好会	23	歌声喫茶、カラオケ同好会、大正琴の会の練習など
⑧ 朝市	16	2014 年 10 月 25 日からスタートした「居場所ハウス」の朝市
⑨ 音楽	15	国内外のミュージシャンによるコンサートやライブなど
⑩ 講演会・ワークショップ	10	「居場所ハウス」がオープンした日に開催したシンポジウム、「居場所ハウス」の今後の運営を考えるためのワークショップ、健康講演会など
⑪ その他	39	2013 年 11 月から毎月行われている「おはなしころりん」による移動こども図書館、農園(居場所ファーム)で行われている農園体験・農園ボランティア、大きなイベントの準備など



(写真 6-1) 居場所健康クラブ



(写真 6-2) 磯花寿司講習会



(写真 6-3) 陶芸教室



(写真 6-4) ヨーガ・セラピー

た行事・活動がある。

■居場所感謝祭

オープンから約半年が経過した2013年11月24日（日）に、後に理事・館長となるGSさんの提案により「居場所感謝祭」を開催した（写真6-9～10）。初めて屋外も利用した大きな行事である。「居場所感謝祭」は半年間運営を継続できたことを感謝し、郷土食をはじめとする各種食品の提供、各コーナーの出店、カラオケ、ゲームなどを実施することで、子どもから大人までが楽しむとともに、「居場所ハウス」の地域への一層浸透を図ることを目的に開催したものである^{*6-4}。

「居場所感謝祭」では、ひつつみ汁、あけがらす、がんづき、ゆべし、鎌もちなどの郷土食、焼きとり、焼きそば、三色だんご、おにぎりなどを販売した。花苗、衣料品などのフリーマーケットのコーナー、子どもに楽しんでもらうためにダーツ、フラフープのコーナーももうけた。「居場所感謝祭」には運営メンバーを含め約40人が協力し、運営メンバーや協力者も含めて約200人の参加があった。

「居場所感謝祭」は、前章で述べた現在の運営体制が確立されつつある時期に開催された行事であり、運営メンバーが大きな行事を成功させた経験を共有するきっかけとなったと言える。また、「居場所感謝祭」で提供した焼きとりは、翌年の鯉のぼり祭り、一周年記念感謝祭、納涼盆踊りと、2014年10月25日（土）からスタートする朝市でも販売されるなど、定番メニューとして定着することになる。



（写真 6-5）クリスマスケーキ作り



（写真 6-6）音楽演奏会



（写真 6-7）健康講演会



（写真 6-8）移動子ども図書館

■ひな祭り・鯉のぼり祭り・東北トリップ

2014年2月上旬、運営メンバーのTMさんが、地域の子どもを対象とするひな祭りの開催を提案した。紙芝居、ひな人形の前での写真撮影、カラオケを行い、ひな祭りにちなんだ軽食を食べるという提案であった。この提案を受け、運営メンバーでの話し合いを経て、3月1日（土）にひな祭りを開催し、約20人の子どもが参加した（写真6-11～12）。

ひな祭り前後の期間には、地域に伝わる土製の人形を展示した。高田人形^{*6-5}と呼ばれる、今では



(写真 6-9) 居場所感謝祭



(写真 6-10) 居場所感謝祭



(写真 6-11) ひな祭り



(写真 6-12) ひな祭り



(写真 6-13) 高田人形を持参する女性



(写真 6-14) 高田人形の展示

貴重な人形である。TMさんが文化の継承のため「昔からおうちに伝わるなつかしのひな人形（土人形・布人形のようなものとか）を持っての方に貸してもらい展示」したいとメモに書いたところ、メモを読んだ運営メンバーの女性が「うちに70年前の泥人形あるよ」と言って持って来てくださったのである。「うちはお金持ちじゃなかったから、毎年、陸前高田の今泉の「まちの日」で、1つずつ買ってもらった」ものだとのこと。この人形を展示していたところ、それを見た来訪者の女性も「家のどこかにしまっている」と高田人形を持って来てくださった（写真6-13）。喧嘩をしないようにと、祖母が毎年、姉妹それぞれに1つずつ買ってくれたとのこと、人形の裏には姉妹の名前が書かれていた。今回、何十年かぶりに出したようで、来訪者の女性は「おひなさんも、みんなに見てもらって幸せだなあ」と喜んでいった。ひな祭りでは1人の運営メンバーの提案から話が広がり、思いがけず貴重な高田人形を展示することができたのである（写真6-14）。

2014年5月3日（土）に実施した鯉のぼり祭りは、「居場所感謝祭」の次に開催した大きな行事である（写真6-15～16）。「居場所感謝祭」で販売した焼きとり、焼きそば、ひつつみ汁、三色だんごに加えて、かき氷、カレーライスも販売した。ワカメや野菜、小物などのフリーマーケットも行った。ホタテ貝の貝殻投げ、ホヤ釣り、ミニ鯉のぼり作り、ペットボトルを使った剣玉作り、ダーツ、カラオケなど子どもが楽しめるコーナーももうけた。鯉のぼり祭りにも運営メンバーを含め約30人の協力があり、運営メンバー、協力者を含めて約200人の来訪があった。鯉のぼり祭りに向けて、運営メンバーのTKさんが4月上旬から鯉のぼりをあげ始めた。鯉のぼりは、子どもが大きくなり使わなくなったと



(写真 6-15) 鯉のぼり祭り



(写真 6-16) 鯉のぼり祭り



(写真 6-17) 東北トリップ



(写真 6-18) 東北トリップ

いう末崎町の人から寄贈を受けたものである。

ひな祭り、鯉のぼり祭りは運営メンバーが企画し、話し合いを通して実施したもののだが、高田人形を借りたり、鯉のぼりの寄贈を受けたりと、運営メンバーだけでなく末崎町の人々の協力もあり実現できたのである。

2014年3月28日（金）にはKUMONが主催する「第3回東北トリップ」の受け入れを行った（写真6-17～18）。「東北トリップ」は「現実や現場を直接体験して、視野や行動の幅をひろげること」、「現地の方のお話や交流を通して学ぶ」、「学んだことを英語で多くの人に伝えること」、「これから私たちにできることを考える」の4つを目的とするもので^{*6-6}、「第3回東北トリップ」には英語でのコミュニケーションを学ぶEIC（イングリッシュ・イメージジョン・キャンプ）のメンバーである全国の小・中学生ら13人と、世界各国から集まった学生キャンプリーダー9人、スタッフ4人が参加した。末崎町からもKUMON教室に通う小学生ら13人が参加した。「居場所ハウス」では料理を通じた国際交流をテーマとする行事を開催し、「居場所ハウス」の運営メンバーは郷土食のひつつみ汁、鍋焼きと、おにぎりを作り参加者を迎えた。子どもたちはベトナムの生春巻き、フィリピンのシニガンを作り、運営メンバーとともに昼食をともにした。料理をした経験がほとんどない子どももいたため、「居場所ハウス」の運営メンバーが調理器具の使い方を教えたり、一緒に調理をしたりするという光景もみられた。また、子どもたちが末崎町の高齢者に昔の暮らしや震災の話聞く光景もみられた。

2014年3月から5月にかけてひな祭り、東北トリップ、鯉のぼり祭りを行ったが、これらはいずれも子どもを対象とする行事である。「居場所ハウス」は年齢に関わらず誰もが過ごせる場所になることを目指してきたが、それまで子どもを対象とする行事・活動はほとんど行われていなかった。これらの行事は、高齢の世代を中心とする運営メンバーが、自分たちで楽しむのではなく、若い世代に対して何ができるかを議論することを通して実現されたという意味で重要な行事である。こうした行事を成功させた経験を共有できたことも、現在の「居場所ハウス」の運営体制を築くことにつながったと言える。

■平成26年度NPO法人総会

NPO法人は年に1回の総会を開催することが義務づけられている。2014年5月23日（金）に開催されたNPO法人・居場所創造プロジェクトの総会では、「居場所ハウス」の今後の方向性を決める重要な点が議題とされた（写真6-19）。議題となったのは以下の3点である。

①「居場所ハウス」を継続して運営していくため（補助金に頼らない運営のため）、食事の提供や地場製品の販売など、運営の核となる活動を確立すること

②末崎町内で「居場所ハウス」が十分に認識されていないため、若い世代を含むより多くの方々に来訪してもらえるようにすること

③末崎町の住民での運営を継続するため、運営体制を確立すること

3点目の運営体制に関しては、既に述べたように末崎町の6人が新たに理事に就任した（表2-5）。

1点目の食事の提供や地場製品の販売については、2014年10月25日（土）からスタートする朝市と、2015年5月8日（金）からスタートする屋外のキッチンペースを活用した食堂の運営へとつながっていくことになる。朝市、食堂の運営については次節でみることにする。

■大船渡市外への見学

2014年10月17日（金）には、運営の参考とするため大槌町、釜石市の「手作り工房おおつち」、「ぐるっとおおつちショップ」、「みんなの家・かだつて」の見学を行った。見学には運営メンバーら14人

が参加し、運営の方法、販売されている商品、商品の陳列の仕方などを見学した（写真 6-20）。2015 年 9 月 16 日（水）には、主に調理を担当する運営メンバー 7 人が、メニューを検討するため花巻市で開かれた食品展示会を見学した。これら 2 つの見学会は、運営メンバーが今後の運営の参考にするため、大船渡市を出て見学に出かけたものである。

■生花教室・歌声喫茶

草月流生花教室は、「居場所ハウス」のオープンからほぼ 1 年が経過した 2014 年 6 月 3 日（火）からスタートした。当初、「居場所ハウス」が主催していたが、11 回目となる 2014 年 12 月 23 日（火）からは参加者が主催する活動として行われるようになった。「居場所ハウス」が主催している間は、会場使用料を免除された活動だったが、参加者同士が自分たちで講師の方への謝礼、「居場所ハウス」の会場使用料を払ってでも継続したいという話し合いを行い、参加者自身が主催する活動として継続されることになった。草月流生花教室は現在でも、月に 1～2 回ずつ継続して開催されている（写真 6-21）。

歌声喫茶はより多くの人に来てもらえる機会を作ろうと運営メンバーの MT さんが提案したものである。2015 年 1 月 30 日（金）、MT さんが呼びかけた何人かが集まって話し合いを行い、2015 年 2 月 17 日（火）から参加者が主催する活動としてスタートした。歌声喫茶は、毎月 1 回ずつ継続して開催されている（写真 6-22）。



（写真 6-19）平成 26 年度 NPO 法人総会



（写真 6-20）「手作り工房おおつち」見学



（写真 6-21）草月流生花教室



（写真 6-22）歌声喫茶

草月流生花教室、歌声喫茶は立上げの経緯は異なるが、地域の人々が、自分たちが行いたい活動を主催しているという点で共通している。「居場所ハウス」では大正琴の練習会、食事会など末崎町の住民が主催して行われた活動はあったが、現在まで継続されているのはこの2つのみである。現在、「居場所ハウス」が主催する活動として囲碁教室などが行われているが、いずれは参加者が主催する活動にしていきたいという話がなされている。

6-3. 農園・朝市・食堂の運営

「居場所ハウス」の運営のあり方を大きく変えたのが農園での野菜作り、朝市、食堂の運営である。ここでは、これらがどのような経緯で始まったのかを中心にみていくこととする（表6-3）。

■農園・朝市

既に述べた通り「居場所ハウス」は末崎町の中央地区の中でも末崎地区公民館「ふるさとセンター」、末崎保育園、末崎小学校、末崎中学校、大船渡市農協末崎支店、末崎地区サポートセンターなどの施設が集まる位置にあり、現在、周囲では災害公営住宅と防災集団移転による戸建て住宅、合わせて約100戸の建設が進められている（図2-12）。けれども周囲には店舗や飲食店がほとんどない。こうした地域の状況の改善と、オープンしてから補助金を受け運営している「居場所ハウス」の財政的な基盤を確立するために行われるようになったのが朝市である。元々、朝市はオープンまでに開かれたワークショップにおいて「ふれあい産直市場」として提案されていた（表5-9）。その後、実現に向けた具体的な動きがなされることはなかったが、2014年5月23日（金）に開催されたNPO法人の総会で地場産品の販売として改めて提案されたのである。

末崎町はワカメ養殖発祥の地であり、ワカメをはじめとする豊かな海の幸がある。農業をしている人、料理や郷土食を作るのが得意な人、手芸が得意な人もいる。これらを扱う市を定期的で開催することで地域に特産品を定着させ、地域内でお金がまわる仕組みを作りたい。こうした考えに基づき2014年10月25日（土）から朝市をスタートさせた（写真6-23）。2014年12月までは月に2回、2015年1月からは月に1回開催し、2015年12月19日で16回目の朝市となった。まだ当初の考えを達成するには至っていないが、毎回、高齢者を中心とする人々がやって来て、買い物をしたり会話を楽しんだりしながら時間を過ごす光景が見られる（写真6-24）。朝市には末崎町の内外から、農業や漁業などを営む人、店舗、業者の出品があり、加えて「居場所ハウス」からも軽食や野菜を出品している（表6-4）。



(写真 6-23) 第1回目の朝市



(写真 6-24) 朝市には多くの人々がやって来る

(表 6-3) 農園・朝市・食堂に関する出来事

年	月	日	曜日	出来事	農園	朝市	食堂
2014	1	20	月	SNS サイトにキッチンカーについての記事を投稿したところ、大船渡町にキッチンカーがあるという情報が寄せられる			●
	3	11	火	運営メンバー 4 人で大船渡町のキッチンカーを見に行く			●
	3	14	金	運営メンバー 5 人で、キッチンカーを保有している大船渡町の飲食店を訪問			●
	3	未		「居場所ハウス」の浄化槽を改修し、食事の提供を行うことの可能性について意見交換			●
	5	14	水	キッチンカーで食事を提供する場合、NPO 法人の定款変更の必要があるか否かを合同庁舎に確認に行き、変更が必要だという返答ある			●
	5	15	木	運営メンバー 4 人で大船渡町のキッチンカーを見に行き、内部の設備を確認			●
	5	23	金	NPO 法人・居場所創造プロジェクトの平成 26 年度総会で、食事の提供や地場産品の販売など運営の核になる活動を行うことを確認		●	●
	6	7	土	大船渡町の飲食店よりキッチンカーを借りる			●
	6	上旬		敷地内の北側斜面で畑作りを始める	●		
	6	中旬		キッチンカーのために水道管工事を行う			●
	7	13	日	「一周年記念感謝祭」でキッチンカーを活用して軽食を提供			●
	8	24	日	末崎町平林地区の休耕地を活用した居場所農園での作業を始める	●		
	8	26	火	この日に開催された定例会で、10 月から朝市を開催すること、朝市でキッチンカーを利用して軽食を提供することが議題となる		●	●
	9	12	金	運営メンバー 4 人らで、末崎町門之浜地区の K さん夫妻の家にカマドを見に行く			●
	9	22	月	末崎町門之浜地区の K さん夫妻より寄贈されたカマドを移設			●
	10	4	土	「北上ボランティアサークル・つばさ」との交流会に合わせて、朝市プレオープン。居場所農園から収穫した野菜を販売。カマドでご飯を炊く初めての行事も開催	●	●	●
	10	5	日	健康講演会に合わせて、朝市プレオープン。居場所農園から収穫した野菜を販売	●	●	
	10	25	土	朝市開催（第 1 回）		●	
	11	1	土	朝市開催（第 2 回）		●	
	11	10	木	保健所から、キッチンカーで食事を常時提供するための「飲食店営業（軽飲食）」の営業許可が降りる			●
11	15	土	朝市開催（第 3 回）		●		
12	6	土	朝市開催（第 4 回）。この日の朝市から、キッチンカーを利用して焼き鳥を販売		●	●	
12	20	土	朝市開催（第 5 回）。キッチンカーを利用して焼き鳥、甘酒を販売		●	●	



(写真 6-25) 敷地内の北側斜面の畑



(写真 6-26) 居場所農園

(表 6-3) 農園・朝市・食堂に関する出来事 (続き)

年	月	日	曜日	出来事	農園	朝市	食堂
2015	1	17	土	朝市開催 (第 6 回)。キッチンカーを利用して焼き鳥、甘酒を販売		●	●
	1	未		キッチンカーの設備では、常時食事を提供するのが難しいという話になる。そこで、屋外にカマドの保管も兼ねたキッチンスペースの建設を始める			●
	2	13	金	キッチンカーを返却			●
	2	21	土	朝市開催 (第 7 回)		●	
	3	21	土	朝市開催 (第 8 回)		●	
	4	18	土	朝市開催 (第 9 回)		●	
	4	30	木	保健所から、屋外に増築したキッチンスペースで食事を提供するための「飲食店営業 (軽飲食)」の営業許可が降りる			●
	5	3	日	「鯉のぼり祭り」を開催。キッチンスペースを活用して昼食を提供			●
	5	8	金	農園体験・農園ボランティアの日を開催。6人が農作業に参加	●		
	5	8	金	屋外のキッチンスペースを活用して、毎日の食堂運営を始める			●
	5	11	月	運営メンバー 11人で昼食の提供について意見交換する			●
	5	16	土	朝市開催 (第 10 回)		●	
	5	19	火	運営メンバー 8人で新メニュー候補の冷やしうどん、カレーライスを試食する			●
	5	21	木	農園体験・農園ボランティアの日を開催。8人が農作業に参加	●		
	6	20	土	農園体験・農園ボランティアの日を開催。6人が農作業に参加	●		
	6	未		昼食メニューに冷やしうどん、カレーライスを追加			●
	7	11	土	農園体験・農園ボランティアの日を開催。10人が農作業に参加	●		
	7	18	土	朝市開催 (第 11 回)		●	
	8	8	土	朝市開催 (第 12 回)		●	
	8	22	土	農園体験・農園ボランティアの日を開催	●		
	9	8	火	運営メンバー 10人で新メニュー候補の試食会を行う			●
	9	14	月	昼食メニューにチャーハン、エビピラフ、中華飯、焼き鳥丼を追加			●
	9	16	水	運営メンバー 7人が花巻市で開催された食品展示会の見学に行く			●
	9	18	金	運営メンバーで新メニューのカレーうどんの試食会を行う			●
	9	19	土	朝市開催 (第 13 回)		●	
	9	未		昼食メニューにカレーうどんを追加			●
10	10	土	農園体験・農園ボランティアの日を開催。7人が農作業に参加	●			
10	17	土	朝市開催 (第 14 回)		●		
10	19	月	昼食メニューに親子丼を追加			●	
11	14	土	居場所農園の収穫祭・感謝祭を開催	●			
11	21	土	朝市開催 (第 15 回)		●		
11	22	日	「居場所ハウス」の表で居場所農園から収穫した野菜の販売を始める	●			
11	28	土	「居場所ハウス」の表に長テーブルを出して居場所農園から収穫した野菜等の販売を始める	●			
12	19	土	朝市開催 (第 16 回目)		●		



(写真 6-27) 収穫した野菜を販売するための準備



(写真 6-28) 表で野菜を販売

(表 6-4) 朝市の出店者

2014年11月1日の朝市（第2回朝市）	
出店者の地域	主な商品
居場所ハウス	春菊、小松菜、キャベツ、白菜
	米
大船渡市末崎町	魚、野菜
	玉ねぎ
	花苗
	いかすみせんべい
大船渡市立根町	帽子
大船渡市日頃市町	ふかし、シフォンケーキ、かまもち
	がんづき、まんじゅう、にんにくみそ
	小麦まんじゅう、くさもち
石巻市	きもの
陸前高田市	りんご、ジュース
大東町	餅米
	大根

2015年4月18日の朝市（第9回朝市）	
出店者の地域	主な商品
居場所ハウス	ほうれん草、山東菜、つぼみ菜、漬物、焼き鳥、団子
	漬物、ふのり、ブローチ
大船渡市末崎町	花苗
	花苗
	米、餅米
	ネギ苗
	切り花
	かに、魚
大船渡市日頃市町	かかもち、ふかし、シフォンケーキ
	まんじゅう
	スイートポテト、まんじゅう、しそ
	巻き、にんにくみそ
大槌町	大判焼き
花巻市	きもの
	陶器、豆腐
奥州市	衣類
陸前高田市	野菜
釜石市	鮮魚

「居場所ハウス」のある大船渡市末崎町の平地区の様子。写真にも写っているように、付近では、今、高台への移転先として市営住宅・県営住宅の建設が進められています。移転により、数年後には付近の人口は増えますが、この付近には食事ができる場所がありません。

住宅と道路だけが建設されても、暮らしを支える店舗などが伴わないと、地域は十分に生活の場にはなりません。

「地域の人々が集まる場所で、昼食も食べれたら」。このような要望はありますが、「居場所ハウス」では設備的なこともあり食事を提供することができません。地元で求められている食事の場をどうやったら実現できるかと考えた時、何人かからキッチンカーを使ってはどうかという意見が出されています。

キッチンカーというのはいいアイデアかも知れません。

どこで(できれば安く)購入・レンタルできるか等々、キッチンカーに関する情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、情報をお寄せいただけましたら幸いです。

(表 6-5) 昼食メニュー

メニュー	2015年				
	5月 8日～	6月 末～	9月 中旬～	9月 末～	10月 19日～
うどん	○	○	○	○	○
そば	○	○	○	○	○
もりそば	○	○			
冷やしうどん		○			
カレーうどん				○	○
おにぎり			○	○	○
カレーライス		日曜 のみ	○	○	○
エビピラフセット			○	○	○
チャーハンセット			○	○	○
中華飯セット			○	○	○
焼き鳥丼セット			火曜	火曜	火曜
親子丼セット					月曜
週替りランチ	土曜	土曜	土曜	土曜	土曜

(図 6-2) キッチンカーの情報を求める SNS サイトの投稿

2014年の春頃から運営メンバーのTKさんが「居場所ハウス」敷地内北側斜面などを利用して、小さな畑を作り、収穫した野菜はスタッフらの昼食の食材としていた（写真6-25）。2014年8月末から、運営メンバーの紹介で末崎町平地区内の休耕地を借りて「居場所農園」とし、野菜作りを始めた（写真6-26）。収穫した野菜は朝市で販売したり（写真6-27）、食堂の食材としたりしている。そして、2015年11月21日（土）の朝市の後は、「居場所ハウス」の表で収穫した野菜などを常時販売するようになった（写真6-28）。

■食堂の運営

2014年5月23日（金）のNPO法人の総会において、地場産品の販売とともに実施することが確認されたのが、食堂の運営である。

「居場所ハウス」の建物内にもキッチンがあるが、末崎町のみで運営する場所にするためには、誰でもキッチンに立てるようにした方がよいと考えられ、キッチンが入口に対して垂直に配置されている（図2-16）。営業のためにはキッチンの出入口を仕切る必要があり、この点で建物内のキッチンは営業のために利用できない（写真6-29）。また、浄化槽やシンク、手洗い場なども営業用の設備にはなっていないかった。

こうした状況であったため、NPO法人の総会で食事を提供することが議論された際には、キッチンカーを活用することが考えられていた。運営メンバーの間ではキッチンカーを活用できないかという意



（写真 6-29）居場所ハウス内のキッチン



（写真 6-30）キッチンカーを活用して軽食を販売



（写真 6-31）キッチンスペースの建設工事



（写真 6-32）キッチンスペースの建設工事

見が総会の数ヶ月前から出されていた。2014年1月20日（月）にSNSサイトにキッチンカーの情報を求める記事を投稿したところ（図6-2）、大船渡町の飲食店にキッチンカーがあるという情報が寄せられた。運営メンバーで大船渡町の飲食店を訪れ、2014年5月23日（金）の総会時にはキッチンカーを借りることができる目処が立っていたのである。

総会の後、キッチンカーを借り、保健所から営業許可を取得し、朝市などのイベントで焼き鳥などを販売するようになった（写真6-30）。予定ではキッチンカーで毎日食堂を運営する予定だったが、実際にキッチンカーを使ってみると、設備などの関係で毎日食堂を運営していくのは難しいという話が出てくるようになった。そこで計画を変更し、2015年1月末から屋外にキッチンスペースの建設を始めることとした。かつて建築関係の仕事をしていた運営メンバーのTKさんが中心となって建設を進め、2015年5月からキッチンスペースを使って食堂を運営するようになった（写真6-31～32）。

ただし、屋外にキッチンスペースを建設することは、別の話が膨らんだものである。「居場所ハウス」ではオープン当初から、災害時にも調理できるようにカマドを設置したいという話が出されていた。この話はオープンから1年以上経過してから実現することとなる。「居場所ハウス」の運営メンバーでもあるKさん夫妻の家に使われなくなったカマドがあるという情報が寄せられたのである。運営メンバーがKさん夫妻宅を訪問し、カマドは何十年も使われておらず一部破損しているが、補修すれば使えることを確認した。そして、2014年9月22日（月）にカマドを移設した（写真6-33～34）。移設したカマドを雨ざらしにはできないため、当初はカマドを収納する小屋を建設する予定だった。しかし、キッ



（写真 6-33） Kさん夫妻宅のカマド



（写真 6-34） 移設し修復したカマド



（写真 6-35） 完成したキッチンスペース



（写真 6-36） 運営メンバーによるメニューの検討

チンカーでは毎日食堂を運営するのは難しいという話が出されるようになったため、TKさんがキッチンスペースとしても使えるような大きな小屋を作るのはどうかと提案し、自らが図面を描いたのである。このようにいくつかの計画の変更が重なり、屋外のキッチンスペースが生まれた(写真6-35)^{*6-7)}。

以上のような経緯で食堂の運営をスタートすることになったが、運営メンバーで試食をしてメニューを決めたり(表6-5)、食材の調達、売上金の受け取りなどの方法を決めたりするなど、試行錯誤を続けている(写真6-36)。「居場所ハウス」は通常の食堂ではないため、来訪者はサービスを一方的に受けるだけではないといけないという考えから、来訪者は屋外のキッチンスペースまで自分で食事を注文しに行くことを基本としているただし、状況によりスタッフや居合わせた運営メンバーが注文の受付を行うこともあり、また、スタッフが忙しい時には、運営メンバーや来訪者が食器を洗うなど、その日のスタッフ、運営メンバー、来訪者が協力しながら食堂を運営している。

6-4. 行事・活動の変化

「居場所ハウス」で行われている行事・活動は、時間の経過とともに変化している。内容によって11に分類した行事・活動(表6-2)の開催回数をみると次のような変化があることがわかる(図6-3)。

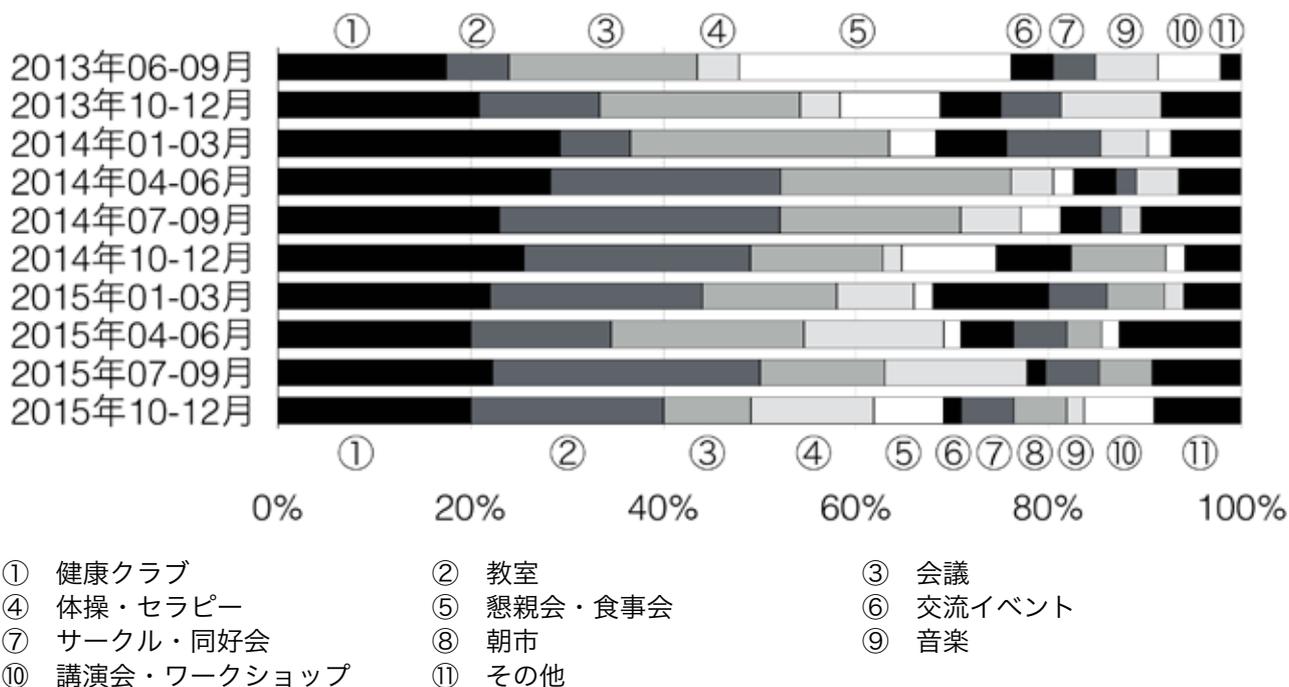
オープン当初から現在まで「①健康クラブ」、「③会議」は一定数、継続して行われている。「居場所健康クラブ」は毎週、「居場所ハウス」の定例会は毎月開かれている。

2014年になって回数が増えた活動は「②教室」、「⑧朝市」である。「②教室」は草月流生花教室が現在でも定期的に行なわれていることに加えて、「居場所ハウス」主催のそば打ち、磯花寿司、パン作り、囲碁などの教室が開催されている。「⑧朝市」は2014年10月25日(土)からスタートし月に1~2回継続して開催されている。2015年になってからは「④体操・セラピー」の回数が増えている。「④体操・セラピー」としては「居場所ハウス」が主催する健康体操と、他の団体が主催するヨガ・セラピーが現在、継続して開催されている。

オープン当初に比べて回数が減った活動は「⑤懇親会・食事会」、「⑨音楽」である。「⑨音楽」については、オープン当初は被災地支援としての演奏会やライブが何回も行われていたが、東日本大震災から時間が経過したこともあり、そのような機会が減ってきたことが、「⑨音楽」が減少している要因だと考えることができる。「⑤懇親会・食事会」はオープン当初は多数行われていたが、最近あまり行われなくなっている。オープン当初、定例会は夕方開催されることもあり、その時は定例会後に懇親会を行っていた。しかし、現在定例会は午後で開催されるようになったため、定例会後の懇親会が行われなくなったことが「⑤懇親会・食事会」が減少している1つの要因である。また、オープン当初は「おたすけクラブ」メンバーによる食事会が何度か開催されたが、現在は「おたすけ隊」メンバーが毎週土曜にボランティアをしながら一緒に昼食を食べており、行事・活動ではなく日常の運営の一環として食事会が行われるようになったと見なすことができる。

全体的な傾向として、2014年4~6月には「①健康クラブ」、「②教室」、「③会議」の3つだけで約8割を占めていたが、この期間以降、3つが占める割合は減少傾向にあり、現在は約半分にまで減少している。「居場所ハウス」で多様な活動が行われるようになってきたことが、ここに現れていると言える。

これまでに5回以上開催された行事・活動に注目し、それがいつ頃からスタートしたのかをみることにする(表6-6)、オープン当初から継続されている活動もあれば、草月流生花教室、ヨガ・セラピー、囲碁教室などのように2014年になってから始まったもの、歌声喫茶、農園体験・農園ボランティアのように2015年になってから行われたものもある。また、末崎カラオケ同好会、手話教室のように最近



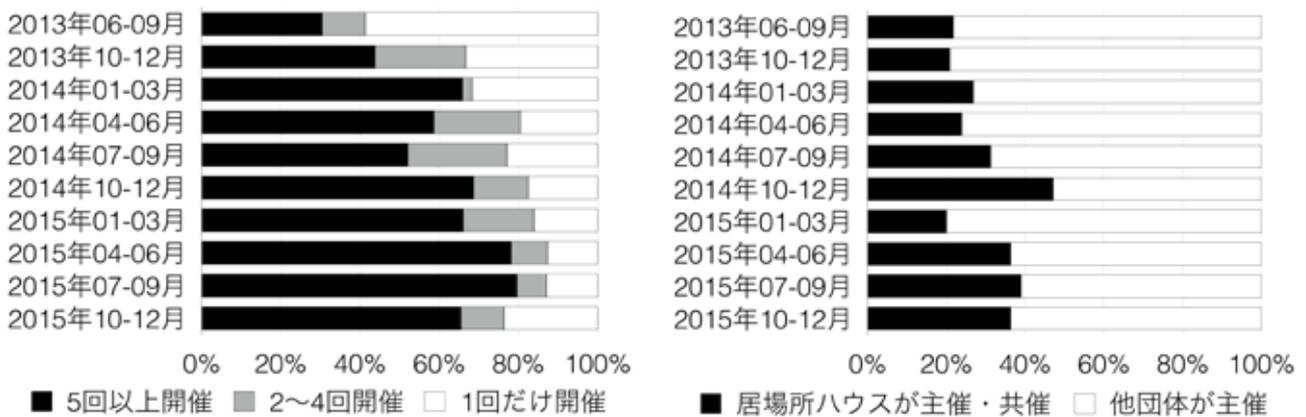
(図 6-3) 種類別にみる行事・活動の開催数の推移

(表 6-6) 継続して開催されている行事・活動

名称	主催	開催回数	2013年		2014年				2015年				備考
			6-9	10-12	1-3	4-6	7-9	10-12	1-3	4-6	7-9	10-12	
居場所健康クラブ	末崎地区サポートセンター	107	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	継続
定例会	居場所創造プロジェクト	33	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	継続
草月流生花教室	居場所創造プロジェクト 2014年12月23日から参加者有志	31				●	●	●	●	●	●	●	継続
移動こども図書館	おはなしころりん	23						●	●	●	●	●	継続
ヨガ・セラピー	日本ヨガ療法協会	19						●	●	●	●	●	継続
居場所ハウス朝市	居場所創造プロジェクト	16						●	●	●	●	●	継続
囲碁教室	居場所創造プロジェクト	12					●	●	●	●	●		継続 予定
歌声喫茶	参加者有志	11						●	●	●	●	●	継続
健康体操	居場所創造プロジェクト	11							●	●	●	●	継続
理事会	居場所創造プロジェクト	8	●	●		●		●		●			継続
末崎中学校 25回生打合せ会	末崎中学校 25回生	6		●			●			●	●		
手話教室	スマイルプロジェクト	6				●	●						
農園体験・農園ボランティア	居場所創造プロジェクト	6								●	●	●	継続
いきいき健康教室	末崎町住宅介護支援センター	5	●										
末崎カラオケ同好会	末崎カラオケ同好会	5		●	●								
うたっこライブ みんなで歌おう	KHさん	5						●	●	●			
キッズデー	デジタル公民館まっさき	5						●	●				継続 予定

※表に示したのは2013年6月13日にオープンから2015年12月31日までの間に5回以上開催されたものである。

※表中の ● は該当する期間に1回以上開催されていることを表す。



(図 6-4) 開催数別にみた行事・活動の開催数の推移 (図 6-5) 主催者別にみた行事・活動の開催数の推移

では行われなくなったものもあり、継続的に行われた行事・活動に入れ替わりがあることがわかる。「居場所ハウス」でこれまでに開催された行事・活動を、5回以上開催されたもの、2～4回開催されたもの、1度だけ開催されたものに分けると、オープン当初は1度だけ開催された行事・活動が半数以上であったが、最近では7～8割が5回以上開催された行事・活動になっている(図6-4)。このことは「居場所ハウス」の活動が定着してきたことの現れだと考えてよい。しかしこのことは、「居場所ハウス」で新たに行われる活動が減ってきたということでもある。

次に、主催者別の行事・活動の開催数をみると、「居場所ハウス」が主催・共催している行事・活動はオープン当初は2割ほどだったが、最近では行事・活動のうち約4割が「居場所ハウス」が主催・共催するものとなっている(図6-5)^{*6-8}。「居場所ハウス」が多様な行事・活動を行うようになったことがここに現れている。

6-5. 運営体制と行事・活動の変化

本章の最後に、行事・活動を運営体制の変化と関連させてみていくこととする。

「居場所ハウス」がオープンした当初、まだ末崎町の人々で運営する体制が整っていなかった時期には、半数以上が1回だけ開催された単発の行事・活動になっているという特徴がある。

現在の運営体制が確立されるオープン半年から1年頃までの期間には「居場所感謝祭」、ひな祭り、東北トリップ、鯉のぼり祭りという大きな行事が行われた。2014年5月23日(金)にはNPO法人の総会が開催され、末崎町の6人が新たに理事に就任すると共に、今後の運営のあり方について食事の提供、地場産品の販売を行うことが確認された。この時期には、1回だけ開催される単発の行事・活動ではなく、継続して開催される行事・活動の割合が増えているという特徴がある。ただし、「居場所ハウス」が主催・共催する行事の割合は大きく増えていないことから、他の団体が主催して継続される行事・活動が増えたと考えることができる。「居場所ハウス」の運営体制が確立していなかった時期、他の団体が行事・活動を開催しようとしても誰が窓口になるのか、誰が行事・活動を許可するのが曖昧であった。しかし、理事・館長のGSさんが窓口となり、行事・活動を許可するという体制が確立したことから、他の団体との継続した関係が築きやすくなったという理由を考えることができる。

この後の時期になると、NPO法人の総会で確認された食堂の運営と、地場産品の販売に向けての動きが進んでいく。地場産品の販売については、2014年10月25日(土)からの朝市として実現する。朝市で野菜を販売するため、2014年8月24日(日)から「居場所農園」での野菜作りをスタートさ

せた。一方、食事の提供については、当初はキッチンカーを借りていたが、キッチンカーでは毎日食堂を運営することが難しいという意見が出された。そこで2015年1月末から屋外にキッチンスペースの建設をスタートし、2015年5月3日(日)の鯉のぼり祭りに合わせて食堂をオープンさせ、5月8日(金)から常時食堂の運営をスタートさせた。「居場所農園」での野菜作り、朝市、食堂の運営は現在(2015年12月末現在)まで継続している。また、オープンから1年が経過してからは「居場所ハウス」が主催・共催する行事・活動が増える傾向にあり、現在は約4割が「居場所ハウス」が主催・共催する行事となっている。このことは運営体制が確立されたことで、「居場所ハウス」も多様な活動を主催するようになったことの現れだと言える。

このようにみえてくると、現在の運営体制が確立される前後では、「居場所ハウス」で行われている行事・活動も変化していることがわかる。

第7章. 徐々に作りあげられていく場所

「居場所ハウス」ではオープン以来、様々な活動が展開されてきた。その中には農園での野菜作り、朝市、食堂の運営のように「居場所ハウス」のあり方を大きく変えることになった活動も含まれる。ここで注目すべきは、「居場所ハウス」の変化は運営内容に関わるソフト面に限らないということである。食堂を運営するために屋外にキッチンスペースを建設したように、空間（ハード）も手が加えられることで徐々に変化しているのである。本章では空間に新たな機能を付け加えたり、機能を変更したり、メンテナンスしたり、植栽・農作業したりする空間に手を加える行為に注目する。そして、空間にどのような手が加えられてきたのかという観点から、オープン後の「居場所ハウス」の変化をみていくこととする。

7-1. 建物内に手を加える行為

「居場所ハウス」の建物内ではオープン直後から様々な行為が行われている（表7-1）。オープン直後から数ヶ月後までは掲示ラックや本棚、棚、ロフトの物置にあがるための梯子を作ったり、テーブルを置いて事務コーナーをもうけたりと、オープン時点で不足していた機能を追加するための行為が行われている（写真7-1～2）。オープンしてから約半年が経過する頃には、和室の本棚前に照明を追加する、和室の板の間に畳マットを敷くなど機能変更やメンテナンスのための行為が見られるようになっている。

「居場所ハウス」は米国ハネウェル社からの基金を受けて建設されたが、オープンまでに基金を使い切るのではなく、運営が始まってから必要な備品を揃えることができるようにと考えられ、基金の一部が運営協力金として確保されていた。実際、運営が始まると必要なものや、手を加えたいものが出てきたため、オープンしてから約半年の間には、運営協力金を使って空間に手を加えたものが多い。運営協力金を使うにあたっては、なるべく既成品を買うのではなく、材料を買い、手作りして欲しいという考えから、本棚、棚、ロフトの物置にあがるための梯子などは材料を購入し、かつて建築関係の仕事にしていた運営メンバーのTKさんが制作した。

2014年に入ってから和室と土間の間にあった柱を撤去したり、勝手口を設置したり、土間部分に浸水処理をしたり、土間部分のコンクリートにワックスを塗ったりと規模が大きな行為が行われるようになった（写真7-3～5）。



(写真 7-1) 掲示ラックの設置



(写真 7-2) ロフトの物置にあがる梯子の制作

第5章で述べた通り、オープンして半年から1年にかけての時期は、「居場所ハウス」の現在の運営体制が確立された時期と見なすことができたが、本棚前に照明を追加したり、和室の板の間に畳マットを敷いたり、柱を撤去したり、勝手口を設置したり、土間部分に浸水処理したり、土間部分のコンクリートにワックスを塗ったりする規模の大きな行為はこの時期に集中していることがわかる。

設計者は、土間と和室とを緩やかに分離するため間に柱をもうけ、和室を屋外の月見台と緩やかにつなぐため和室の一部を板の間にしていた。古民家の雰囲気を残すため和風の照明が採用され、土間は現代的な要素を取り入れるためにコンクリートの打ち放しの床になっていた。しかし、運営を続けているうちに図書スペースが暗い、和室の畳と板敷きの間に段差があると危ない、柱があると使いづらい、出入口が一方にしかないのは不便である、大雨の時に土間部分に水が入ってくる、土間は砂埃が立って衛生的ではないという意見が運営メンバーから出されるようになった。上にあげた行為は、運営メンバー

(表 7-1) 空間をしつらえる行為：建物内

年	月	日	頃	出来事	行為の種類			メンバー中心
					追加	変更更新	植栽野菜	
2013	6	18		「おたすけクラブ」メンバー7人が寄贈された本を整理				○
	9	3		「あなたの居場所 あなたの支えを「居場所」ハウス」、「いつでも立ち寄り いつでも帰ることが出来る「居場所」ハウス」、「時間を自由に過ごすことができる「居場所」ハウス」、「誰でもが利用できる「居場所」ハウス」、「地域の皆さんの協力金で運営されております。居場所ハウス」と書いた小さな幟5本を作り、テーブルの上に置く (GSさん)	●			○
	9	16		本棚の蓋を活用して掲示ラックを作る (YKさん)	●			○
	9	29		立根町のカフェからグランドピアノが寄贈	●			
	10	4	頃	ロフトの物置に上がるための梯子作りを始める (TKさん)	●			○
	10	29		制作した置き台を搬入 (TSさん)。置き台の上に置かれていた畳マットを和室の板の間に敷く	●			
	10	30		和室奥にテーブルを置き事務コーナーとする	●			○
	11	6		O電気に和室の本棚前に照明の追加工事を依頼		●		
	11	8		カウンター席の奥に棚を作り設置する (TKさん)	●			○
	11	8		本棚を作り和室に増設する (TKさん)	●			○
	11	17		和室側の壁に本棚の蓋を活用して掲示ラックを作る (YKさん)	●			○
	12	19		和室の板の間に敷くための畳マットを追加で購入	●			
	12	21		F板金に薪ストーブの煙突工事を依頼。薪ストーブを使い始める	●			
	12	23		S家具から追加で購入した土間のテーブルが納品	●			
2014	1	16		キッチン奥の倉庫に収納棚を設置 (TKさん)	●			○
	2	17		末崎町平地区の大工であるFMさんに依頼し、和室と土間の間にあった柱を撤去		●		
	2	26		キッチン奥に勝手口を設置する工事を始める (TKさん・MFら3人)	●			
	3	5		左官屋に土間のコンクリートに浸水防止のための段差を作る作業を依頼		●		
	3	27		土間部分のコンクリートに埃防止のためのワックスを塗る (TKさん・GSさん・TSさんら4人)		●		○
	6	15	頃	2階の物置に落下防止・目隠しのための板を設置 (TKさん)	●			○
	6	20		カウンター席奥の棚にカーテンレールを設置 (TKさん)		●		○
	6	27		カウンター席奥の棚につけるカーテンを作り持参 (FSさん)		●		○
	7	11		購入した長テーブルが納品	●			
	10	10		グランドピアノを和室奥に移動。「納涼盆踊り」で使った櫓を改造して、建物内の道路側に設置し、置き台とする。和室奥に置かれていた収納箱を建てて、読書スペースと事務スペースの間仕切りとする		●		○
2015	2		末	建物内の照明の電球を一部交換		●		
	8	11		有限会社Iから本棚が届き、和室の図書コーナーと事務コーナーの間に設置	●			

※空間に手を加える行為の種類・時期はフィールドノート、写真、運営日誌をもとにリストアップした。

※表中の「メンバーが中心」とは運営メンバーが中心となって作業したものを表す。

からの意見に対応したものである。ここで重要なのは、運営メンバーは設計者に対して不満を出すのではなく、自分たちで手を加えて空間を使いやすいものにしたことである。繰り返しになるが、現在の運営体制が確立されつつあった時期にはこうした行為が集中して行われている。

この時期の後には、土間に置かれていたグランドピアノを和室に移動したり、本の増加に対応するため本棚を追加したりしているくらいで（写真7-6）、大規模な行為は行われていない。

7-2. 屋外・敷地内に手を加える行為

「居場所ハウス」では敷地に対しても様々な手が加えられている（表7-2）。オープンから約半年後までは道路沿いの看板や掲示板、法面の安全柵、建物正面の看板を設置したり、建物の裏に倉庫を増設したりと、建物内と同様、オープン時点で不足していた機能を追加するための行為が行われている（写真7-7～10）。これらについても、ハネウェル社からの運営協力金をあてており、材料を購入し何人かの運営メンバーが制作した。

2014年3月からは植樹、花壇や畑作りが行われるようになる。2014年5月17～19日にはTKさん、GSさんが寄贈されたモミジとツツジを植樹した（写真7-11）。モミジとツツジはTKさんを通して寄贈の申し出があったものである。樹木を寄贈するという申し出があったことは2013年10月7日（月）の定例会で紹介されたのが最初であるが、この話は一旦保留となる。それから半年以上経過してから植樹されることになった。2014年4月16日（水）にはコンクリートのテストピースを搬入し、敷地内



(写真 7-3) 土間と和室の間の柱の撤去



(写真 7-4) 設置された勝手口



(写真 7-5) 土間部分の浸水防止工事



(写真 7-6) 本棚の増設

に花壇を作った（写真 7-12）。2014 年 6 月上旬には敷地北西の斜面部分に畑を作り野菜を育て始めた。植樹をする、花や野菜を育てるというのは一過性の行為ではなく、継続的な関わりが求められる行為である。こうした行為がなされたことは、これらに関わったメンバーが「居場所ハウス」に継続的に関わろうという意志の現れだと考えることができる。注目すべきは、これらの行為が、現在の運営体制される時期に行われているということである^{*7-1)}。

この時期の後は、食堂の運営に向けての準備が始められることになる。2014 年 6 月 7 日（土）にキッチンカーを借りてからはキッチンカーを使うための水道、排水溝の工事を行った。2015 年 1 月末からは屋外のキッチンスペース建設のための工事が始まる（写真 7-13～14）。キッチンスペースの建設工事は、運営メンバーの TK さんと、TK さんの同級生で、末崎町内で大工をしている MF さんが中心になって行っている。この他、「周年記念感謝祭」のための餅まき台、納涼盆踊りの櫓など季節の行事を行うための準備も TK さんが行っている。2015 年 5 月にキッチンスペースを活用した食堂の運営が始まってからは、キッチンスペースに看板、柵、網戸を取り付けるなどが行われた。

「居場所ハウス」にはいつも綺麗な花が咲いている。「居場所ハウス」の花の手入れは、2013 年 6 月 13 日（木）のオープニングセレモニーのため、「おたすけクラブ」のメンバーが鉢植えの花を植えたことに始まる。「おたすけクラブ」メンバーはオープン後も「居場所ハウス」の花の手入れをしており、現在は「おたすけ隊」メンバーが中心となり花の手入れを続けている（写真 7-15～16）。メンバーの中でも育苗の仕事の経験がある KO さんは、オープン以来、毎日花や植木の水やりを続けている。

「居場所ハウス」において、敷地に対して様々な手が加えられてきたことの背景には、最初から敷地が舗装されていなかったという理由をあげることができる。当初の計画では南東側の道路から玄関までは舗装された駐車場・通路とされる計画であった。しかし、「居場所ハウス」では末崎町の人々自身が作りあげていくプロセスが大切にされており、オープン後に出される要望や提案に柔軟に対応していくためには、設計者が一方的に舗装することを決めずに、できるだけ自然な状態で残しておいた方がよいと考えられた。そこで「居場所ハウス」の敷地は、竣工時には舗装されないこととされたのである。

7-3. 敷地外に手を加える行為

空間に手を加える行為は敷地外にまで広がっている（表 7-3）。オープンから約 8 ヶ月が経過した 2014 年 2 月 12 日（水）に、末崎中学校前の三叉路に掲示板を設置したのが初めてである（写真 7-17）。これも現在の「居場所ハウス」の運営体制が確立されつつあった時期に行われている。末崎中学校前の三叉路は人通りが多い場所であり、「居場所ハウス」を末崎町の人々で運営するためには、人通りの多い場所で情報を発信していく必要があるという考えで設置されたものである。掲示板を設置してから、中学校前の三叉路では常に行事・活動案内のポスターを掲示している。2015 年 6 月 14 日（日）の二周年記念感謝祭の前日には、二周年記念感謝祭に参加する人が道に迷わないようにと案内標識を交換した（写真 7-18）。

2014 年 8 月 24 日（日）からは末崎町平地区の休耕地を活用して「居場所農園」での野菜作りを始めている。「居場所農園」での野菜作りは現在も続いており、収穫した野菜は昼食の材料としたり、朝市で販売したりしている。

7-4. 試行錯誤により徐々に場所を作りあげることの意味

「居場所ハウス」はオープン後の試行錯誤を通して運営体制が確立され、様々な活動が行われてきたが、本章でみたように、それは空間に手を加える行為とセットになっている（図 7-1）。

(表 7-2) 空間に手を加える行為：屋外・敷地内

年	月	日	頃	出来事	行為の種類			メンバー 中心
					追加	変更 更新	植栽 野菜	
2013	6	17		「おたすけクラブ」メンバー7人が鉢植えの花を植える			●	○
	6	17		表の水道にホースを設置 (TNさんら3人)	●			
	7	12		道路沿いの看板の設置場所を検討 (HKさん・GSさん・YKさん・TSさん・TSさん)	●			○
	7	14		建物正面壁に設置する看板にするための板を掃除 (GSさん)	●			○
	7	22		道路沿いに掲示板を設置 (TSさんら2人)	●			
	8	5		道路沿いに看板を設置	●			
	8	27		敷地法面に竹で作った安全柵を設置 (TKさん・GSさん・YKさん)	●			○
	9	3		K冷蔵から県営災害公営住宅の建設のために伐採された樹木をもらい屋外ベンチとする	●			
	9	13		末崎町門之浜地区のHKさんから、文字が書かれた看板が届く	●			○
	9	18		建物正面に看板を設置 (TKさん・YKさん・DMさん)	●			○
	10	28		下の敷地の法面に安全柵を作るための竹を搬入 (TKさん)	●			○
	11	6		下の敷地を駐車場とするためロープを張る (YKさんら2人)	●			○
	11	18		建物裏の倉庫の材料を搬入 (TSさん)	●			
	11	19	頃	末崎町平地区のHUさんの家から流しを搬入し月見台奥に設置	●			○
2014	2	17		月間予定を書いたホワイトボードを設置するための木枠を作り、表にホワイトボードを設置 (TKさん)	●			○
	2	22		建物裏の倉庫に扉をつける (TKさん)		●		○
	2	27		下の敷地に降りるため法面に階段を作る (GSさん)		●		○
	3	18		愛知県の方から寄贈されたコブシの木を敷地北側斜面に植樹 (TKさん・GSさん)			●	○
	4	16		コンクリートのテストピースを搬入し敷地内に花壇を作る (TKさん・GSさん・YKさん・MUさん・KSさん)			●	○
	5	4		有限会社Iより花壇の土1トンが寄贈される			●	
	5	17-19		Tライオンズクラブから寄贈されたモミジ、ツツジを植樹 (TKさん・GSさん)			●	○
	5	18		道路沿いの看板を一旦撤去 (TKさん・MUさん)		●		○
	5	22		道路沿いの看板を設置し直す (TKさん・GSさんら)		●		○
	5	26		下の敷地の駐車場のロープを張り直す (YKさん)		●		○
	6	7		大船渡町の飲食店よりキッチンカーを借りる	●			
	6	10		キッチンカーのために排水溝に升入れ作業を行う (TKさん)	●			○
	6	上旬		敷地内の北側斜面で畑作りを始める (TKさん)。余っていたコンクリートのテストピースで敷地北側に小さな畑を作る			●	○
	6	14	頃	Hさんが屋外の水道工事を行う	●			
	6	16		大船渡中央公民館から花・土・プランターが届く。後日、「おたすけクラブ」メンバーが植える			●	○
	6	16		屋外の流しのための水道工事を行う	●			
9	21		カマドを収納する建物の図面を書く (TKさん)	●			○	
9	22		末崎町門之浜地区のKさん夫妻より寄贈されたカマドを移設	●				
9	26		N左官にカマドの修理を依頼		●			
10	19		末崎町平地区のTMさんから借りたパラソルを使い屋外にテーブルを置く	●			○	
10	24		建物正面に木材で梁を設置。朝市の掲示、干し柿作りなどに利用する	●			○	

※空間に手を加える行為の種類・時期はフィールドノート、写真、運営日誌をもとにリストアップした。

※表中の「メンバーが中心」とは運営メンバーが中心となって作業したものを表す。

オープン直後からは、建物内での掲示ラックや本棚、棚、ロフトの物置にあがるための梯子の設置、敷地内での看板や掲示板、法面の安全柵、建物正面の看板の設置、建物裏への倉庫の増設というように、オープン時点で不足していた機能を追加する行為が行われた。これらの行為は、ハネウェル社からの運営協力金によって材料を購入し、運営メンバーが手作りで作ったものが多い。

現在の運営体制が確立するオープン半年から1年が経過する頃までの期間には、本棚前に照明を追加したり、和室の板の間に畳マットを敷いたり、柱を撤去したり、勝手口を設置したり、土間部分に浸水処理をしたり、土間部分のコンクリートにワックスを塗ったりと、運営を続けていく中で運営メンバー

(表 7-3) 空間に手を加える行為：屋外・敷地内 (続き)

年	月	日	頃	出来事	行為の種類			メンバー中心
					追加	変更更新	植栽野菜	
2015	1		末	屋外にカマドの保管も兼ねたキッチンスペースを建設するための基礎工事を始める (TK さん)	●			○
	2	13	金	キッチンカーを返却		●		
	3	13	頃	建物裏側の隣家との間に柵を設置 (TK さん)	●			○
	3	30		屋外のキッチンスペースの建設工事を始める (MF)	●			
	4	21		表にジュースの自動販売機を設置	●			
	4	27		屋外のキッチンスペースの清掃。ガスコンロ、ボンベ、湯沸かし器設置	●			○
	5	15		末崎町門之浜地区の HK さんが「スマイル食堂」と書いた看板を、屋外のキッチンスペースに設置 (TK さん)	●			○
	5	22		屋外のキッチンスペースに天袋を設置 (TK さん)	●			○
	5	25-26		屋外のキッチンスペースに柵を設置 (TK さん)	●			○
	6	12		有限会社 I から丸太のベンチが届き、月見台の脇に置く	●			
	6	22		敷地北側の法面に木を植樹 (TK さん)			●	○
	7	3		大船渡中央公民館から「花いっぱい運動」の花・土・プランターが届く。末崎町平地区の AS さんの家から寄贈された花と合わせて花壇に植える (KO さん、AS さん、AS さんら)			●	○
	7	28		屋外のキッチンスペースに網戸を設置 (TK さん)	●			○
	7	31		「居場所ハウス」のキッチンと屋外のキッチンスペースにインターホンを設置	●			
	11	22		表で居場所農園から収穫した野菜の販売を始める	●			○
	11	26		玄関脇から屋外のキッチンスペースまでの水道管に凍結防止の管をまく作業をする (TK さん)		●		○
11	28		表に長テーブルを出して居場所農園から収穫した野菜等の販売を始める	●			○	
12	14		月見台のペンキの再塗装、丸太ベンチのペンキの塗装 (NK さん)		●			
12	20		月見台にワックスを塗り、表面を綺麗にする (NK さん)		●			



(写真 7-7) 道路沿いの看板の設置位置の検討



(写真 7-8) 建物正面壁の看板にする木材の清掃



(写真 7-9) 建物正面への看板設置



(写真 7-10) 伐採した樹木を使ったベンチ



(写真 7-11) モミジとツツジの植樹



(写真 7-12) テストピースを使った花壇



(写真 7-13) キッチンスペースの建設工事



(写真 7-14) キッチンスペースの建設工事



(写真 7-15) 花を植える「おたすけクラブ」メンバー



(写真 7-16) 花壇を手入する「おたすけ隊」メンバー

から出された問題点に対応するための行為が集中して行われている。日々の運営を通して出された問題点に対して、運営メンバーは設計者に対して不満を出すのではなく、自分たちで手を加えることで使いやすい空間に変えていったのである。敷地内では植樹、花壇や畑作りと一過性の行為ではなく、その後に継続的な関わりが求められる行為が行われている。現在の運営体制が確立した時期は、「居場所ハウス」内外の空間も大きく変化している。

2014年5月23日（金）に開催されたNPO法人の総会以降には、「居場所農園」での野菜作り、キッチンカーの利用、そして、屋外へのキッチンスペースの建設工事と新たな活動を展開するための行為が行われるようになる。

このようにみえてくると、空間に手を加える行為の種類は、時期によって変化していることがわかる。運営メンバーを中心とする地域の人々が空間に手を加えていく上で、建物が手を加えやすい木造であったこと、あらかじめ屋外空間が舗装されておらず手を加える余地があったこと、ハネウェル社からの基金の一部がオープン後に備品や木材等の材料を購入するための運営協力金として確保されていたことなど、空間に手を加えやすい状況が揃っていたことは重要である。

「居場所ハウス」は徐々に作りあげられてきたと言えるが、もしも限られた人や専門家がサービスを一方的に提供する場所であり、あらかじめサービスの内容が決められていれば、このような試行錯誤は行われなかった可能性がある。試行錯誤を通しての運営は、限られた人や専門家が運営するのに比べれば、スムーズな運営とは言えないかもしれない。実際に日々の運営では様々な課題が生じたり、運営メンバーの間で意見の相違が生じたりすることもある。けれども、このような試行錯誤が行われなければ

(表 7-5) 空間に手を加える行為：敷地外

年	月	日	頃	出来事	行為の種類			メンバー 中心
					追加	変更 更新	植栽 野菜	
2014	2	12		末崎中学校前の三叉路に掲示板を設置 (TK さん)	●			○
	8	24		末崎町平地区の休耕地を活用した居場所農園での作業を始める			●	○
	9	7		居場所農園に水を引く作業をする (TK さん・GS さん・TS さん・TM さん)			●	○
2015	6	13		「二周年記念感謝祭」のため、末崎中学校前の交差点の掲示板の案内標識を交換		●		○
	11	29		県道 2 ヲ所に立てるための看板を制作 (GS さん)	●			○

※空間に手を加える行為の種類・時期はフィールドノート、写真、運営日誌をもとにリストアップした。

※表中の「メンバーが中心」とは運営メンバーが中心となって作業したものを表す。



(写真 7-17) 中学校前の三叉路への掲示板設置



(写真 7-18) 中学校前の掲示板への案内標識の追加

		運営体制	主な出来事・行事
2012		※Ibashi、オペレーション USA、社会福祉法人 T、H 大学大学院のメンバーを中心としてプロジェクトが進む ※プロジェクトに関わり始める末崎町の住民が増え始める	○最初のワークショップ開催（5月） ○NPO 法人設立総会 これが末崎町内で開催された最初の会議（9月） ○末崎町内での最初のワークショップ開催（10月） ○地鎮祭（10月）
2013		社会福祉法人 T が事務局 ○毎日ボランティアで運営（6月）	○NPO 法人・居場所創造プロジェクト設立（3月） ○オープニングセレモニー（6月）
	移行期	○パートでの運営を開始（7月） ○毎日ボランティアでの運営を開始（10月）	○最初の定例会開催（6月） ○建物正面の看板、道路沿いの看板を設置（7月） ○ロフトの物置にあがるための梯子を設置（10月） ○居場所感謝祭（11月） ○運営会議（12月）
2014		現在の運営体制の確立 ○パートでの運営を開始（1月） ○おたすけ隊の名称が使われ始める（3月頃） ○末崎町の6人が理事に（5月）	○和室と土間の間の柱を撤去、勝手口の設置（2月） ○ひな祭り、東北トリップ（3月） ○コンクリートのテストピースで花壇を作る（4月） ○鯉のぼり祭り（5月） ○モミジとツツジを植樹（5月） ○平成25年度 NPO 法人総会（5月） ○大船渡町の飲食店よりキッチンカーを借りる（6月）
		末崎町の住民で運営 ○パートの1人が交代（9月）	○一周年記念感謝祭（7月） ○居場所農園での農作業を開始（8月） ○カマドを移設（9月） ○大槌町・釜石市への見学（10月） ○朝市スタート（10月） ○草月流生花教室が参加社主催の活動となる（12月）
2015		○わらしっ子見守り隊結成（5月）	○フィリピンのレイテ島を訪問（1月） ○キッチンスペースの建設工事開始（1月） ○キッチンカーを返却（2月） ○歌声喫茶スタート（2月） ○国連防災世界会議に参加（3月） ○食堂の運営をスタート（5月） ○二周年記念感謝祭（6月）
			○図書コーナーと事務コーナーの間に本棚増設（8月） ○食品展示会への見学（9月） ○理念を振り返るワークショップ開催（10月） ○フィリピンのレイテ島を訪問（10月）

(図 7-1) プロジェクトのスタートから現在 (2015 年 12 月末) までの経緯

オープンの時点では想像していなかった活動を展開することはなかった。

「居場所ハウス」においてオープン後のプロセスは、次のような積極的な意味をもったとすることができる。

「居場所ハウス」では、どのような運営をしていくか、どのような空間にするかがしばしば話題とされる。運営や空間に関する具体的な内容は、地域の人々にとって貴重なコミュニケーションのきっかけになるのである。

実際に活動を行ったり、空間に手を加えたりしていく際には多くの人々の協力がなされている。調理、事務作業、大工仕事、農作業、花や植木の手入れを担当するという協力もあれば、休耕地やカマドを提供したり、ひな人形を貸したり、鯉のぼり、イルミネーションを寄贈したりするという形での協力もされている。あらかじめ提供するサービスの内容が決められていれば、このような協力がなされなかったことを考えれば、試行錯誤のプロセスは地域の人々が自分にできる具体的な役割を見出す機会を生み出していると言えることができる。

現在の運営体制が確立しつつあった期間には、いくつかの転機となる行事が開催されたり、空間が大きな手が加えられたりしていた。これを地域の人々が「居場所ハウス」の運営に積極的に関わろうという意志をもったから、行事を開催したり、空間に手を加えたりしたという側面だけを捉えるのは十分ではない。行事・活動に多くの人々が参加したり、手を加えた結果として使いやすい空間になったりと、試行錯誤の結果が目に見えるかたちとなり、地域の人々がそれを認識することで、「居場所ハウス」が生み出したものが共有されていくという側面があることを忘れてはならない。

場所が地域に根ざしていくというのは決して抽象的なことではない。コミュニケーションのきっかけとなる具体的な話題となり、地域の人々が担える具体的な役割を生み出し、生み出されたものが具体的に目に見えるかたちで認識できるというように、具体的なことの積み重ねによって場所は地域に根ざしていく。こうした具体的なことを生み出すからこそ、試行錯誤のプロセスは重要なのである。

第8章. 「まちの居場所」の役割と可能性

8-1. 「居場所ハウス」が生み出していること

「居場所ハウス」は東日本大震災後、海外からの提案でスタートし、2013年6月13日（木）のオープンから2年半の運営を継続してきた。「居場所ハウス」はカフェスペースの運営を基本としているが、高齢者を中心とする地域の人々がふらっと訪れて、お茶を飲みながら話をして過ごす安い値段でお茶が飲める場所ではない。また、公民館やカルチャーセンターのように地域の人々があらかじめ内容が決められた行事・活動に参加するだけの場所でもない。

第1章で、「まちの居場所」は、①気軽に立ち寄って思い思いに過ごせる場所、見守りや助け合いが行われる場所と、②人々が何らかの役割を担える場所、様々な活動ができる場所という2つの役割を両立させることを目指していると述べたが、このことは「居場所ハウス」にもあてはまる。「居場所ハウス」が目指しているのは、地域の人々が個々に楽しんだり、生き生きしたりすることではなく、地域の人々が日常的に居合わせる場所を、地域の人々自身で作りにあげていくことで、豊かな暮らしを実現していくことなのである。

オープンからの2年半の運営を通して、「居場所ハウス」が生み出してきたことをまとめると次のようになる。

■地域で広がりのある関係を築く

「居場所ハウス」にやって来るのは高齢の世代が多いが、子どもが遊びに来たり、行事・活動に子どもの親世代が参加したりすることもある。「居場所ハウス」は世代を越えた人々が顔を合わせることができる場所になっている。世代を越えた関係という場合、高齢者は同じ世代として一括りにされることが多いが、例えば65歳の人と90歳の人とでは25歳も年齢が離れており、当然、人生を送ってきた環境も異なる。「居場所ハウス」では年齢が離れた高齢者同士が顔を合わせることができる場所でもある。

「居場所ハウス」で重要なことは、個人と個人の関係に加えて、互いに気遣い合う人を周りから見守ったり、いつも来ている人が姿を見せないと心配して家まで様子を見に行ったり、自分が地域で築いている関係を認識してもらったりというように、地域の人々が互いを認識しているという状態が生まれていることも重要である。

こうした広がりのある関係は、個人と個人の関係に比べると弱いかもしれない。しかし災害などい



(写真 8-1) ひな人形を子どもたちと一緒に飾る



(写真 8-2) 郷土食のがんづきを作る女性

ぎという時にまず一緒に行動するのは、遠くに住む人でなく、同じ地域に住む人である。広がりのある関係が築かれている地域が、災害時に、あるいは、災害からの立ち直りに強い地域と言える^{*8-1)}。

■地域の暮らしの文化を継承する

地域の文化を継承することも「居場所ハウス」の重要な役割である。1月のミズキ団子作り、3月のひな祭り、5月の鯉のぼり祭り、7月の七夕飾り、8月の納涼盆踊り、12月のクリスマスなど季節ごとの行事を行っている（写真8-1）。特にひな祭りでは高田人形という地域に伝わる貴重な人形を、地域の人から借りて展示している。これらの行事は、かつては地区や家庭で行われてきたものだが、少子高齢化や東日本大震災などの影響で行われなくなりつつあるものもある。地区や家庭という単位で行事を継続することが難しくなっているのだとすれば、末崎町という単位の人々が集まることのできる「居場所ハウス」で行事を継続していくことには意味がある。この他、「居場所ハウス」では鎌餅、がんづき、ゆべし、磯花寿司などの郷土食作りの講習会を開催したこともある^{*8-2)}。

ただし、地域の文化は決して行事の時にだけ継承されるものではない。「居場所ハウス」ではひつつみ汁、小豆ぼつとや、結婚式の披露宴で出される「おぢずき（おちつき）」などの郷土食が昼食メニューになることもある。また、日々の運営の中で、郷土食を作ったり、季節の素材を用いた干し柿、凍み大根などを作ったり、クルミの殻むきを行ったりしている（写真8-2）。手作りのがんづき、漬物などの差し入れがあることもある。食にまつわることでなく、地域のお祭りに向けて裁縫を教わる人もいる。

現在、地域の文化と見なされ、継承することが必要だと言われているものも、かつては日々の暮らしに密接に結びついていたものである。日々の暮らしの積み重ねが文化を形成していくのだとすれば、地域の人々が日々の暮らしを共にすることが、文化を継承することの根底にあると言える。

■自分にできる役割を担うことで共に場所を作りあげる当事者になれる

「居場所ハウス」では調理、大工仕事、花・植木の手入れ、事務作業、チラシの作成、農作業など、地域の人々が自分にできる役割を担いながら運営に協力している。ただし、自分にできる役割を担うことを、仕事の経験や特技をいかすという狭い意味で捉えてはならない。食べ終えたお茶碗を洗ったり、来訪者にお茶を出したり、薪ストーブに薪をくべたり、屋外のキッチンから昼食を運んだり、ゲストブックに来訪者の記録をつけたりするという協力もある。また、「居場所ハウス」には様々な物の差し入れ



(写真 8-3) 薪割り



(写真 8-4) 事務作業に協力する女性

があり、中には自分には何もできないからと砂糖や小麦粉などを持って来てくださる人もいます。仕事の経験や特技をいかすことの背景には、このような日常の場所を成立させるためのささやかかもしれないが、無数の協力がなされていることを見落としてはならない。「居場所ハウス」は地域の人々が「自分にはこれができる」という具体的な役割を見出す余地のある場所であり、地域の人々により少しずつ担われる役割の積み重ねによって「居場所ハウス」は成り立っているのである（写真 8-3～4）。

高齢者施設では「利用者さん」という言葉がしばしば使われる。「利用者さん」というのは丁寧な言葉のように感じるが、この言葉にはサービスする側とされる側とを線引きする意識が込められている。「居場所ハウス」ではやって来た人が「利用者さん」と呼ばれることはない。この部分に地域の人々で作ってあげていく場所としての「居場所ハウス」の本質が現れている。「居場所ハウス」において、地域の人々は、何かしてもらうことを期待し、期待が満たされなければ苦情を言うだけの「利用者さん」ではない。自分にできる役割を担うことで共に場所を作りあげる当事者一人ひとりなのである。共に場所を作りあげる当事者になるというのは決して大袈裟なことでも、抽象的なことでもない。それは自分にできる具体的な役割を担おうとする場所への向き合い方のことである。

■様々な活動を立ち上げる拠点となる

「居場所ハウス」では、周囲に店舗や飲食店がほとんどない地域の状況を改善するため、そして、財政的な基盤を確立するために農園での野菜作り、朝市、食堂の運営など新たな活動をスタートさせた。スタート後も試行錯誤してきたが、農園は約1年半、朝市は1年以上、食堂の運営は半年以上継続してきた。「居場所ハウス」ではこの他にも様々な行事・活動が行われているが、その中で草月流生花教室、歌声喫茶の2つは地域の人々の主催で継続されている活動である。

これらに共通しているのは、既存のサービスの土台に乗る利用者として自分たちだけで楽しむのではなく、その土台自体を作りあげようとしている点である。少子高齢化が進み、経済規模が縮小していく我が国では、官民を問わず従来のようなサービスを期待することはできなくなりつつある。そのような社会においてはサービス不足について不満を言ったり、陳情したりするのではなく、自分たちでサービス不足を乗り越えるものを積極的に生み出そうとする姿勢は欠かせない。

こうした姿勢をとることは既存のサービスの利用者になっているのに比べれば楽ではないかもしれない。時には課題が生じたり、意見の食い違いが生じたりすることもあるかもしれない。しかし、「居場所ハウス」では自分たちにできる範囲で少しずつ、時には楽しみながら、土台を作りあげようとする動きがみられる。

■地域にあるものを資源化していく

「居場所ハウス」では地域の多くの人々から運営への協力や、物の寄贈の申し出がある一方で、「居場所ハウス」の方から例えば音響に詳しい人、大工さん、パソコンが使える人、郷土料理が得意な人などに声をかけ協力を依頼することもある。朝市や行事の際には近くの末崎地区公民館などからテントや長テーブル、椅子などを借りることもある。地域の人的・物的な資源を運営にいかせるのは、地域のことを把握している運営メンバーがいるからである。

地域の資源をいかすことは、「居場所ハウス」がオープンする前から意識されていた。オープン前には、「居場所ハウス」に対して自分ができることを紹介するワークショップが開かれたが、このワークショップには地域の人的資源を共有するという意味があった。

ただし、あらかじめ価値が共有されたものだけが「居場所ハウス」の運営にいかされるわけではない。

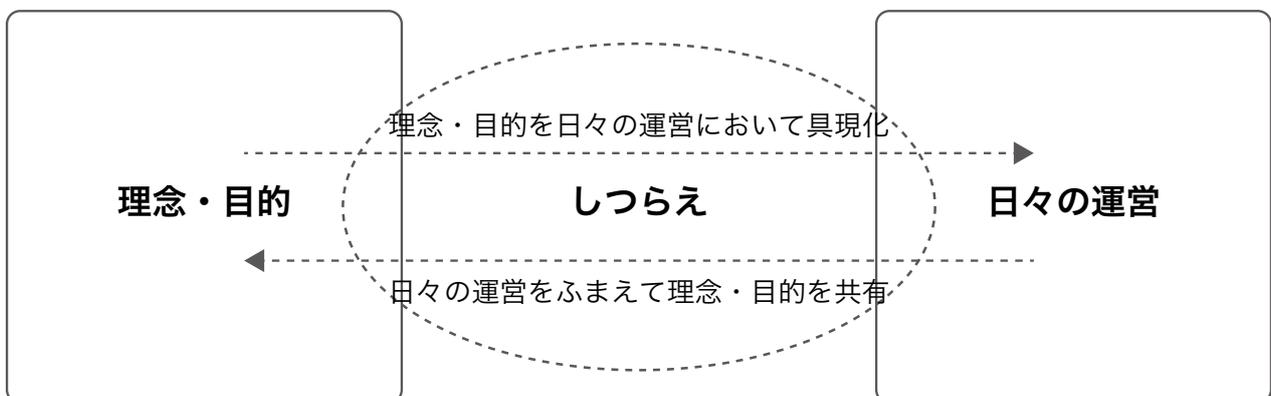
この点を見落としてはならない。仕事の経験をいかして大工仕事を担当している運営メンバーの男性は、まさか退職後にこのようなことをすることになるとは思ってもいなかった、と話している。居場所農園にしているのは休耕地であり、1人の運営メンバーの紹介で借りることができた土地だが、「居場所ハウス」があるからこそ、休耕地が農園にできる土地という資源として認識されたのである。災害時の備えとして屋外のキッチンスペース内に設置しているカマドは、末崎町内の個人宅で一部が破損したまま数十年も放置されていたものを移設、修復したものである。このように初めは価値があると認識されていなかったものが、運営を継続しているうちに「居場所ハウス」で思いがけず役に立ったということがしばしば生じる。このことから言えるのは、「居場所ハウス」は地域をそれまでとは違う価値観で認識し直すきっかけを与えることで、地域にあるものを資源化する役割を担うということである。

地域のものが資源化されていくプロセスを省いて外から眺めると、「居場所ハウス」は地域の資源を上手く活用して運営しているように見えるかもしれない。しかし繰り返しになるが、最初から資源だと考えていたから運営に活用しただけでなく、運営を通して思いがけず資源であることが発見されたというプロセスが大切なのである。

8-2. 「まちの居場所」をしつらえる

「居場所ハウス」に限らず、「まちの居場所」は単に物理的な空間（ハード）を用意すれば実現するわけではない。実施する特定の目的をもったプログラム（ソフト）を寄せ集めるだけで運営が成立するわけでもない。「居場所ハウス」から教えられることは、「まちの居場所」を実現し、運営を成立させるためには、そこに関わる人々がいくつかの価値を共有しておく必要があるということである。

「居場所ハウス」はIbashiの8理念（図2-1）に基づいて運営されているが、日々の運営を継続していく中で運営メンバーからの、理念だけでは運営できないという声、その一方で、今の運営はまだ理念を十分には実現できないという声を聞くことがある。この時に問われているのはIbashiの理念と「居場所ハウス」の運営の関係のあり方である。「まちの居場所」において理念・目的はアイデンティティに関わる重要なものである。しかし実際に「まちの居場所」を運営すれば、例えば、運営体制をどうするか、飲食メニューをどうするか、活動をどう地域に広報していくか、資金をどう確保するか、来訪者にどう対応するかなど様々なことに対して判断し、対応していく必要があるが、理念・目的だけでは判断、決断ができないのも事実である。その一方で、日々の運営方法の中にはある程度、基準が決まっいて、マニュアル化できるものもあり、基準やマニュアルは運営に役立つ。しかし、それに従って日々



(図 8-1) 理念・目的、しつらえ、日々の運営

の運営をこなすだけでは、そもそも「まちの居場所」をなぜ開いたのか、なぜ運営を継続するかという大切なものが見失われてしまう。重要なのは、理念・目的を掲げるだけでなく、日々の運営を基準やマニュアルによってこなすのでもなく、両者をどう橋渡しするかを考えていくことである*8-3)。

以下にあげるのは、今まで「居場所ハウス」に接する中で筆者が重要だと感じたことである。Ibasho の理念と内容が重なるものもあるが、理念そのものではない。また、日々の運営においてそのまま活用できる具体的な方法でもない。筆者はこれらを理念と日々の運営を橋渡しするために共有しておくべき価値だと考えており、ここではそれを「しつらえ」と呼びたい(図8-1)*8-4)。「しつらえ」とは理念・目的を、具体的な場所として具現化していく際の枠組みであり、同時に、理念・目的を日々の運営の実体験を伴ったものとして共有していくための枠組みになるものだと捉えることができる*8-5)。

■最初から交流を意識せず、まず人々が居合わせる状況を作り出す

「まちの居場所」では人々の交流が目指されていると言えるが、最初から交流など特定の目的をもつプログラムを提供するだけでは、そこにはプログラムに参加する人しかやって来ない。「居場所ハウス」において広がりのある関係が築かれたり、行事以外の時でも暮らしの文化の継承が行われたりしているのは、特定のプログラムに参加する人だけが集まるのではなく、多様な人々が日常的に居合わせる場所になっているからである(写真8-5)。

従って、特定の目的をもつプログラムを提供するだけの場所にしないことを意識する必要があるが、特定の目的がなくても地域の人々が訪れる場所を実現するためには、そこに来たり、そこで過ごしたりするのが不自然にならないような大義名分があることを十分に意識しておく必要がある。「居場所ハウス」でも、「何をしに来たんだ？」という目で見られたので、来にくくなったと話している人がいたが、特定の目的がなければいほど、そこに来たり、そこで過ごしたりすることの理由を問われないことが重要である*8-6)。さらに、「まちの居場所」は来やすさだけが注目されるが、同時に、帰りやすさ、つまり、帰りたいた時に帰れることも重要である。

「居場所ハウス」がカフェスペースとして運営されていること、食堂を運営していること、朝市を開催していること、つまり、お店という形態で運営されている意味はここにある。カフェスペース、食堂、朝市は地域の人々が特定のプログラムに参加するという目的がなくても、「居場所ハウス」に来る大義名分になるのである。さらに、飲食や買い物を終えて帰るといのは不自然なことではないため、「居場所ハウス」から帰るための大義名分にもなり得る。



(写真 8-5) 朝市での久しぶりの再会



(写真 8-6) スタッフも一緒になって過ごす

地域住民の交流を目的とする従来の公共施設では営業行為が禁止されている場合が多いのに対して、2000年頃から各地に開かれている「まちの居場所」はカフェスペース（お店）という形態で運営されていることに注目する必要がある。両者の違いは単に金銭的なやりとりがなされるか否かにとどまらず、人々の集まり方に大きな影響を与えている^{*8-7)}。

最初から交流することを求めるのではなく、人々が居合わせるという状況をまず作り出すこと^{*8-8)}。そこから結果として、人と人の関わりが生まれるかもしれないという可能性にかけるという姿勢が求められる^{*8-9)}。

■主客の関係を緩やかなものにし続ける

「居場所ハウス」では地域の人々がサービスの利用者になるのではなく、自分にできる役割を担えることを大切にしている。こうした場所を実現するためには、サービスをする側／される側という主客の関係を固定せず、緩やかなものにしておく必要がある（写真8-6）。

運営を継続するにつれ、運営に中心に関わる人とそれ以外の人が出てくるのは自然なことであり、誰かが中心に関わらなければ運営できないのも事実である。だからこそ、あえて主客の関係を緩やかにしておくことを意識する必要がある。「誰かのために何かをやってあげたい」という思いは大切であり、その実践は何かをする側にもされる側にも喜びを生む。しかしこれが一方通行になれば、する側／される側の関係が固定化され、依存関係が生み出されてしまう。悪意からでなく、「誰かのために何かをやってあげたい」という善意から依存関係が生み出されてしまうからこそ、「まちの居場所」では主客の関係を緩やかなものにしておくことを意識し続けなければならない。

自分が役割を担うだけでなく、他の人に役割を残しておくこと、さらに、積極的に他の人が役割を見出せる余地を作り出すことが重要になる。そのためには、あえて手を出さないことを不親切だと見なしたり、怠けていると見なしたりせず、その意義を積極的に認め合える雰囲気を作ることも重要になる。「誰かのために何かをやってあげたい」という気持ちをおさえて、あえて手を出さないのは簡単なことではないが、「居場所ハウス」のような地域の人々が日常的に居合わせる場所があれば、一方的にやってあげるのではなく、一緒に楽しむ、見守るなど多様な関わりの可能性があるのである。

高齢になっても住み慣れた地域に住み続けることが大切だとしばしば指摘されるが、地域に住み続けるとは、何歳になっても役割を担いながら、周りの人々と助けたり助けられたりしながら暮らすことなのだという点を忘れてはならない。

■一度に完成させようとせず、徐々に作りあげていく

「居場所ハウス」は、具体的な運営のあり方が決まらない状態でオープンを迎えた。地域の人々はそこから試行錯誤によって運営のあり方を決め、運営体制を確立させ、そして、農園での野菜作り、朝市、食堂の運営などの活動を徐々に展開してきた。「居場所ハウス」において注目すべきは、徐々に場所を作りあげるのは運営内容に関わるソフト的なことに限らないということである。オープン時点で不足していたものを補ったり、使いづらい部分を改善したりと、新たな活動を展開したりするために、地域の人々は空間にも徐々に手を加えてきたのである。

ただし、こうした試行錯誤がもつ意味は、オープンまでに運営のあり方が十分議論されていなかった、設計者は使い方を十分に想定し切れていなかったという未完成な状態を補完するという消極的なものに限らない。試行錯誤により徐々に場所を作りあげるというプロセスは、地域の人々にとってコミュニケーションのきっかけとなり、人々が自分にできる具体的な役割を見出す機会を生み出しているという積極

的な意味がある。地域の人々が完成された場所を利用するだけでなく、自分にできることを通して関わることで、共に場所を作りあげていく当事者になるためには、試行錯誤というプロセスは欠かせない。

試行錯誤のプロセスを積極的なものと捉えるためには、「まちの居場所」を作りあげることに対する認識を変えることが必要である。つまり、「まちの居場所」は専門家や特定の人を作るものだという認識から、オープンまでに作りあげてしまわなければならないという認識から解放されなければならないのである。建物の竣工、場所のオープンは重要な節目であるが、これらはあくまでも通過点であり、オープンまでに地域の人々の意見を聞いて、それをふまえて設計し、完成した建物を地域の人々が利用するという明確な段階に区切る必要はない。「まちの居場所」はオープン後の試行錯誤を通して、徐々に作りあげられていく。

■決定権を身近なものにしておく

「居場所ハウス」において地域の人々が試行錯誤できるのは、自分たちの行為の決定権が、自分たちにあるからである。2014年度から末崎町の6人が理事に就任したことは、日々の運営に関わる運営メンバーが、自分たちで「居場所ハウス」の運営について決定権を持てるようになったことを意味している。

NPO法人の体制に関わるだけでなく、日々の具体的な運営にもあてはまる。「居場所ハウス」では運営メンバーの何人かが鍵を管理しており、戸締まり、薪ストーブの火の始末、金銭の管理などは全て運営メンバーが自分たちで行っている。鍵を管理しているため、夕方急に会議を開いたり、懇親会を開いたり柔軟な対応ができる。定休日に出入りして事務作業、大工仕事、花や植木の手入れを行うこともできる。誰かの許可を得ないと時間外に出入りできない場所と、自分たちの判断で時間外でも自由に出入りできる場所では、地域の人々の関わり方が決定的に異なる。

決定権を持てることは、コストを負担することにも関わってくる。「居場所ハウス」の周囲にある公民館、仮設住宅の集会所、サポートセンターでは無料でお茶が飲めるのに、「居場所ハウス」はお金を払ってコーヒーなどを注文しないといけないと言われることもある。しかし、公民館、仮設住宅の集会所、サポートセンターなど無料で利用できる公共の場所^{*8-10)}は、税金で建設され、運営されている。税金として目に見えにくい形でコストを負担しているか、その都度コストを負担しているかという違いはあるにしても、コストがかかっているのは同じである。さらに、金銭のやりとりが生じるとサービスをする側／される側というように主客の関係が固定的になると言われる場合があるが、無料で利用できる公民館、仮設住宅の集会所、サポートセンターにも主客の関係は存在している。「居場所ハウス」では、



(写真 8-7) 毎月開催されている定例会



(写真 8-8) 運営を振り返るワークショップ

例えば、自分たちの判断でパートを1人から3人に増やしたり、パートが1人きりになる日はボランティアが協力したりできる。それに対して、無料で利用できる公共の場所では一般的にこうした融通が利かず、無料で利用できる代わりに手も口も出しづらい場所になる傾向がある。

日々の運営に関わるメンバーが理事に就任することで体制を確立させること、自分たちで鍵を管理すること、その都度コストを負担すること。これらはいずれも決定権を自分たちの身近なところにおいておくための仕組みだと言える。繰り返しになるが、決定権が身近にあるからこそ、地域の人々は多様なかたちで「まちの居場所」に関わることができるのである。

■生み出されたものを事後的に共有していく

「居場所ハウス」の運営のあり方を大きく変える朝市、食堂の運営は、元々は周囲に店舗や飲食店がほとんどないという地域の状況を受けてスタートさせたものである。しかし、朝市や食堂の運営は店舗や飲食店がないというマイナスの状態を埋め合わせるだけにとどまらない意味を持ち始めている。「居場所ハウス」の朝市や食堂は、単に地域の人々が買い物や食事をすませるだけの場所ではない。身近に買い物や食事ができる場所があり、そこでは新鮮なものや旬のものが手に入る。顔なじみの人と顔を合わせたり、時には長い間顔を合わせていなかった人や地域外の人と出会ったりして、会話を交わすことができる。地域の人々が主催しているため、ちょっとした協力をすることもでき、そうした関わりを通して人間関係も広がっていく。朝市や昼食の提供は「居場所ハウス」が豊かだと考える地域での暮らしのあり方を目に見えるかたちで示すものだと言ってよい。こうした光景を目の当たりにすることで、「地域で暮らすとはこういうことだ」という認識が地域の人々によって共有されていくのだと言える。

地域の人々は「居場所ハウス」の建物内外の空間に対して、オープン後に様々なかたちで手を加えてきた。空間に手を加えるきっかけは、オープン時点で不足していた機能を補ったり、使いにくい部分を改善したりすることであったが、空間に手を加える行為はこれにとどまらない意味をもつ。地域の人々が空間に手を加えることで、「居場所ハウス」は地域の人々が「このような場所にしたい」と思い描く姿に徐々に近づいていくのである。現在の運営体制が確立した時期に、「居場所ハウス」の空間が大きく作りかえられたのは決して偶然ではない。

地域の人々による試行錯誤は何らかの課題を解決することがきっかけとなり始められたものであるが、試行錯誤によって生み出されたものは、課題解決というマイナスの状態を埋め合わせることを越えた豊かな意味を持ち始めるのである^{*8-11}。重要なことは、こうしたことはスタートした時点で想定していたものではなく、事後的に生み出されたものだということである。日々の運営における試行錯誤を通じて、人々の存在やものの価値が(再)発見され、それらが新たなかたちで組み合わせられることで、「このようにしたかった」という暮らしの豊かさが目に見えるかたちとなり現れてくるのだとすれば、こうしたダイナミックなプロセスを通して生み出されたものを意識的に、事後的に共有していくための技法が求められる^{*8-12}。そのためには、運営を通して生み出されてきたものの豊かさをすくいあげること、表現することも重要である。

「居場所ハウス」にはそのためのいくつかのヒントを見つけることができる。定期的で開催している定例会がその1つである(写真8-7)。運営メンバーの中にも毎日顔を出す人、行事の時に協力する人、キッチンを担当する人、定例会にだけ参加する人など関わり方は多様であり、毎月の定例会にはこうした人々が顔を合わせる機会である。ただし、日々の運営で生じた出来事にその都度対応するためには月に一度の定例会の開催を待てず、その時にいる運営メンバーだけで対応せざるを得ない場合もある。しかしどのように対応したかを事後的に共有しておくことは欠かせない。地域活動において会議は形式的

で、堅苦しいと捉えられる場合もあるが、「わざわざ言わなくてもわかる」という姿勢では経緯を共有しない運営メンバー、顔を出す頻度が少ない運営メンバーに対して排他的になる。「まちの居場所」を運営していくためには、メンバーの裾野の広がり非常に重要である。そのためには毎月開催するという形式を定め、出席すれば運営のおおよその方向性がわかり、意見を出し合えるという機会をもうけておくことは重要である。「居場所ハウス」の定例会は今後の運営に向けて意見交換する機会であると同時に、運営を通して生み出されたものを事後的に共有するための機会になり得るのである。

「居場所ハウス」ではオープンから2年数ヶ月が経過した2015年10月21日(水)に理念を振り返り、今後の運営を考えるためのワークショップを開催した(写真8-8)。「居場所ハウス」は、Ibashoの8理念に基づいて運営しており、オープンまでのワークショップでは理念を共有するためのワークショップが開催された。しかし、オープンまでのワークショップに参加していた運営メンバーは一部であった。「居場所ハウス」の運営メンバーが参加したワークショップを開催することで、日々の運営で生じる出来事は、理念に照らしてどのような意味があるのかを振り返る機会になったと言える^{*8-13)}。

8-3. 「居場所ハウス」のこれから

本レポートの最後に、「居場所ハウス」のこれからについて触れておきたい。「居場所ハウス」のある末崎町平地区は、東日本大震災では津波の直接の被害を受けなかった地区であり、現在、高台移転が進められている(写真8-9～10)。津波の直接の被害を受けなかった地区には高台移転により新たに転入してくる人がいる一方で、津波の直接の被害を受けた地区からは転出していく人がおり、現在、各地区の構成メンバーは変化しつつある。末崎町において公民館は強いまとまりをもった単位であるが、公民館は地区の居住者を対象とする組織であるため、他の地区に移転した人はその枠組みを外れてしまう。こうした状況において、どの地区にも属していないことから、末崎町の全住民を対象とできる「居場所ハウス」がどのような役割を担えるかが問われている。

この点に関しては空間的な近接性が意味をもつと考える。「居場所ハウス」の運営メンバー・来訪者は平地区の住民をはじめとして、「居場所ハウス」の近くに住んでいる人が多い。このことは、元々「居場所ハウス」の周りに地域の活動に積極的な人が集まっていたと考えるよりも、家に近いという理由で「居場所ハウス」に関わったり、来たりするようになった人が多いと考えるべきである。最初は地域の活動に積極的でなかったとしても、家の近くにあって出入りしているうちに関わりが生まれてくる可能性がある。空間的な近接性が意味をもつのだとすれば、「居場所ハウス」の周囲に高台移転してくる人々



(写真 8-9) 完成間近の県営の災害公営住宅



(写真 8-10) 防災集団移転地では住宅建設が進む

を巻きこんだ場所を作りあげていけると考えている。

本レポートでは現在の運営体制という表現を度々用いた。これはレポートを執筆している時点での運営体制のことであるが、今後、時間の経過とともに運営体制は変わっていくと考えている。従って、現在の運営体制とは決して完成形ではない。だからこそ、新たに入ってくる人々に理念や、これまでの運営を通して生み出されたものを共有していくこと、しかし過去に縛られるのではなく、地域の状況に応じて新たな活動を生み出していくこと、さらに、そうやって新たに生み出されたものを共有していくこと、このようなプロセスは引き続き重要である。

「はじめに」で書いたように、2000年頃から「まちの居場所」が各地に開かれていること背景には、従来の施設では上手く対応できない課題が多いという状況があった。けれども従来の施設を批判することが本レポートの目的ではない。従来の地域にとっての資源にしていくこと、そして、従来の施設と「まちの居場所」との連携の可能性を探ることも重要である。現在は「まちの居場所」も従来の施設も含めた再構築が求められる時代なのである。再構築を進めていく上で、私たちはどのような暮らしに価値をおくか選び取っていかなければならない。「居場所ハウス」は再構築に向けた小規模ではあるが、力強い1つの試みである。

注

第1章

- *1-1) 2003年、新潟で空き家を活用した場所である「うちの実家」を開いた河田の発言（河田ほか，2013）。
- *1-2) 文部科学省「文部科学省のいろいろなデータ」のページによれば、2007年5月1日現在の全国の小学校数は22,693校である。また、一般社団法人日本フランチャイズチェーン協会（JFA）の「コンビニエンスストア統計調査月報」（2015年11月度）によると、2015年11月時点の全国のコンビニエンスストアの店舗数は53,309店である。「まちの居場所」の数は発言者によって大きく異なっているが、例えば、昆布山（2015）の発言に従えば「まちの居場所」は全国の小学校数より多いことになる。
 - ・「文部科学省のいろいろなデータ」 http://www.mext.go.jp/kodomo/new_html/data.html
 - ・「コンビニエンスストア統計データ」 <http://www.jfa-fc.or.jp/particle/320.html>
- *1-3) アンケート調査の有効配布数は478カ所で、有効回収率は34.7%である（大分大学福祉科学研究センター，2011）。
- *1-4) 1955年に発行された『広辞苑（初版）』には「いる所。いどころ。」という意味が掲載されている。これが『広辞苑（第二版）』（1969年）、『広辞苑（第二版補訂版）』（1976年）では「いるところ。また、すわるところ。いどころ。」と変更されている。その後、『広辞苑（第三版）』（1983年）から『広辞苑（第六版）』（2008年）までは再び「いるところ。いどころ。」と掲載されるようになっている。
- *1-5) 荻原（2001）は「居場所」という言葉がマスコミにしばしば登場するようになってきたのは、1980年代に入ってからになる。その頃、学校に行かない・行けない子どもたちが目立ち始め、登校拒否現象として社会問題になってきたことと深く関わったことであると述べている。
- *1-6) 例えば、藤竹（2000）は前者を「人間的居場所」、後者を「社会的居場所」と呼んでいる。
- *1-7) 浅川（2015）はこのように指摘しながらも、同時に「国や自治体が主導して互助の重要性を謳うことには、違和感がなきにしもあらずだが、仕方がない感もする。寄付文化が欠落している日本では、助け合い活動やNPO活動の継続性が難しい」とも述べている。
- *1-8) 本レポートでは筆者の日々のフィールドノートと写真、「居場所ハウス」の運営日誌、ゲストブック、定例会、行事・活動のチラシ、及び、オープンまでに開催されたワークショップ・会議の記録などを資料として用いる。
- *1-9) アンケート調査の概要は本レポートの巻末に掲載している。

第2章

- *2-1) Ibashoは設立以来、スリランカ、コートジボワール、ブータンで高齢者の住まいの計画・建設・改修のコンサルティングなどを行ってきた。2015年2月からは、2013年台風30号（台風ヨランダ）の被災地であるフィリピンのオルモック市で「Ibasho フィリピン」のプロジェクトをスタートさせている。Ibasho代表のEKさんによれば、高齢者の権利や地位の向上を目指す活動を行う上で、従来の介護や高齢者に対するイメージを想起させない言葉として、米国では外来語であるIbashoという言葉が団体名に採用したということである。Ibashoは当初は開発途上国でのプロジェクトを行う予定だったが、東日本大震災をきっかけとして日本でプロジェクト

を行うことになった。米国、及び、それまでにプロジェクトを行ってきた開発途上国において Ibasho は外来語だが、大船渡市末崎町でプロジェクトを行ったことで Ibasho は「居場所」と重なりをもって捉えられることになり、「居場所」創造プロジェクト、「居場所」ハウスという日本語表記が採用されることになる。この点について筆者は、「居場所」が大船渡市末崎町において意味をもつ言葉だったからだと考えている。ワシントン DC の非営利法人 Ibasho の 8 理念 (図 2-1) を、具体的な場所作りによって実現しようとすることは、日本語の「居場所」という言葉がもつ多様な可能性を実現しようとするものと重なる部分が多いからである。ただし、ワシントン DC の非営利法人 Ibasho においては、具体的な場所 (まちの居場所) 作りはあくまでも 8 理念を実現するための 1 つの手段であることは確認しておきたい。実際に「Ibasho フィリピン」では最初から「まちの居場所」のような場所を作るのではなく、ペットボトルのリサイクル活動、農園での野菜作りからプロジェクトが始められた。

*2-2) オペレーション USA (Operation USA) は米国ロサンゼルスに拠点を置く国際 NGO。1979 年の設立以来、99 ヶ国でプロジェクトを行っている

・「Operation USA」 <http://www.opusa.org/>

*2-3) 正式名称は「ハネウェル・ヒューマニタリアン救済基金」。この基金はハネウェル社の社員の寄付金によるものである。

*2-4) サポートセンター (高齢者等サポート拠点) は「震災で被災された要援護高齢者などを中心に、市内全域の皆さんの生活支援や地域の人の交流を手助けし、安心な日常生活を送ってもらうことなどを目的として設置」されたもので、2012 年 6 月 15 日 (金)、大船渡市内に 4 ヶ所開設された (『広報大船渡』No.985 2012 年 6 月 20 日号より)。末崎地区サポートセンターは社会福祉法人 T が委託を受け運営している。当初、末崎地区サポートセンターは独立した建物を持たず、社会福祉法人 T が運営する末崎町デイサービスセンター内で運営されており、2013 年 4 月 2 日 (火) から、現在の建物での運営が始まった。

*2-5) Ibasho によるオペレーション USA への提案書には「Cafe (カフェ)」という表記が用いられており、末崎町でのプロジェクトが始まった当初は「Ibasho カフェ (居場所カフェ)」という呼称が用いられている。一方、「居場所創造プロジェクト」という名称は、事務局を担っていた社会福祉法人 T が NPO 法人設立の補助金を受けるために内閣府「SEEDx 地域未来塾」に申請した事業名である。2012 年 9 月 15 日 (土) に開催された NPO 法人の設立総会では、定款案に法人名として「居場所創造プロジェクト」が記載されていた。設立総会の議論で、「居場所創造プロジェクト」という呼称はわかりにくいと、法人名とは別に建設する場所に愛称をつけた方がよいという提案がされた。愛称については最初、「居場所カフェ」という提案があったが、カフェはわかりにくいので「居場所ハウス」にするのはいかがかと提案された。こうした経緯で、NPO 法人の名称が「居場所創造プロジェクト」とされ、建設する場所には「居場所ハウス」という愛称がつけられることが決定した。なお、設立総会では「居場所ハウス」より相応しい愛称が出てくれば変更する可能性があることについて言及されているが、その後、「居場所ハウス」という愛称は定着することとなった。

*2-6) 「デジタル公民館まっさき」の「まっさきのわかめ養殖の歴史」のページによると、ワカメ養殖の技術が完成したのは昭和 32 年 (1957 年) である。

・デジタル公民館まっさき「まっさきのわかめ養殖の歴史」 http://www.massaki.jp/?page_id=2071

*2-7) アンケート調査では地域活動への参加状況を「公民館」、「自治会」、「老人クラブ」、「婦人部」、「消防団」、「PTA」、「青年活動」、「民生委員」、「お祭り・郷土芸能」、「同好会・サークル活動」、「ボランティア」、「その他」

の12の選択肢で質問した。12の中で1つでも参加していると回答した人を、図2-11では地域活動に参加している人と分類している。なお、12の選択肢は、2013年に大船渡市で実施したアンケート調査の結果をふまえて設定したものである。

*2-8) 本レポートでは運営日誌に、その日の担当者（当番）として名前が記載されている人を「スタッフ」と呼んでいる。ここに記したように「スタッフ」は日によってパートの日とボランティアの日とがある。

*2-9) 「居場所ハウス」はこれまでに大船渡市共生型施設立ち上げ支援事業（2013年度）、公益財団法人・地域創造基金さなぶり「ジャパン・ソサエティ東日本大震災復興基金（ローズファンド）」（2014年度）、日本NPOセンター「「しんきんの絆」復興応援プロジェクト」、日本たばこ産業「NPO助成事業」、公益社団法人・24時間テレビチャリティー委員会、末崎公益会（2015年度）などからの補助を受けている。また、ハネウエル社からはオープン後も建物のメンテナンス費の補助を何度か受けている。

*2-10) 「デジタル公民館まっさき」は、「霞が関ナレッジスクエア」が2011年から実施しているNPO事業サポートセンターの「復興支援ITボランティア活動」を新たな形で継続するもので、2013年から復興庁（文部科学省）の「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」の採択を受け実際されている。末崎地区公民館「ふるさとセンター」を拠点とし、「ITボランティア活動に参加している地域住民、末崎地区の産業づくり、まちづくりの担い手や関心ある住民、末崎地区出身者などを対象にワーキングチームを組織し、地域再生や地域人材の育成などをテーマにした学習活動を実施し、また、地域情報の開発、創出に取り組んでいる。事務局は「霞が関ナレッジスクエア」が務めている。

・「デジタル公民館まっさき」 http://www.massaki.jp/?page_id=449

第3章

*3-1) 来訪者数は運営日誌、ゲストブックより集計した。ゲストブックにはその日の「スタッフ」ではない運営メンバー（表2-6）の名前も記載されている。従って、ここでいう来訪者には、その日の「スタッフ」ではない運営メンバーも含まれている。なお、既に述べた通り本レポートでは運営日誌に、その日の担当者（当番）として名前が記載されている人を「スタッフ」と呼んでいる。

*3-2) 天候は運営日誌の天気欄に基づいており、天気欄に「雨」「雪」「台風」の文字が記載されている日を「雨・雪」に、それ以外の日を「晴・曇」に分類した。運営日誌がつけられるようになった2013年6月20日（木）から2015年12月末までの間に「晴・曇」の日は601日あり、具体的には「晴」「晴・曇」「晴のち曇」「晴時々曇」「曇」「曇・晴」「曇のち晴」「曇時々晴」「半晴」と記載された日が含まれる。一方、「雨・雪」の日は158日あり、具体的には「雨」「雨・曇」「雨・曇のち晴」「雨のち晴」「雨のち曇」「雨時々曇」「小雨」「小雨のち雪」「小雨のち曇」「晴・雨」「晴・曇・雪」「晴のち雨」「晴一時雨」「晴時々わか雨」「晴時々雨」「晴時々雪」「雪」「雪・曇」「雪のち雨」「雪のち晴」「雪のち曇」「台風」「大雨」「大風・大雪」「曇・雨・曇・小雨」「曇・小雪」「曇・雪」「曇のち雨」「曇時々雪」と記載された日が含まれる。

*3-3) 「晴・曇」と「雨・雪」の日の来訪者数について、統計的な検定を行うと次のようになる。行事・活動が行われている日については、「晴・曇」の日の来訪者数と「雨・雪」の日の来訪者数のF検定を行うと $P(\text{片側}) = 0.000000000000024 < 0.05$ となり両者の分散には有意差がある（不等分散）。次に両者のt検定を行うと $P(\text{両側}) = 0.023 < 0.05$ となり両者の平均には有意差があると言える（有意水準5%）。一方、行事・活動が行われていない日については、「晴・曇」の日の来訪者数と「雨・雪」の日の来訪者数のF検定を行うと $P(\text{片側}) = 0.45 > 0.05$ となり両者の分散には有意差がない（等分散）。次に両者のt検定を行うと $P(\text{両側}) = 0.42 > 0.05$ となり両者の

平均には有意差がないと言える（有意水準 5%）。

*3-4) 平日と土日祝日の来訪者数について、統計的な検定を行うと次のようになる。行事・活動が行われている日については、平日の来訪者数と土日祝日の来訪者数の F 検定を行うと P （片側）= $12.0 > 0.05$ となり両者の分散には有意差がない（等分散）。次に両者の t 検定を行うと P （両側）= $0.00000028 < 0.05$ となり両者の平均には有意差があると言える（有意水準 5%）。一方、行事・活動が行われていない日については、平日の来訪者数と土日祝日の来訪者数の F 検定を行うと P （片側）= $1.2 > 0.05$ となり両者の分散には有意差がない（等分散）。次に両者の t 検定を行うと P （両側）= $0.80 > 0.05$ となり両者の平均には有意差がないと言える（有意水準 5%）。

*3-5) アンケート調査では「居場所ハウス」への来訪の頻度を「ほぼ毎日」「週に 3～4 日」「週に 1～2 日」「月に数回」「月に 1 回」「その他」の 6 つの選択肢で質問した。本レポートでは「月に 1 回」以上来訪すると回答している人を「定期的に来る人」、「その他」と回答している人を「定期的に来ない人」に分類している。「その他」という回答には「1 回だけ」「1、2 度」「年に数回」のように頻度が少ないという回答、「イベントがあった時」「興味のあるイベントがあるとき」のようにイベントがある時だけという回答、「仕事の関係上」「用事がある時」のように仕事や用事があるときのような回答などが含まれている。なお、123 人のうち 10 人は来訪の頻度が無回答であった。

*3-6) 地域活動に参加している人については *2-7) を参照。

*3-7) 末崎町内の 17 の地区にある公民館とは「自治公民館」であり、社会教育施設としての公民館とは異なる。地区の中心となる「自治公民館」の建物は、地区住民の共有財産である。

第 4 章

*4-1) この日、2 人は直接顔を合わせたわけではない。そうであるにも関わらず、筆者を含めた人々が 2 人の関係を認識できていることに注目する必要がある。もしこの 2 人が互いの家から電話で話をしているのであれば、筆者を含めた人々がそのやりとりを知ることはできない。筆者を含めた人々がこのエピソードを把握できたのは、「居場所ハウス」という場所で居合わせていたからである。鈴木（2004）が「あなたがそこにそう居ることは、私にとっても意味があり、あなたの環境は、私にとっての環境の一部でもある」と表現するように、直接関わらないとしても他者は意味のある存在であり、他者は決して風景ではないのである。これをふまえ、鈴木は「環境をデザインするには、一般的に行われているような当事者のための環境デザイン（当事者が欲しているものを提供する）だけでは足りず、その人と環境の関係が周囲にどういう意味をもつかを考慮した視点が必要になってくる」と述べる。

*4-2) オープン後しばらくして、「居場所ハウス」で地域通貨を導入しないかという提案がなされたことがある。「居場所ハウス」において、ある個人が他の個人に対して行った行為をカードに記録していき、記入欄が埋まれば金券として利用できるという内容の提案であった。しかし、議論の中で「居場所ハウス」においては、他の個人に対する行為ではなく、「居場所ハウス」という場所自体に対する行為が多いことが明らかとなり、カードに記入する行為の宛先を他の個人ではなく「居場所ハウス」に変更することが検討されたという経緯がある。地域通貨とは一定の空間的な範囲を定め、その中で人間関係を築くことを目指すものと言える。しかし、空間には人間関係の範囲を限定する役割があるだけでなく、空間自体が行為の宛先になることでそこに関わる人々の関係を築くためのきっかけになるのである。なお、「居場所ハウス」で地域通貨を導入するという話は立ち消えとなった。

第5章

*5-1) 2013年6月29日(土)の定例会では、RTさんには月・火・金・土曜の週4日、パートを依頼することが決定された。また、水曜はボランティアをしてもよいという申し出のあった人にボランティアを依頼すること、日曜はコアメンバーが週替わりでボランティアを担当することが確認された。しかし、水曜のボランティアを依頼予定だった人から、ボランティアできないという話があり、急遽、RTさんには月・火・水・金・土曜の週5日、パートを依頼することになった。

*5-2) 社会福祉法人Tがどの時点までプロジェクトに関わると決められていたのかは文書や議事録への記載がないため不明である。ここに述べた通り、オープン直後は末崎町の人々で運営していく体制が整っていなかったため、2回目の運営会議が行われた2013年7月5日(金)まで社会福祉法人Tの職員が事務を担当していた。ただし、末崎町の人々の側には事務を引き継ぐ体制が整っていなかったため、きちんと事務の引き継ぎがなされなかったのも事実である。なお、この日から現在に至るまで社会福祉法人Tは法人として「居場所ハウス」の運営には関わっていない。現在の関わりとしては社会福祉法人Tが委託運営する末崎地区サポートセンターが主催する「居場所健康クラブ」が毎週水曜日に行われているだけである。ただし、社会福祉法人Tの職員という立場ではなく、個人として「居場所ハウス」の行事の際に協力したり、子どもを連れて遊びに来たりする職員はいる。

*5-3) パートが1人の時は都合が悪い時に交代を頼める人がいなかったため、この時は3名にパートを依頼することとし、現在、月・火・水・金は3人が2人ずつ交代で運営を担当している。パート2人の都合が悪く1人になってしまう場合は、コアメンバー、「おたすけ隊」メンバーに協力を依頼し、1人で運営を担当する日がないようにしている。

*5-4) 毎週日曜はコアメンバーが週替わりでボランティアで運営を担当しているのは、「居場所ハウス」の運営をパートに任せきりにしないようにと考えられてのことである。なお、今後もずっとパートを雇用し続けるか否かについては、NPO法人としての方針はまだ決められていない。

*5-5) GSさんが館長の肩書きが入った名刺を使い始めたのは2014年4月からである。

*5-6) 「わらしっ子見守り隊」の結成により幼児・児童の受け入れ体制は整ったが、現時点(2015年12月末時点)で一時的な依頼はなく、今後のあり方を検討している途中である。

*5-7) 筆者は2014年3月24日(月)のフィールドノートに「今の「居場所ハウス」は自立を目指す思春期、反抗期のような時期を迎えているのかもしれない」と書いている。この頃の「居場所ハウス」は、末崎町の人々が、プロジェクトの生みの親とも言える設立に携わった人々から独立していく過程にあるように感じたからである。「まちの居場所」の運営体制が築かれるプロセスを人生になぞらえるのは適切でないかもしれないが、地域外からの働きかけでスタートしたプロジェクトが地域に根ざすためには、人間でいう思春期、反抗期のようなプロセスを経る必要があるのではないかと考えている。余談であるが、筆者は2013年11月末からSNSサイトに「居場所ハウス」についての記事を投稿し始めた。理事と運営メンバーの意見の対立は見られたが、それを乗り越えていくため「居場所ハウス」が生み出している価値を共有することから始めるしかないと考えてのことであった。2013年12月24日(火)のフィールドノートには「ささやかかも知れないが、素敵なことはたくさん見つかる。こうしたささやかかも知れないが、素敵なことを集めるのも、研究者の役割かなと思う」と記している。「研究者」というより、距離をおいて場所を見ている者の役割と言い換えるべきかもしれないが、この考えは現在でも変わっておらず、地域の人々に「居場所ハウス」の価値を伝えることも本レポートの目的の1つである。

*5-8) バート (2006) は「構造的隙間とネットワーク閉鎖性は、生産的な方法で組み合わせることが可能である」と指摘している。この点については、現在、次のような動きが見られる。2015年1月9～10日に、「居場所ハウス」の運営を中心になって担っているGSさん、TKさんが、ワシントンDCのIbashaがプロジェクトを進めるフィリピンのレイテ島オルモック市のバゴング・ブハイ地区と、レイテ島カナンガのマサラヤオ地区を訪問した。バゴング・ブハイ地区では「Ibasha フィリピン」のメンバーに対して「居場所ハウス」の活動を紹介した。2015年3月14～15日には、「Ibasha フィリピン」のメンバー3人が「居場所ハウス」を訪れ活動の様子の見学、意見交換を行った。さらに、2015年10月23～29日にはTKさんが再びフィリピンのレイテ島を訪問し、「Ibasha フィリピン」のメンバーに農園での野菜作りの方法を伝えるなどの活動を行った。このようにIbashaが「居場所ハウス」と「Ibasha フィリピン」を仲介することにより、新たな価値が生み出されているのである。田中(2008b)は、地域にとって外部の者が地域の場所にアクセスするには、その「場所の主(あるじ)」というキーパーソ的な存在との出会いが重要であることを明らかにした。「場所の主」とは「場所に(いつも)居て、その場所を大切に思い、その場所(の運営)において何らかの役割を担っている人であり、その場所とセットでしか語り得ない人」である(田中, 2010)。「居場所ハウス」の場合、地域外から提案されたプロジェクトが、末崎町の人々が中心となって運営するまでに時間を要したのは、オープン直後の「居場所ハウス」には「場所の主」が存在しなかったからだと捉えることができる。

第6章

*6-1) オープン直後のみ2013年6月13日(木)～9月30日(月)までの3.5ヶ月である。

*6-2) NPO法人・居場所創造プロジェクトが主催する行事と記載するのが正確であるが、本レポートではこれを「居場所ハウス」が主催する行事と記載することとする。

*6-3) 当初は被災地支援か否かに関わらず、「居場所ハウス」が主催しない行事・活動の場合、会場使用料を支払ってもらうことにしていた。しかし、被災地支援に来ている団体や個人から会場使用料を受け取るのはおかしいという意見が出されるようになったため、2014年6月頃から、被災地支援の場合は会場使用料を免除するようになったという経緯がある。

*6-4) GSさんが作成した「居場所感謝祭」の実施要領より。語句は一部変更している。

*6-5) 高田人形は「江戸時代末期から昭和30年代ころまで、農家や左官職人の副業として作られていたとされる土製の人形。胡粉(ごふん)で彩色され、魔よけの赤に白梅の模様を描いたものが多い」。高田人形は現在の高齢者が子どもだった時代には身近なものだったが「現在では保存する家庭も少ない上、大津波によって流出したものも多数あり、さらに貴重な品となった」(「きらびやか7段飾り 貴重な「高田人形」も」・『東海新報』2014年2月16日)。

*6-6) 「第3回東北トリップ」の参加者による報告書「3rd Tohoku Trip Report」より。

*6-7) 屋外のキッチンスペースは「スマイル食堂」と呼ばれているが、当初、TKさんは「料理ハウス」と呼んでいた。当時TKさんは、料理は家庭的なもので誰でも作れるもの、調理は専門家が作るものというイメージがあるため、「居場所ハウス」では調理ではなく、料理と呼んだ方がいいと話していた。

*6-8) オープンから2015年12月末までの間に、共催行事として開催されたものは2014年12月21日(日)にデジタル公民館まっさき、ふらいパンダ、三陸みらいシネマと共催したクリスマスキッズデー、2015年8月9

日（日）にデジタル公民館まっさきと共催した夏休みもの作り教室の2回である。

第7章

*7-1) 樹木を寄贈するという申し出があったにも関わらず、すぐに植樹が行われなかったのは、TKさんは「居場所ハウス」の運営に関わっていくか否かを決めかねていたのだと考えることができる。2013年10月時点では「居場所ハウス」の運営について見通しが立っていなかったことがこの出来事にも現れている。なお、モミジとツツジを植樹した1週間後に開催されたNPO法人の総会でTKさんは理事に就任した。

第8章

*8-1) このような広がりのある関係について、ジェイコブズ（2010）は以下のように指摘している。「都市街路の信頼は、街頭で交わす数多くのささやかなふれあいにより時間をかけて形づくられています。ビールを一杯飲み、酒場に立ち寄りたり、雑貨店主から忠告をもらって新聞売店の男に忠告してやったり、パン屋で他の客と意見交換したり、玄関口でソーダ水を飲む少年二人に会釈したり、夕食ができるのを待ちながら女の子たちに目を配ったり、子供たちを叱ったり、金物屋の世間話を聞いたり、薬剤師から一ドル借りたり、生まれたばかりの赤ん坊を褒めたり、コートの色褪せに同情したりすることから生まれるのです。慣習はさまざまです。飼犬についての情報交換をする近隣や、家主についての情報交換をする近隣もあります」。

*8-2) 2016年1月11日（月）には初めての試みとして、地域の歴史に詳しい方を講師に招いた講演会「郷土の歴史を学ぶ会」を開催した。講演会は「居場所ハウス」と「デジタル公民館まっさき」の共催で行われたもので、小学生を含め68名が参加した。

*8-3) 「まちの居場所」では、「この人がいるから、この場所が成立している」と思えるような人に出会うことがある。田中（2010）では、このような人を「場所に（いつも）居て、その場所を大切に思い、その場所（の運営）において何らかの役割を担っている人であり、その場所とセットでしか語り得ない人」とし、「場所の主（あるじ）」と呼んでいるが、「場所の主」とは「まちの居場所」の理念・目的と、日々の運営とを意識的、あるいは、無意識的に橋渡しするための価値観をもつ人だと考えることができる。現在、「まちの居場所」を必要としているが、自分たちだけでは実現できない地域や人々が存在しており、そうした地域や人々に対して、どのようなサポートを行えば「まちの居場所」を実現できるかが課題になる場面があると思われる。この点については、筆者は現時点で答えを持ち合わせていないが、物理的な空間（ハード）や特定の目的をもったプログラム（ソフト）を提供するという方法ではないと感じている。「まちの居場所」が広がっていくことの核には、「場所の主（あるじ）」という存在への、あるいは、「場所の主（あるじ）」がもつ価値観への「感染的模倣」（ミメーシス）（宮台、2009）である可能性がある。

*8-4) 山本は、ホスピタリティはサービスではなく「広い意味での文化技術」であり、コミュニケーション、もてなしではなく「しつらえ」ではないかとした上で（山本、2003）、「しつらえ」について次のように指摘している。「ホスピタリティは「もてなし」ではない、むしろ《しつらえ》である。人と人との関係が成立しうるために、場を〈しつらえる〉のだ。モノによって雰囲気によって、言葉にならぬものによって《しつらえ》がなされる。つまり、人とモノと場所とが非分離になる環境がしつらえられることである。したがって、ホスピタリティは「コミュニケーション」ではない。ある場の《気》をつくりだすことだ。「気に入る」「気がおちつく」「気がやすまる」場をつくりだす」（山本、2006）。本レポートではこの議論を参考にし、「しつらえ」という言葉を用いている。

*8-5) 田中ほか（2007）では、「まちの居場所」の1つとして「ふれあいリビング・下新庄さくら園」を対象とする調査を行った。「ふれあいリビング・下新庄さくら園」は地域の人々の「ふれあい」の場所になることを目的

として開かれた。代表の女性はオープン当初は何らかの行事・活動に参加することを「ふれあい」だと考えていたが、運営を続けるうちに、行事・活動に参加したり、会話したりすることを求めるだけでなく、1人で過ごしたい人に対してはそっとしておくのも大事だと考えるようになったと話していた。このことから、「ふれあいリビング・下新庄さくら園」では行事・活動への参加から、多様な関わりへの許容へと、目的とされている「ふれあい」が意味する内容が豊かになっていることを明らかにし、「まちの居場所」の目的（の中身）は、運営を始めた後に事後的に形作られていくと捉えた。本レポートにおける理念・目的を実体験を伴ったものとして共有していくというのは、こうした現象のことである。

*8-6) ゴフマン（1980）は「「無目的」でいたり、何もすることがないという状態を規制するルールがある」ために、「仕事中に「休憩」したい人は、喫煙が認められているところへ行って、そこで目だつように煙草を吸う」、「魚などはいないから自分の瞑想が妨げられるおそれのない河岸で「魚釣り」をしたり、あるいは浜辺で「皮膚を焼いたり」するのは、瞑想や睡眠を隠すための行為」になるというように、人は「誰の目にも明らかに行為をすることで自分の存在を粉飾する行為」をするのだと述べているが、これは、何らかの大義名分がないと、特定の目的をもたずに過ごすことは周囲の人の目に不自然に映るということである。

*8-7) 澤田（2016）は地球規模で生じている種々の災害を乗り切るためには市場、政府、コミュニティ／社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の3者の補完が重要だと指摘している。お店という形態で運営されている「まちの居場所」が、多様な人々の関係を築くことにつながっているというのは、金銭的なやりとりがコミュニティへの関わりにつながっているという意味で、市場とコミュニティが互いに補完しあう仕組みになっていると捉えることができる。

*8-8) 橋（1997）は人と環境の関係のモデルとして「人はある明確な意図・目的を持って行動しており、ある目的を達成するための場を選択し、そこに行って目的を果たして帰ってくる」という「意図支配モデル」と、「まずは地域での行動・生活があり、そこでさまざまな相互作用の結果、その場・その時の状況によって自分との関係付けが形成される」という「行動先行モデル」の2つをあげている。人々が居合わせる状況から様々なことが生まれるというのは、橋は「行動先行モデル」とは「人と環境との相互作用によるより柔軟な関係」であり、「とくに身体的・社会的状態の変化が激しく、また個人差も大きい高齢者が住み続けられる地域環境を考えたとき、人と環境との関係の柔軟さは重要な視点となると思われる」と述べている。

*8-9) セネット（1991）は「あらゆる種類の社会関係は、それが個々の人間の内的な心理的関心に近づけば近づくほど真実で、信頼でき、真正なものである」という信念を「親密さのイデオロギー」と呼び、「親密さのイデオロギー」が支配的になれば「人々が近づけば近づくほど、人々の関係はより社交性の乏しい、より苦痛な、より兄弟殺しのものになる。「都市は……、他の人々を人間として知らねばという強迫的な衝動なしに人々と一緒になることが意味のあるものになるフォーラムでなければならない」と述べている。筆者は、「まちの居場所」は「親密さのイデオロギー」から解放される必要があると考えている。

*8-10) 第1章で紹介した齋藤（2000）による公共性という言葉がもつ意味の分類に従えば、ここでは「国家に係る公的な（official）ものという意味」で公共という言葉を使っている。

*8-11) ヒビノ（2015）は「そろそろ「地域課題を解決する」という思い込みから抜け出したほうがいい」という記事において、「今大事なのは「いかにして、自分の地域を差別化するか？」「他の地域に勝つか？」「問題を解決し続けるか？」という発想ではなく、「いかにして光る場を作り出すか？」ということ」であり、「世界観の実現」だと指摘している。

*8-12) 鷺田 (2002) は「「ある目的のために」というテレオロジー (目的論) 的な思考においては、ひとの活動はすべて目的-手段の連鎖のなかに閉じ込められる」のであり、「プロジェクト、プログラム、プログレス (進歩)、プロデュース、プロモーションのプロという接頭辞に示されるような前のめりの姿勢」から解放される必要があると指摘する。生み出されたものを事後的に共有するためには、鷺田の言う「前のめりの姿勢」から解放される必要がある。例えば、補助金への申請などで「まちの居場所」の活動計画を立てる場合、行事・活動であれば「イベントを〇〇回開催し、〇〇人の来訪が見込まれる」というように成果を数字で表現しやすいが、日常の場所であることの成果は表現しにくい。こうした活動計画に縛られてしまうと、行事・活動を開催して、人を集めることだけが目的になる恐れがあるのである。今、求められるのは特定の目的をもった行事・活動が行われていない時間帯がもつ意味を、豊かなものとして表現し共有するための技である。

*8-13) 筆者は 2015 年 6 月 20 日に「居場所ハウス」のそれまでの活動のあゆみを記録した冊子を編集した (田中, 2015a)。この冊子も「居場所ハウス」が生み出してきたものを事後的に共有するきっかけになることを意図したものである。

参考文献・資料

■参考文献

- ・荻原健次郎（2001）「子ども・若者の居場所の条件」・田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房
- ・大分大学福祉科学研究センター（2011）『コミュニティカフェの実態に関する調査結果 [概要版]』大分大学福祉科学研究センター
- ・河田珪子 清水義晴（2013）『誰でも参加できる「居場所」づくり』在宅介護支援協会
- ・清田英巳 アレン・パワー 高橋杏子 田中康裕 原田麻穂（2014）『Ibasho カフェー大切にしたいことー（2nd Edition）』Ibasho
- ・Emi Kiyota, Yasuhiro Tanaka, Margaret Arnold, and Daniel Aldrich, (2015) “Elders Leading the Way to Inclusive Community Resilience (Conference Version),” The World Bank
- ・アーヴィング・ゴッフマン（丸木恵祐 本名信行訳）『集まりの構造』誠信書房 1980年
- ・小松尚（2010）「居場所が変える都市と建築」・日本建築学会編『まちの居場所ーまちの居場所をみつける／つくる』東洋書店
- ・昆布山良則（2015）「コミュニティカフェ “続けること”が重要」・『シルバー新報』2015年6月12日号
- ・齋藤純一（2000）『公共性』岩波書店
- ・ジェイン・ジェイコブズ（山形浩生訳）（2010）『[新版] アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会
- ・鈴木毅（2005）「再構築に向けて」・『建築雑誌』Vol.120, No.1533, 2005年5月号
- ・鈴木毅（2004）「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会
- ・リチャード・セネット（北山克彦・高階悟訳）（1991）『公共性の喪失』晶文社
- ・橋弘志・高橋鷹志（1997）「地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究」・『日本建築学会計画系論文集』第496号, pp89-95 1997年06月
- ・橋弘志（2010）「居場所にみる新たな公共性」・日本建築学会編『まちの居場所ーまちの居場所をみつける／つくる』東洋書店
- ・田中康裕 鈴木毅 松原茂樹 奥俊信 木多道宏（2007）「「下新庄さくら園」における目的の形成に関する考察ーコミュニティ・カフェにおける社会的接触ー」・『日本建築学会計画系論文集』No.613, pp.135-142, 2007年3月
- ・田中康裕（2008a）「コミュニティ・カフェによる暮らしのケア」・高橋鷹志 長澤泰 西村伸也編『環境とデザイン（シリーズ〈人間と建築〉3）』朝倉書店
- ・田中康裕 鈴木毅（2008b）「環境デザインプロセスにおける地域の場所へのアクセスに関する考察ー千里ニュータウン・新千里東町における灯りイベントの実施プロセスを対象としてー」・『日本建築学会計画系論文集』No.630, pp.1715-1722, 2008年8月
- ・田中康裕（2010）「場所の主（あるじ）」・日本建築学会編『まちの居場所ーまちの居場所をみつける／つくる』東洋書店
- ・田中康裕（2014）「未来を拓く 居場所ハウス」・『シルバー新報』環境新聞社, 2014年7月25日, 8月1日, 8日, 22日, 29日号（全5回）
- ・田中康裕編（2015a）『居場所ハウスのあゆみ（2015年夏版）』Ibasho
- ・田中康裕（2015b）「試行錯誤により再構築されていく地域ー岩手県大船渡市「居場所ハウス」が目指すものー」・『近代建築』pp.30-35, 2015年10月
- ・東京文化財研究所編（2014）『ごいし民俗誌ー岩手県大船渡市末崎町碁石五地区ー』東京文化財研究所
- ・日本建築学会編（2010）『まちの居場所ーまちの居場所をみつける／つくる』東洋書店
- ・ロナルド・S・パート（金光淳訳）（2006）「社会関係資本をもたらずのは構造的隙間かネットワーク閉鎖性か」・野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論』勁草書房

- ・藤竹暁（2000）「居場所を考える」・藤竹暁編『現代人の居場所（現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3）』至文堂
- ・藤本健太郎（2012）『孤立社会からつながる社会へ』ミネルヴァ書房
- ・宮台真司（2009）『日本の難点』幻冬舎新書
- ・山本哲士（2003）「対談 文化経済とホスピタリティ」・『LIBRARY iichiko（特集：資本とホスピタリティ）』No.80, 新曜社
- ・山本哲士（2006）『ホスピタリティ原論』新曜社
- ・鷺田清一（2002）『死なないでいる理由』小学館

■参考ウェブサイト

- ・浅川澄一（2015）「行政が目論む「安上がりの介護へ転換」の実態」・『ダイヤモンド・オンライン』2015年9月16日号 <http://diamond.jp/articles/-/78587>
- ・澤田康幸（2016）「学術研究から見た社会関係資本（Social Capital）とIbashoの意義」・『NPO法人Ibasho Japan』2016年1月 http://ibasho-japan.org/resources/160108_lecture
- ・ヒビノケイコ（2015）「そろそろ「地域課題を解決する」という思い込みから抜け出そう。妄想から始まる「世界観の表現」へ」・『ヒビノケイコの日々。人生は自分でデザインする。』2015年3月9日 <http://hibinokeiko.blog.jp/archives/23562348.html>
- ・「Ibasho」 <http://www.ibasho.org>
- ・「Ibasho Japan」 <http://www.ibasho-japan.org>
- ・大船渡市「大船渡市統計書」 <http://www.city.ofunato.iwate.jp/www/contents/1147396552984/index.html>
- ・大船渡市「広報大船渡」 <http://www.city.ofunato.iwate.jp/www/genre/0000000000000/1000000000378/index.html>
- ・大船渡市応急仮設住宅支援協議会「大船渡仮設住宅団地 Official Site」 <http://ofunatocity.jp>
- ・大船渡市応急仮設住宅支援協議会「大船渡市災害公営住宅 Official Site」 <http://ofunatocity.jp/kouei/>
- ・「デジタル公民館まっさき」 <http://www.massaki.jp>
- ・「ハネウエル居場所ハウス」 <http://ibasho-house.jimdo.com>

アンケート調査の概要

アンケート調査はワシントン DC の非営利法人 Ibasho と米国パデュー大学との共同研究であり、調査においては世界銀行防災グローバル・ファシリティ (GFDRR) の協力、大船渡市の後援を受けて実施した。

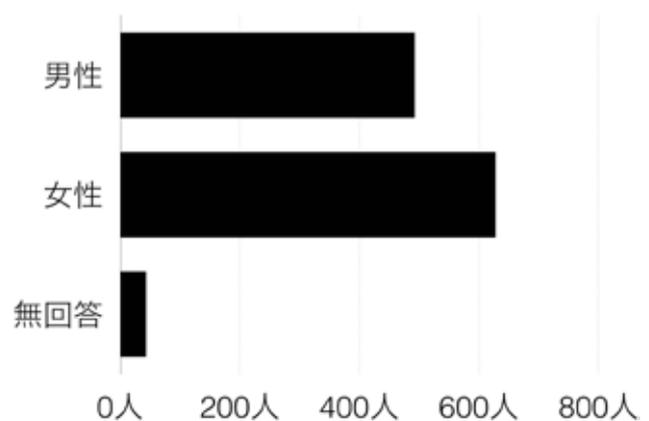
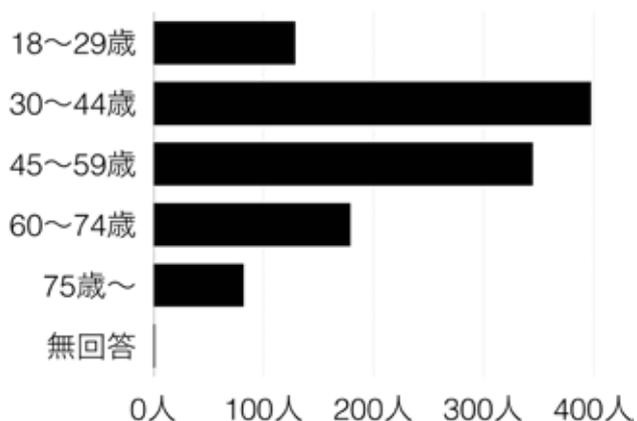
アンケート調査の対象は大船渡市に住む 18 歳以上の住民である。調査では年齢、性別、居住地などの回答者の属性、仮設住宅での暮らし、今後の住まいの予定、復興に対する意識「居場所ハウス」に対する関わり方などを 35 の項目で調査した。調査は 2014 年 10 月に実施し、有効回答者数は 1,164 人である。このうち、245 人が末崎町の人、911 人が末崎町以外の町の人である (表 9-1)。

回答者の年代は 30～44 歳が最も多く、次いで、45～59 歳、60～74 歳の順に多くなっている (図 9-1)。回答者の性別は女性が 628 人、男性が 493 人、不明が 43 人であり、女性が男性より多い (図 9-2)。

(表 9-1) アンケート調査の概要

調査対象	配布枚数	回答期間	有効回答数	末崎町	大船渡市 (末崎町除く)	回収率
居場所ハウスのスタッフ・来訪者	38	10月9日(木)～27日(月)	24	24	0	0.63
末崎小学校児童の保護者	340 (170×2)	10月10日(金)～31日(金)	61	61	0	0.18
末崎中学校生徒の保護者	200 (100×2)	10月15日(水)～29日(水)	25	25	0	0.13
末崎町の仮設住宅の住民	418 (209×2)	10月7日(日)～19日(日)	69	69	0	0.16
医療法人 S のスタッフ	257	10月11日(土)～22日(水)	235	24	207	0.91
大船渡市 (末崎町除く) の仮設住宅の住民	1,233	10月12日(日)～25日(土)	221	0	221	0.18
大船渡市役所職員	610	10月15日(水)～27日(月)	529	42	483	0.87
合計			1,164	245	911	

※末崎町の仮設住宅、末崎中学校生徒の保護者、末崎小学校児童の保護者には、封筒に 2 枚の回答用紙を入れて配布し、同居する家族で回答してもらった。



(図 9-1) 回答者の性別

(図 9-2) 回答者の年代

国際長寿センター (ILC-Japan)

国際長寿センターは、少子高齢化に関する諸問題を国際的・学際的に調査研究、広報啓発することを目的とし、1990年に日本とアメリカに設立されました。以来、プロダクティブ・エイジングの理念のもと、世界17カ国の姉妹センターとともに、いきいきとした高齢社会を実現するために活動をつづけています。

著者：田中康裕

特定非営利活動法人 Ibasho Japan 副理事長

東京大学大学院経済学研究科 特任研究員

1978年京都府生まれ。2007年3月、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。近年各地に開かれている「まちの居場所」、計画された住宅地(ニュータウン)におけるアーカイブ作り等の研究・実践を行う。清水建設技術研究所の研究員等を経て、2013年5月より「居場所ハウス」(岩手県大船渡市)の運営・調査に携わる。2015年8月より特定非営利活動法人 Ibasho Japan の副理事長。2015年12月より東京大学大学院経済学研究科・特任研究員。主な共著に『環境とデザイン(シリーズ〈人間と建築〉3)』(朝倉書店, 2008年)、『まちの居場所』(東洋書店, 2010年)。「まちの居場所」の活動記録として『街角広場アーカイブ'07』(ひがしまち街角広場, 2007年)、『居場所ハウスのあゆみ』(Ibashi, 2015年)などを編集。ウェブサイトは <http://newtown-sketch.com>。

平成 27 年度
プロダクティブ・エイジング実現に向けた
「まちの居場所」の役割と可能性
～岩手県大船渡市「居場所ハウス」の取り組みから～
報告書

平成 28 年 3 月

一般財団法人 長寿社会開発センター
国際長寿センター

〒105-8446 東京都港区西新橋3-3-1
西新橋TSビル6F
Tel. 03-5470-6767 Fax. 03-5470-6768

禁無断転載

本研究は全国生活協同組合連合会の2014年度「社会福祉事業等助成事業」、及び、全国労働者共済生活協同組合連合会の2014年度「社会福祉活動等助成事業」の助成を受けたものである。

